

Ⅲ 学校評価学校関係者評価

1. 学園保幼小中一貫教育報告一覧

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
1 峰山学園	【教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【目指す子ども像】 ○主体的に学び続ける子ども ○人を思いやり仲間と共に高め合える子ども ○粘り強く挑戦し続ける子ども
2 大宮学園	(1) 教育目標 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 (2) 目指す子ども像 ○ 意欲的に学び、チャレンジする子ども (知) ○ 自他を大切にし、思いやりのある子ども (徳) ○ 心身を鍛え、活動的な子ども (体)
3 網野学園	【教育目標】 将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】 意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】 規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】 粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども
4 丹後学園	教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】
5 弥栄学園	1 教育目標 【ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで自他を大切にして、たくましく生き抜く子どもの育成】 2 目指す子ども像 (1) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む (2) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間を大切にし、ともに知恵を絞る (3) 心身をきたえ、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける
6 久美浜学園	【教育目標】 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 【目指す子ども像】 (知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども (徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども (体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2. 京丹後市立こども園、学校評価自己評価報告一覧

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
1 峰山こども園	“元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ〜い好き！” ～互いに認め合える心豊かな子どもをめざして～ 1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 2 主体的に活動し、友達と関わりながら、夢中になって遊び込める環境を整え、持続力や協同力を育てる。 3 身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 4 互いの良さを認め合い、心豊かに意欲的に活動する力を育てる。
2 大宮こども園	○人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子ども ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ○テーマ 『わくわく げんき えがおのわ』 ～伸び伸びと遊び、ともに育つ子どもをめざして～

学 園 名	「目指す子ども像」、教 育 目 標
3 網野こども園	『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる。』 (あ)明るく元気で主体的に活動する子どもの育成 (み)みんななかよく思いやりのある子どもの育成 (の)伸び伸び生き生きやりぬく子どもの育成 <テーマ> 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』
4 丹後こども園	・生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 ・地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 ・職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。
5 弥栄こども園	1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 2 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 3 身近な人や地域に関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。
6 かぶと山こども園	こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持った たくましい子ども」 「元気 勇気 笑顔 つながれ仲間」 ～やってみたい！やってみよう！一人一人が輝くために～ 1 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にする心を育てる。 3 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
7 峰山小学校	多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。
8 いさなご小学校	教育目標「ふるさとを愛し 多様な人となつながら学び探究し続け子どもの育成」 目指す子ども像 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども
9 しんざん小学校	【峰山学園 教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人となつながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【峰山学園 めざす生徒像】 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども
10 長岡小学校	「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標 「ふるさとを愛し、多様な人となつながら学び、探究し続ける子どもの育成」に迫る。 〈峰山学園 めざす子ども像〉 ・主体的に学び続ける子ども ・人を思いやり仲間と共に高め合える子ども ・粘り強く挑戦し続ける子ども
11 大宮第一小学校	「学校教育目標」(長期目標) ◆自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校 【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校 【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校 【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校 【地域の方】
12 大宮南小学校	「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども(知) ・自他を大切にし、思いやりのある子ども(徳) ・心身を鍛え、活動的な子ども(体) 全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成を目指す。
13 網野北小学校	1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。
14 網野南小学校	網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
15 島津小学校	「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る」 (知)意欲的に学習に取り組む子ども (徳)規範意識をもち、仲間と支え合う子ども (体)粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 網野学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。
16 橘小学校	【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども の：のびのび生き生きやりぬく子 【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
17 丹後小学校	教育目標（丹後学園共通） 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 ＜目指す学校像＞ 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校
18 宇川小学校	夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 (1) 言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) (2) 自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) (3) ねばり強く身体を鍛える子(体)
19 吉野小学校	1 生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくりを推進し、生きる力の確実な習得と、言語能力を高め、課題解決に向けて思考力を育む教育の推進 2 主体的に行動できる力と豊かな人間性を育み、個々が大切にされる心の教育を推進する。 3 学園の保幼小中一貫教育を、校種間における様々な取組等を充実させながら推進する。 4 家庭、地域とつながり、信頼される学校、特色のある学校づくりを推進する。
20 弥栄小学校	「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、たくましく生き抜く子どもの育成」 ・ 知識と技を磨き、活用する子 ・ 自他の良さを知り、共に伸びる子 ・ 心身をきたえ、何事もやりぬく子
21 久美浜小学校	教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心を持ち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども（知） (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども（徳） (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども（体） 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～ 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード「ポストコロナを受け【創造と協働】」的な業務推進
22 高龍小学校	意欲的に生活・学習に取り組むたくましい子どもの育成 ― 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ― 1 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども 2 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども 3 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子ども ※ 保護者・地域に信頼される学校
23 かぶと山小学校	1 久美浜学園教育目標 2 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」めざす児童像 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子 (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子
24 峰山中学校	【教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【めざす生徒像】 (1) 主体的に学び続ける子ども (2) 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども (3) 粘り強く挑戦し続ける子ども 【重点課題】（社会的自立につなぐ教育） (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 (2) 「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育の推進 (3) つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止

学 校 名	学 校 ・ 園 教 育 目 標
25 大宮中学校	(大宮学園教育目標) 「自他を尊重し、自ら学ぶ子どもの育成」 (大宮中学校重点目標) 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～人権尊重を基盤に、個をほめて、集団で認めて、他者（集団）とつなぐ～ (実践上の視点) ○生徒一人一人が「自己指導力」を身に付けるための支援（あらゆる教育活動の中で） ・「安全・安心な風土」の醸成 ・「自己存在感」を育てる ・「共感的な人間関係」を育てる ・「自己決定の場」の提供 ○「居場所づくり」と「絆づくり」 ・自己存在感が感じられる場所作り（教職員） ・主体的・共同的な活動を通して「絆」を紡いでいく（生徒自身）
26 網野中学校	将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 1 規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 3 思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。
27 丹後中学校	○確かな学力の育成とわかる授業づくりのための不断の工夫改善 ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の充実の推進による教育活動の充実
28 弥栄中学校	1 「誠実」を大切にし、全教職員で、生徒・保護者、地域との信頼関係を築く。 2 主体的・対話的に学び、互いに認め高めあうことを通して、人権尊重に基づく人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 3 基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくり（わかる・できる授業、小中の円滑な接続）を進める。 4 知識技能を活用し、自ら考え、判断し、探究する力・表現する力を伸ばす生徒を育てる。 5 主体的に未来を見つめ、そのための今を大切にし、自分の進路に向かうことができる生徒を育てる。
29 久美浜中学校	<久美浜学園> 指導の重点：学力向上 (1) 基礎・基本の徹底 (2) 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) (3) 家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前なのが当たり前でできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にする学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 1 非認知能力の伸長と、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 2 好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 3 不登校の未然防止と不登校（傾向）生徒の改善 4 「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立

令和6年度 峰山学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

【教育目標】

「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」

【目指す子ども像】

- 主体的に学び続ける子ども
- 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども
- 粘り強く挑戦し続ける子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

【経営方針】

(1) 夢や希望をもち、多様な人とつながりながら生き生きと活動する学園【幼児・児童・生徒】

- ア 自分の将来を展望し、主体的に学ぶ（遊ぶ）ことができる取組を進める。
- イ 互いの思いや考えを認め合い、高め合えることができる取組を進める。
- ウ 粘り強く挑戦し、自らの心や体を鍛えることができる取組を進める。

(2) 子どもの社会的自立に向けて、全教職員が責任をもつ学園【教職員】

- ア 幼児児童生徒の願い・希望・悩みに正面から向き合い、共感的理解と指導に努める。
- イ 幼児児童生徒の考えを広げ深める授業・生活の創造に取り組み、専門性の向上を図る。
- ウ 就学前から、社会的自立に向けて一貫性・系統性のある指導を行う。
- エ 互いに学び合い、協働的な教育活動を展開する組織を構築する。
- オ 保護者や地域の人達と連携して幼児児童生徒の社会的自立を図る指導を進める。

(3) 保護者・地域とともにある学園【保護者・地域】

- ア P T A・地域と連携した自己有用感を高める取組を進める。
- イ 保護者・地域へ双方向の情報発信を行う。
- ウ 学校運営協議会を核とし、峰山町民が学校の教育活動を積極的に支援する取組を進める。

【指導の重点】

「確かな学力の育成（授業研究）」「コミュニケーション能力の育成」「評価を見通した取組の充実」を各子ども園・小・中学校の教育活動や校内研究・研修に位置付ける。

(1) 確かな学力の育成

他者と関わりながら深く学び、社会的に自立して主体的に生き抜くための学力を育てる。そのために、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた教育を土台にして、幼児期から中学校まで一貫した教育を進める。（遊びや授業の研究）

ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習や遊びを進める。

- ①学習や活動に関心をもち、粘り強く取り組み、次につなげようとする主体的な学び・遊び
- ②他者との対話やかかわりをもとに考え、自分の考えを広げ深めようとする対話的な学び・遊び
- ③各教科の「見方・考え方」を働かせながら、関連付けたり情報を整理したりして問題を解決しようとする深い学び
- ④探究的な学習活動を通して全ての学習の基盤となる資質・能力の育成
- ⑤授業と関連させた家庭学習の質的転換

イ	タブレット等のICT器機を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを実現する。(小・中学校)
ウ	単元全体を通して「付けたい力」を踏まえた指導計画と授業設計に努める。(小・中学校)
(2) コミュニケーション能力の育成	
	遊びや学習を通して、ことばによる伝え合いを軸とした学びや、他者との共感的人間関係を育成することなど、自立に向けて幼児期から中学校までの一貫した実践を進める。
ア	幼児児童生徒が安心できる「居場所づくり」(心理的安全性)を進める。
イ	お互いを認め合う心の醸成を図る。
ウ	人とつながり学ぶ楽しさ(協働性)を味わわせ、ことばで伝え合う力を育む。
	(自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成)
(3) 評価を見通した取組の充実	
ア	学園評価・学校評価の結果に基づく学園経営の充実
イ	教育評価・指導評価の結果に基づく教育実践の改善
ウ	「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果に基づく教育実践の改善

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての園・学校が、目指す子ども像・教育目標を共通化 (2) 学園内の全ての園・学校が、学園経営方針を各学校の経営方針へ位置付け (3) 学園内の全ての園・学校が、学園経営の課題・重点について各学校の経営方針へ位置付け	(1) 幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像、目標方針の共有について ○年度当初の研修会を集合型で実施し、峰山学園の幼児・児童・生徒実態から明らかにした経営方針を全教職員で確認し、運営できた。 ○児童・生徒の状況については、各会、部会で共通理解を図り、取組に生かしている。担任会でも、児童の状況について交流し、指導方法を学び合うことができた。 (2) 学校運営及び進行管理 ○経営会議を定期的開催し、学園内の教育課題の把握・整理を行いながら、教育目標・目指す子ども像の実現を目指して経営を行うことができた。 ○経営会議で、運営会議、教育課程会議、生徒指導部会、学習指導部会の取組等を把握するとともに方向性を確認することができた。 ○今年度も共同学校事務室室長も経営会議に参加して学園の重点や取組を把握し、児童生徒の学習環境や学園予算の検討など、共同学校事務室の運営に生かすことができた。 ○学園児童・生徒アンケート、教職員アンケートの結果について、運営会議で丁寧分析ができた。この分析をもとに次年度の改善策を考えていく。 ○運営会議で計画した教頭が行事へ参加できるよう、各校で調整を図った。
就学前から中学校卒業までを見	(1) 峰山学園の目指す子ども像を見通した指導と教育課程の作成	(1) 0期、Ⅰ期～Ⅲ期をより意識した指導 ○教育課程会議で「(0) Ⅰ～Ⅲ期における『目指

通して一貫した指導、教育課程	ア 自己肯定感を育てる授業づくり・生活づくり ・学習指導要領の趣旨を踏まえ、確かな学力の充実・向上のために、「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善 ・授業と連動させた家庭学習 ・ICTの効果的・効率的な活用 イ 0期～Ⅰ期、Ⅰ期・Ⅱ期（汽水域を含む）・Ⅲ期の指導目標を踏まえた一貫した指導＜(0)Ⅰ～Ⅲ期における『目指す姿』一覧＞ ・小6児童の不安感や中1生徒の困り感の再検証…中1ギャップの捉え直し ・単元全体を通して「付けたい力」を踏まえた指導計画と授業設計に努める。 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ・指導体制の工夫 ・小学校高学年での一部教科担任制 ・中1ふりスタ（正式名称 中学校1年生集中振り返り学習） ・小学校4年生ふりスタ ・中学校体験授業（年1回） ・「5年生・6年生の心構え」 ・夢・未来式（小学校4年生）、立志式（中学校2年生） ウ 園小の接続を中心とし教育課程の編成と一貫した指導 ・アプローチカリキュラム、スタートカリキュラムの実践と検証（「幼保小架け橋プログラム」の内容を反映したスタートカリキュラム、アプローチカリキュラムになるよう見直す。） (2) 不登校・いじめの解消 ア 安心して学べる（遊べる）環境づくりについての研究（心理的安全性の醸成） イ 「5・6年生の心構え」と各校の実態を踏まえて、積極的な生徒指導を行うとともに、生徒指導の4つの視点を生かした学級づくり・授業づくりについて研究 ウ 不登校の未然防止に向けて組織的な取組を進める。 ・学園内で気になる子どもの実態交流を行い、幼児期・学童期・思春期の変化とその時期に大切な支援や指導について研究 ・小・中の引き継ぎシートの丁寧な作成・	す姿』一覧」について見直しを図った。年度末研修会で全教職員に周知し、来年度から実践を積み上げていきたい。 (2) 就学前からの一貫した指導の充実、教育課程編成 ○年間10回の経営会議を実施し、10年間を見通した指導について取組を進め、保幼小中一貫教育を推進することができた。また、教育支援部会・こども園の参加の1年担任会の取組で、園児・児童が付けた力を踏まえた接続を意識した支援を行った。 ○年4回の全教職員の研修会を研究の節目として位置付け、「一貫した指導」について共有し、実践の成果を明らかにしてきた。学園の教職員が共通に学び方向性を再確認することができた。 ○指導の重点である確かな学力の育成を目指し、昨年度から重点目標を「主体的・対話的で深い学び」とし、視点を具体的に示し、児童生徒が主体的に学びに向かう授業改善の視点を明確にして実践できた。 ○秋季研修会は長岡小学校で開催し、全学級の授業公開や研究協議を実施した。授業では、対話を通して学び合うことや、発問により対話が生まれ深い学びに繋がること等を学ぶことができた。研究協議では、「主体的・対話的で深い学び」を実現する学習や遊びに向けて、心理的安全性を基盤とすること、子どもが主体となるよう教師は伴走すること、学びを深めるために、教科の見方・考え方に着目すること等について深めることができた。 1校の研究を全員で参観・共有できる良さがあるため、次年度以降も1校開催とする。 R7：峰山小 R8：いさなご小 R9：しんざん小の予定だったが、R8年度に長岡小といさなご小が適正配置されるため、しんざん小と入れ替え、R8しんざん小、R9いさなご小とする。 ○●担任会の協議内容として、教科や単元を決めて教材研究ができた。しかし、単元全体を通して「付けたい力」を踏まえた指導計画を立て授業設計をする必要性を提起することが十分ではなかった。指導の重点(1)ア③にあるように、見方・考え方を働かせながら問題を解決する深い学びのための教材研究としたい。5・6年担任会には中学校からも参加しているので、Ⅱ期の修了を見通し「中1ギャップ」についてさらに研究していく。 ○●昨年度教育課程会議で作成した「家庭学習において目指す姿」系統表をもとに各校で実践を進めた。担任会では、探究的な家庭学習についての実践交流を行った。Ⅱ期、Ⅲ期で計画的に家庭
-----------------------	---	--

	引き継ぎ（引き継ぎシートは、毎年経営会議で見直す。） ・教育支援部会で具体的な事例研究（SC・SSW の専門的な見立てからの学び）	学習ができる力を付けさせていきたい。 ○●「夢・未来式」「立志式」に取り組み、自分の夢や将来について意識の向上につながった。第4学年をⅠ期の修了学年ととらえ、自分の成長・将来への展望について各校で取組を進めることができた。今年度の学園の目標を踏まえて教育課程会議でそれらの目標を見直した。学園としてねらいや趣旨を共通化して、育成すべき力の実現を目指していく。 ○1年担任会では、こども園の園長・担任がすべて参加し園小連携を行った。こども園・小学校での指導を交流・理解し、それぞれの指導に生かすことができた。 ○●こども園から小学校へ、小学校から中学校への子どもに関わる情報の引き継ぎについては、個人情報であることを踏まえ、対応と内容については、毎年確認をして連携する。 アプローチカリキュラム・スタートカリキュラムを見直し、園で育んだ力(10の姿)を小学校の指導に生かせるように研究・実践した。1年担任会で幼小連携について研究し、各校の実践につなげることができた。 ○こども園の参観は2つの園に参観者を分け、調整して実施した。10年間のスタートである0期の実践を参観して、自分から人と関わるための環境設定や、思いや行動を引き出すために、どのようにことば掛けを行っているかを学んだ。参観後の交流は取れないが、感想は紙面でこども園に提供できた。次年度も、夏季研修会の午前中に参観し、午後の全体研修では幼児期の指導について<u>実践報告</u>を行う。 ○各校で積極的な生徒指導の取組として児童会・生徒会活動等だけでなく、日々、肯定的な評価や違いを認める指導を行っており、おおむね落ち着いた状況で生活できている。 ○●SNS アンケート実施・結果分析・活用、篠原講師による SNS 講演会等の取組をとおして、SNSに係る指導を小・中学校で進めることができた。今年度は、7月に講習会を実施し、夏休み前の指導に活用できた。暑い中での講習会であったため、来年度は時期を変更する。 ●SNSにかかる指導については、メディアコントロールが弱い実態を踏まえ、峰山学園PTAとの連携が必要である。 ●「5・6年生の心構え」は、令和3年度に変更して現在の内容になっている。内容を変更した趣旨を共有し、全員で確認をしながら指導を進めていく必要がある。
--	---	---

幼児児童生徒、 教職員の交流と 協働	(1) 「目指す子ども像」の実現 ⇒教職員の協働及び教職員の交流 ア 教職員の合同研修会・実践交流の実施 イ 授業づくりを通じた研修会 ウ 担任会を通じた研修 (2) 「集団の中で豊かに人とのかかわる力」や「コミュニケーション能力」を高めることを目的とした子どもの交流を図る行事等の計画・実施 ア 峰山中学校合唱祭（6年生が練習を参観、体験授業） イ 部活動体験 ウ 合同授業・学びの交流等 エ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業実践 オ クリーンキャンペーン カ SNS 講演会	○「主体的・対話的で深い学び」を推進するために、学習指導部が作成した『『主体的・対話的で深い学び』を実現するために こども園、小・中学校で大切にしている視点』に沿って各小中学校ともに授業研究に取り組むことができた。授業研究等でも、この視点に沿って研修できた。 ○全教職員の研修会・各部会を通して、教職員の交流を図ることができた。夏季研修会では、岐阜聖徳学園大学 教授 福地淳宏様に「主体的・対話的で深い『子どもの学び』を教室で実現するために～端末活用と『探究』を見据えて～」と題し講演をしていただいた。振り返りやアウトプットの大切さ等について学び、指導の一貫性につながった。 ○特別支援学級「ふれあい交流会」では、小学校1年生から中学生までが楽しめる内容が工夫され、中学生が中心となって進め交流できた。 ○部活動体験・体験授業・ふれあい交流会等、交流を通して中学校への不安を軽減することができた。部活動体験では、優しく丁寧に指導する中学生の姿から「あこがれ」を感じることもできた。体験授業では、中学校のイメージが身近なものになった。他校の児童と交流する機会にもしていくために、目標を見直していく。また、児童の主体性を重視し、なるべく希望する教科学習が体験できるようにする。部活動体験・体験授業ともに次年度も1回の実施とする。 ○クリーンキャンペーンは、今年度、小学校は社会科の学習や総合的な学習の時間と絡められるように3年生が参加することとした。地域の方と一緒に取り組める行事であり地域性を育む観点からも、課題を精査し内容の充実を図った上で継続できるように検討していく。 ○1学期から中学校への見通しをもたせるために、6月に合唱祭の練習の参観を行った。部活動体験は暑さを考慮し11月中旬に、体験授業は11月下旬に実施した。
家庭、地域との 連携、情報発信	(1) 中学校区の家庭教育の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）を踏まえた「峰山学園」PTA統一目標の設定 (2) 「峰山学園」PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画・実施 (3) 「峰山学園」学校評価に基づく学校関係者評価委員による評価の実施と学園の目標、教育活動の保護者・地域住民への積極的な情報発信 (4) 峰山町民が学園の教育活動に積極	○学園の課題（基本的な生活習慣や家庭学習習慣の確立、ほめて育てる家庭教育等）と連携した峰山学園PTA統一目標を策定し、具体的に「峰山学園PTAみんなでおはよう運動及び交通安全指導」を実施できた。 ○保幼小中一貫教育学園コーディネーターの役割を明確にし、学園だより・ホームページ・リーフレット等での発信が定着してきており、学園の教育活動を保護者・地域に丁寧に広報することができた。 ○峰山学園地域コーディネーターを窓口とし、学校支援ボランティア等を活用し、話を聞いたり

	的に参加し、支援できる仕組み（学校支援ボランティア 峰山学園学校運営協議会等）の機能化と充実	体験したりする機会を設けて学べた。地域の方が学校教育活動に積極的に参加できる取組を進められた。
--	--	---

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
・峰山学園として、昨年度までの10年間の成果・課題を明確にし、これからの10年を見据え、今年度、教育目標やめざす子ども像、評価等を改訂した。 ●コロナ禍で取組等が実施できなかった状況が数年続いたことで、保幼小中一貫教育の趣旨等の共通理解が薄れ、受け身になっている取組があった。 ○●課題であった「心理的安全性」については、児童生徒アンケート結果によると「安心して自分の思いや考えを表現している」項目で肯定的な評価が80%あり、教育相談部会や生徒指導部会及び学級経営や授業づくりにおいて教員が意識して指導をした成果であると言える。一方で、否定的な評価の児童生徒が20%いることも念頭に置き、指導・支援を継続していきたい。 ○●不登校の状況については、昨年度より小学校では改善、中学校では同等の傾向にある。アセスメントにより個に応じた支援（ケース会議で確認しながらスモールステップで段階を踏まえた指導・支援、個別に寄り添う関係作りの継続、校内フリースクールや学習ルーム、ホットルーム等、別室を工夫して利用した取組、非認知指導等）を進めてきた成果である。今後も不登校の未然防止に向けて、児童生徒が安心して学べる環境を整えていく。 ●課題であった「家庭学習などにおける主体的な学び」については、アンケート結果によると、児童生徒・教職員ともにあまり改善がみられなかった。学習指導部が中心となり改善策を検討していきたい。 ○●「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりについて、夏季研修会における講演、秋季研修会やその他の参観、担任会等において研修し意識を高めることができた。「深い学び」ができる授業を目指し、引き続き研鑽していきたい。 ○教育目標の「ふるさとを愛し」については、97%の児童生徒が「今住んでいる地域が好きである。」と回答している。今後も丹後学の推進や地域の方との連携を深めていきたい。	・今年度改訂した教育目標やめざす子ども像、評価等について、社会情勢や子どもの状況に応じて、適宜、見直していく。 ・保幼小中一貫教育が連携にとどまらず一貫教育となるよう、再度、個々の取組や目標を見直し、カリキュラムマネジメントを行いながら進める。生徒（会）と児童（会）との取組等も現有する組織の中で実施できるように検討する。そのための担任会の時間を確保する。（開始時刻を早めたり Teams の会議を必要に応じて適宜開催したりする。） ・授業づくりについては、「見方・考え方」を働かせたり、探究的な学習を手法としたりする「主体的・対話的で深い学び」の授業についての研究を深める。夏季研修会での講演では、「探究的な学び」について学ぶ。担任会では、これらを踏まえた授業を目指して教材研究や授業構想をする。 ・家庭学習を授業と連動させ、子ども達が自己調整をしながら計画的に取り組んだり、探究的な学びに繋げたりしていけるよう教職員が意識して指導を行う。 ・運営会議で計画した行事については、担当した教頭も参加し状況を把握する。 ・行事については、以下の通りである。

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 大宮学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

- | | |
|-------------|---|
| (1) 教育目標 | 自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 |
| (2) 目指す子ども像 | ○意欲的に学び、チャレンジする子ども (知)
○自他を大切にし、思いやりのある子ども (徳)
○心身を鍛え、活動的な子ども (体) |

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ※大宮学園を支えるのは「人権教育」、そして「ことばの力」の育成
- (1) 確かな学力の育成：「授業づくりの視点 9」「言語活用カリキュラム」の活用
- ア 基礎学力の向上を目指した授業改善（授業づくり）
- イ 小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」の実現による授業改善（授業づくり）
- (ア)「主体的・対話的で深い学び」を通して、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業研究を充実させる。
- (イ)これまでの「ことばの力の育成」「人権教育の推進」の視点を踏まえ、「探究的な学び」や「ICTの効果的な活用」「自己調整力の向上」等、これからの教育課題への連動を図る。
- (ウ)授業研究会・保幼参観の開催 6月：(大宮南小) 8月：(大宮北保育所)
- ウ 「ことばの力」の育成（言語活動の充実）を目指した授業改善（授業づくり）
- 言語活用カリキュラムの積極的な活用を年間通じて進める。（学力充実部会、担任会）
- エ 保幼小の接続のためのアプローチプログラム・小1スタートカリキュラムの自学園化
- (2) 人権意識の育成：「人権教育カリキュラム」の活用
- ア 人権教育の理念に基づく「自他を大切にする心」を育成するための教育活動の充実
- (ア)全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成し、そのための授業づくりの推進（各教科指導で3つの力を育成する指導を充実させる。）
- (イ)特に、授業や特別活動等を通じて、「話し合い活動」の充実を図る。
- イ 人権意識を育成するための人権学習の充実
- (3) ICTの積極的活用も含めた連携・体験活動の充実
- ア ICTを活用した効率的・効果的な連携教育活動・体験活動の充実
- イ 体験活動を通して「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成
- ウ 効率的・効果的な共通した学校のきまり（学習・生徒指導・家庭連携）
- エ 丹後学・キャリア教育の視点を踏まえた夢・未来式（小学4年生・中学3年生）の実施
- (4) 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働
- ア 学園の教職員が確実に出会い、話し合う機会の確保
- イ 担任会の充実
- (5) 家庭、地域社会への啓発、情報発信
- ア ホームページ、たより等を活用した情報発信
- イ 大宮学園の家庭教育の課題を踏まえた「大宮学園」PTA・保護者会の協働
- ウ 家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の継続と啓発、親のための応援塾の継続
- エ 大宮学園学校運営協議会での学園教育環境づくりの推進
- オ 「大宮学園」学校評価の実施と保護者・地域住民への啓発

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	(1) 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化する。 (2) 学園内の全ての学校園所が、学園経営計画を各校の経営計画へ位置づける。 (3) 学園内の全ての学校園所が、学園の子どもの実態・課題、学園重点方針等を各校の経営計画へ位置づける。 (4) 学園保幼小中一貫教育推進部会による実践研究成果を各校に波及させる。	(1) 学園教育目標及び目指す子ども像に向けて、学園内の2園所、3校での共通化して取り組んだ。 (2) 学園経営計画を各園所、学校の経営計画に位置づけ、経営の充実に取り組んだ。 (3) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営を統括し、一貫した教育指導・活動の充実に努めた。 (4) 確かな学力の育成に係り、「安心安全な居場所づくり」の視点を加えて改編した「授業づくりの視点9」を基に、授業改善に取り組んだ。このこととあわせ、「自己調整力を育む授業」について具体的に示したうえで、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の具体を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	(1) 大宮学園教育課程の編成 ア 汽水域指導プログラムの推進等 ・小中学校での乗入れ授業の計画・実施（加配の活用） ・小学校5・6年での一部教科担任制 ・中学校授業体験（実技教科と5教科） イ I・II・III期の学習への円滑な接続 ・アプローチプログラム、小1スタートカリキュラム（5歳児担任・小学1年生担任） ・夢・未来式の実施（小4年・中3年） ・学園ふりスタ（小学4年生・中学1年生） ・春季休業中の共通課題（小学6年生） ウ 家庭学習の充実 ・家庭学習の手引き ・家庭学習がんばり週（旬）間 (2) 学力充実向上に関する取組の進行管理 ア 学力調査と分析（各種調査の積極的活用） イ 学力向上のための授業充実・授業力向上 (3) 生徒指導・教育相談に係る情報の共有と連携 ア 小学校5・6年生の心得、共通の生活の決まり イ 情報モラル教室 ウ 保幼小中移行支援シート (4) モデルカリキュラムに係る推進 ア モデルカリキュラムの研修 イ モデルカリキュラムの年間指導計画への位置づけ	(1) 大宮学園教育課程の編成について ①汽水域指導プログラムの推進等について ・小中連携加配の乗入れ授業（理科）を実施することで、児童の実態把握や指導に効果が見られた。 ・生徒支援加配（人権教育）が小学校での学習補助を行うことで、児童支援や児童の状況把握に効果があった。 ・授業や部活動体験の実施により、児童の入学への楽しみや期待につなげることができた。 ②I期、II期、III期の学習への円滑な接続について ・園所と小学校との連携のもと、小1プロブレムの解消に向けての取組を行うことができた。今後も保幼小接続のためのアプローチプログラムと小1スタートカリキュラムの確実な実施に向けた取組を意識して行う。 ・小4と中3で、「夢・未来式」に取り組んだ。 ③家庭学習の充実について ・家庭学習の手引き、家庭学習がんばり週（旬）間により、家庭学習習慣の向上に取り組んだ。 ④人権意識の育成、「人権教育カリキュラム」活用について ・人権・生指・特活部会の提起により、大宮学園独自の「人権教育カリキュラム」の整理や周知を図るとともに、各校で進められている「人権月間」等とカリキュラムを連動させ、人権学習をはじめ様々な取組を進めることができた。 ・各校が取り組んできた人権学習や人権教育の視点を持って取り組んできた各種行事等の積み重ねにより、「他者の役に立っている」と回答した割合が三小中学校ともに向上した。

		(2) 学力向上に関する取組の進行管理について ①学力充実部で学力分析を行うとともに、視点を明らかにした大宮学園授業研究会を行い、「授業づくり」についての提起等、さらに具体化することができた。 ②教科指導の連携・接続を目指し、担任会、小中連携による指導研究に取り組んだ。担任会を通じて、「言語活用カリキュラムを活かした授業」「生徒指導を一体化した授業」「自己調整力を育む授業」の3つの視点に沿った授業研究を発達段階に応じて進めることができた。今後も普段の授業に位置づけ継続して取り組んでいく。 ③学園教育課程会議・学力充実部が中心となり、「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」を育成する授業改善につなげることができた。また、学園として伴奏支援をもらいながら今年度取り組んだ「自己調整力を育む授業」をキーワードにした研究について、各校の日々の授業や系統性について交流することができた。さらには、本年度は大宮南小学校での授業研究会を通して、学園としての授業づくりについて協議し、授業改善の在り方について深めることができた。 ④改編した「授業づくりの視点9」を効果的な活用の観点や実態に合わせて見直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善への視点として整理することができた。 (3) 生徒指導・教育相談の一貫・接続 ①学園として小中各校、一貫校PTAで情報モラル学習を実施し、SNSの安全な利用について学ぶことができた。 ②各校の実践や事例を交流する中で「生徒指導上の実践上の視点」の重要性を再確認することができ、今後も他分掌との協働的な活動の推進の必要性を確認できた。 (4) モデルカリキュラムに係る推進について ①学園としてモデルカリキュラムをもとにした授業の実施を行った。 ②今後もモデルカリキュラムに係る研究を推進していく必要がある。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	(1) 連携・体験活動 ア 人権意見発表会（学校毎） イ 合唱祭の取組（小学校6年生へ配信） ウ 体育祭（招待状） エ 部活動体験（10月予定） オ 体験授業（6月予定） カ 花いっぱい運動（学校毎） (2) 幼児・児童・生徒交流活動 ア 児童会・生徒会交流活動	(1) 連携、体験活動、幼児・児童・生徒交流について ①幼保、幼保小、小小、小中、幼保中それぞれの連携事業が計画に沿って進めた。園所と中学校による体育祭交流や小中学校合同の挨拶運動（ハイタッチモーニング）、中学校部活動体験などが実施できた。今後も幼児児童生徒の連携事業を進める中で、効果的で必然性のある連携・交流に整理し、より学園としての一体感や将来の自立につながる事業の推進を図る。

	イ 挨拶運動「ハイタッチモーニング」 「にこにこの日」の取組 ウ 生徒会アドバイス（予定） (3) 教職員の交流と協働 ア 担任会（小小担任会、小1担任と5歳児担任、小6担任と中1担任） イ 授業研究に向けた取組の推進 ウ 合同研修会・実践交流会の実施	②各小中学校でICT活用が進められている。小中学校それぞれでの活用について今後も交流し、年々変化する情報モラル教育の充実とともに児童生徒がスムーズにスキルアップできるようにしていく必要がある。 ③オンラインによる会議や活動についても環境を整え、効果的な活用を図る。 (2) 教職員の交流と協働について ①学園の教職員が確実に出会い、話合う機会の確保を大切に、年3回の担任会をはじめ、本年度は互助組合事業や懇親会等教職員の交流と協働を進めることができた。各会議や担任会の他、大宮北保育所での保育参観、大宮南小学校での授業研究会とその後の分散会、さらに、夏季全体研修会では大宮北保育所の参観と所長による講義と授業改善に係り伴奏支援をいただいている講師による講義などにより、園児の姿をとおして「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」、また「自己調整力を育む保育・教育」から幼保小中それぞれの発達段階における指導・支援等について学び合うことができた。 ②教職員アンケートから大宮学園の教職員の信頼・協働について肯定的な評価が高く、今後も効果的、計画的な研修・取組を工夫・継続していく。 ③3部会での現状分析、実践交流に取り組んだ。 ④事務部会では共同学校事務室として協働が進められ、人材育成を含め大きな成果があった。 ⑤担任会を年間3回計画し、ミッションをもって取り組んだ。次年度以降も実のある取組にすることが必要である。 ⑥幼保小中教員等の交流は一定進んだが、勤務の関係により保育所・こども園の先生方との交流が物理的に難しい。
家庭、地域との連携、情報発信	(1) 家庭教育課題を踏まえた「大宮学園」PTA統一目標の策定 (2) 大宮学園PTA家庭教育委員会による「家庭のやくそく」の取組 (3) 大宮学園PTA統一目標に沿った校区全体及び各学校での具体的取組の計画と実施 (4) 大宮学園学校運営協議会と連動した具体的取組（見守りと挨拶をセット） (5) 「大宮学園」学園評価の実施と家庭及び地域への啓発	(1) 大宮学園PTAの目標策定とともに、配布済の「令和版家庭の心得」を啓蒙することができた。 (2) 大宮学園PTA事業計画に基づき、「地域でおはよう挨拶運動」や「情報モラル学習会」等、計画的に実施することができた。今後も学園PTAの取組に保育所・こども園の保護者会をお誘いすることで連携を進めていく。 (3) 大宮学園学校運営協議会との協働を進め、見守りとセットの挨拶の取組を広く大宮地域に波及できるよう進めた。特にコーディネーターが中心となり、丁寧な連携が進められ、会員の皆様の思いや期待を運営に生かすことができた。地域との関係づくり、各取組への協働体制を築くことができています。 (4) 学園だより、ホームページの更新等で、各園所小中学校の取組や幼児児童生徒の姿が広く発信できた。

		(5) 学園評価を実施し、今後につながる評価をいただいた。 (6) 各関係団体との園所小中学校との連携した学びについて積極的に検討していく。
--	--	--

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
【成果】 (1) 学園教育課題、各会議・部会の推進状況を把握し、学園経営の統括、一貫した教育指導・活動を充実させることができた。また、年度当初、大宮学園教育推進計画を策定するとともに各会議のミッションを明確にすることができ、回数に限りのある部会で取り組むことが明確になった。 (2) 経営会議の方針のもと運営会議が学園運営を行う中で、教育課程会議、各部会で一致した取組を進めるシステムが機能した。 (3) すべての教育活動で「ことばの力」「思いやる力」「つながる力」の育成に向けて取組を推進することができた。 (4) 授業づくりに関わり、「探究的な学びにつながる授業改善」「自己調整力を育む授業づくり」等を視点として明確にした授業研究会や公開を通して、幼児期から小中学校への接続やその意義、授業研究の一貫性等大きな学びがあった。 (5) 「心理的安全性」を視点に加えて改編した「授業づくりの視点9」に基づき、「自己調整力」「探究的な学び」についても具体的に示したことにより、学園として、また各校での授業づくりの研究が深まり、授業における工夫・改善などが大きく見られた。 (6) 小中学校の不登校である児童生徒や配慮や支援の必要な幼児を含めた子どもたちの状況を共通認識し、支援の在り方を探ることができた。 (7) 不登校及び不登校傾向児童生徒に絞って事例研究を進めることで、不登校に陥る背景の多様さと小中学校で配慮すべきポイントについて共通理解を図ることができた。 (8) 学園の経営会議（校長）、運営会議（教頭）の両方で担当指導主事から具体的な資料を基に不登校の状況について確認する機会が設けられることで、教育支援部を中心として事例研究を通して不登校児童生徒の理解と支援について研究を深めることができた。 (9) 校種間連携の必要性への意識が高まり、大宮中学校の小学校在籍時の欠席状況の情報提供（未然防止の観点）及び不登校傾向となった生徒に絞った小学校在籍時の学習の状況や欠席状況の情報提供（早期対応の観点）が進んだ。	◎令和7年度は、大宮学園保幼小中一貫教育11年を迎え、これまでの成果・課題の整理とともに組織や各取組の検証を進め、次の5年に向けた学園の方向性を構想する1年とする。 【課題】に対して (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標、教育指導の重点、教育指導・活動の充実を図る。 ①市の教育課題改善のため、保幼小中一貫教育の目的についての共通理解を当初全体会で確実に挙げる。 ②学びのパスポートや人権アンケート、各種質問紙から大宮学園幼児児童生徒の実態や共通課題を整理する。 ③学びの基盤につながる「心理的安全性」や居場所のある教室、自他を尊重する心の育成を目指した「話し合い活動」の充実と、園所小中学校における連続性・系統性のある人権意識向上を継続する。 ④その具現化に向け焦点化した大宮学園保幼小中一貫教育の重点策定を行う。 ア 「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、「探究的な学びにつながる授業改善（授業づくり）」をはじめ、「今年度に引き続き「自己調整力を育む授業づくり」についての研究・実践をさらに推進する。 イ 人権意識の育成に向けて、「人権教育カリキュラム」を活用した人権教育を実施する。また、実施に向けた協議を大切にする。 ウ 「探究的な学びにつながる授業づくり」、「自己調整力の育成」に関わっても、ICTの積極的な活用を推進し、充実させる。 エ 目指す子ども像の実現を見通した教職員の交流と協働を進める。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 ①教職員の保幼小中一貫教育の意識のさらなる向上と、学園としての指導の一貫性へのさらなるステップアップを図る。特に幼保からの接続について継続して意識を高める取組を進める。（他市町からの転入者や新規採用者等の増加に伴い丁寧な説明を行う必要がある。）

(10) 大宮学園学校運営協議会では、「あいさつ」を中心に実行ある取組が進められた。(見守りとセットのあいさつの取組) (11) 小中連携事業の他、小小連携、幼保連携も可能な内容で実施ができ、継続した取組にすることができた。 【課題】 (1) 学園評価を受け、保幼小中一貫教育の3つの目的の共通理解を丁寧に行い、その共通理解に基づき、大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点、教育指導・活動の充実をさらに図る。 (2) 大宮学園保幼小中一貫教育の目標・教育指導の重点を踏まえ、一貫した教育指導・教育活動を一層充実させるための学園経営の充実を図る。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子どもが毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねていく。 (4) 教育支援が必要な幼児・児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 (5) 大宮学園学校運営協議会(学園コミュニティ・スクール)との協働をさらに進め、より地域とともにある学園(学校)を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を検討する。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議等ができ、大きな成果につながっている。半面、担任会等回数限定している分、具体的な指導の継続性が難しく、検討が必要である。	②各校持ち回りも授業研究会については、来年度市全体の授業研究会との兼ね合いにより開催は検討するが、本学園の重点内容を進めることで、「主体的・対話的で深い学び」を実現するための「探究的な学びの充実」につながる授業改善を目指していく。また、授業研究会を通して、「自己調整力」や「安心安全な居場所づくり」など、普段の授業で大切にすることを学園全体で確認し、幼児児童生徒の変容につながる継続した指導を行う。 ③これまでの「ことばの力の育成」「人権教育の推進」の視点を踏まえ、「探究的な学び」や「自己調整力の育成」等、今年度の研究・実践をさらに深める取組を行う。 ④年2回の全体会と夏季研修会や授業研究会等、今後も持続可能な研修・交流を計画し実施していく。 ⑤担任会・教科部会等を効果的・効率的に進める。 ⑥幼児児童生徒の交流や各園所小中学校の行事・取組等について、学園としての実施時期や内容等の検討・調整を丁寧に進める。 (3) 各校で不登校への対応を進めているが、結果として小中学校で学校に来にくくなる子どもが毎年出ている。不登校・特別支援教育・就学指導に係る学園課題に対して、さらに実践研究を積み重ねる。 ①児童生徒の円滑な接続のための個別記録の活用及び不登校・不登校傾向児童生徒に特化した事例研究を継続して行う。 ②教育相談、不登校、家庭支援に係る情報交流と指導の在り方について継続して研究を進める。 (4) 教育支援が必要な幼児児童生徒や、特別支援及び教育相談における校種間連携の仕組みを整え、校種間の円滑な接続を推進する。 ①幼保小連携事業・幼保中連携事業・小小連携事業・小中連携事業を通した担任会の充実を図る。 ②幼児の具体的な姿から「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を教職員で共有し、幼保小の丁寧な接続を継続する。 (5) 大宮学園学校運営協議会(学園コミュニティ・スクール)との協働をさらに進め、より地域とともにある学園(学校)を目指すとともに、地域に根差していくための工夫を考える。 ①大宮学園学校運営協議会の来年度の方向性を踏まえ、来年度当初の協議会で具体的な提案を行い、活動を通してより地域とともにある学園(学校)を目指す。 ②PTA・保護者会の事業の一体化について今後も無理なく進める。 (6) 各会議・部会等、継続して開催できるものは幼児児童生徒の継続した指導について協議、取組でき、大きな成果につながっているが、担任会等回数が限られており、指導の継続性も含めて難しく検討が必要である。
--	--

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

1 「目指す子ども像」、教育目標

【教育目標】

将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る教育の推進

【目指す子ども像】

あ：明るく元気に進んで学ぶ子

【知】意欲的に学習に取り組む子ども

み：みんななかよく支え合う子

【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子ども

の：のびのび生き生きやりぬく子

【体】粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 確かな学力の育成

ア 主体的に学ぶ力とコミュニケーション能力の育成

(ア) 生徒指導の4つの視点を生かした「わかる」「できる」授業の実現

(イ) 指導と評価の充実（指導と評価の一体化）

(ウ) ICTの活用による授業改善 (エ) 「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂

イ 補充学習の充実

(ア) 基礎基本を定着させるための個別補充学習

ウ 家庭学習の充実

(ア) 授業とつながる自主的な家庭学習の実現 (イ) 家庭と連携した学習習慣の定着の取組

(ウ) 家庭学習の指標づくり

エ 学園として、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に取り組む。

(2) 規範意識の醸成

ア 学習規律の確立

イ 生活習慣の確立

(3) 豊かな人間性の育成

ア 自尊感情の醸成

イ コミュニケーション能力の育成

ウ 将来を展望する力の育成

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	ア 学園内の全ての学校園所が、教育目標、目指す子ども像を共通化 イ 学園内の全ての学校園所が、学園経営方針・目指す教師像の経営方針へ位置付け ウ 学園内の全ての学校園所が、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の各学校園所の経営方針へ位置付け	ア 経営会議で確認した学園の教育目標や経営方針は、各学校園所の経営方針とつながっているようにするとともに、各学校園所・各会議・各部会は年間計画に沿って取り組み、目指す子ども像の実現に向けて実践を積み上げてきた。 イ 全教職員が一堂に会する第1回の研修会では、学園の経営方針の説明、推進会議担当校長より2年間の「非認知能力・認知能力を一体的にはぐくむ授業づくり」の研究の積み上げを共有し、今年度異動してきた教職員への理解を図った。また、学年部会や領域部会等を実施し、活動内容に必ず「網野学園で育成したい非認知能力」の実践や交流を入れることで具体的な取組につなげてきた。 ウ 学園評価アンケートによって課題を明らかにし、実践を振り返った。 エ 「網野学園保幼小中一貫教育だより」「網野学園保幼小中一貫教育教職員だより」「網野学園学校運営協議会だより」を通して、各学校園所・各会議・各部会・学校運営協議会の取組を共有することができた。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	ア 不登校の未然防止に向けて ・第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業と連携した取組 ・全ての幼児児童生徒にとって居場所となる魅力ある学校園所づくり	ア 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業最終年度の3年目を迎え、田爪教授の講演や授業研究会での指導講評等を積み重ね、「非認知能力」について全体で共通理解を高めてきた。また、ギミック・ブラッシュアップシートを活用した保育や授

	・早期発見・早期対応（連続3日 月3日 毎日の把握 不登校の兆候を捉える） ・社会的自立を目指した取組 ・組織的な取組（ICTの活用 関係機関との連携、保護者の心の安定） イ 0期、Ⅰ期、Ⅱ期、Ⅲ期の指導目標を踏まえた系統的な指導 ・「網野学園で育成したい非認知能力」の検討・改訂 ・学力向上システム・プログラムの見直しと活用 ・学力充実月間 ・家庭学習の手引きの活用・家庭学習がんばり週間の取組 ・小6授業体験 ・小6部活動体験 ・小6単元総括テスト ・小6学年末テスト・小6春季休業中の課題の見直し・実施 ・中1ふりかえり集中学習・小4ふりかえり学習 ・京丹後市保幼小中一貫教育モデルカリキュラムの積極的な活用 ウ 落ち着いた環境をつくるための規範意識の醸成 ・学園で目指す「これだけは」の取組 ・生徒指導・教育相談に係る情報共有 ・小小連携授業、小中連携授業 ・アプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践、検証 ・長期モデルプランアプローチプログラム・スタートカリキュラムの実践、検証 エ 思いやりを持ち仲間と共に生きる人間関係づくり ・生徒指導の4つの視点を生かした教育活動 ・ボランティア活動 ・あいさつ運動 ・Ⅰ期・Ⅲ期の区切りとなる取組（ととせの会 立志式）	業を実践した。 イ ギミックの実践は、幼児児童生徒の認知能力及び非認知能力をどの場面でどのように伸ばそうとするのかを具現化するものになってきた。保育・授業の中で育てたい力を意識する上で有効であり、認知能力と非認知能力を保育・授業の中で連続的、系統的に捉える意識につながっていた。ギミックという共通の実践でつながり学園及び各学校園所の研究を深めてきたことは、学園全体の組織的な取組として大きな成果である。 ウ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を保幼小連携部会で共有し、スタートカリキュラム・アプローチプログラムの実践と検証を行ってきた。また、各園所の実態に合わせてカリキュラムを見直すことにつながった。 エ 小学校から中学校への円滑な接続を目指し、小6の部活動体験・合唱祭と体育祭の取組見学・中学校授業体験を行った。体験や見学は、生徒主体で活動する姿から得ることや実感できる大きな意義があり、中学校入学に対する不安解消と期待、部活動選択の一助、小学校生活での意識の変化につなげることができた。また、日常的に小中連携加配教員による授業を小5・小6対象に行っていることで、中学校と小学校の授業の変化の差を小さくして不安を軽減させ、学習に主体的に向かおうとする高まりが見られた。 オ 小6では、問題と解答を別にした算数の課題に取り組みせることで中学校のテスト形式に慣れさせ、中学校入学後の不安解消をねらってきた。 カ 小中合同でアルミ缶回収ボランティア活動に取り組み、児童生徒が網野学園の一員であることを意識することができた。また、中学生が小学校に来校し一緒に活動することで、小学生は中学生に憧れをもち、より身近に感じるすることができた。中学生には、小学生が一生懸命に取り組む姿を見て、アルミ缶回収に取り組む意義を明確する機会となった。 キ 小2・小4と中1～中3を対象に、篠原嘉一氏（NIT情報技術推進ネットワーク）を講師に招いて情報モラルの学習が実施し、SNSやゲーム等の使用におけるトラブルを知り、今後の使用について見直すきっかけとなった。また、同じ日にPTA・保護者会を対象として講演会を実施し、児童生徒が学んだ内容と連動させて話を聴くことは、家庭との連携を図る上で有効であった。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	ア 目指す子ども像の実現に向けた教職員の協働及び交流 (ア) 教職員の合同研修会 (イ) 授業研究会、園所参観を通した研修会 (ウ) 学年部会を通した研修 イ 「自尊感情」と「コミュニケーション能力」の向上を目的とした交流事業 (ア) 小6合唱祭練習見学	ア 年間3回の全体研修会を実施し、全教職員で学び合ったり講演を聴いたりすることで非認知能力について理解を深め、共通認識を図ることができた。夏には全園所公開の保育研究会、秋には保幼小中一貫教育授業研究会を実施し、網野学園全教職員で事後研究会を行い、非認知能力育成のための保育・授業の研究協議を行い、理解と実践を高め合うことができた。 イ 5歳児交流会や特別支援学級友だち交流会を実施し、園所間や小中間の交流及び仲間を知ること

	(イ) 小6 体育祭取組見学 (ウ) 小6 部活動体験 (エ) 合同校外学習及び学びの交流 (オ) 小中合同交流事業（友だち交流会等） (カ) 小学校体験授業時の小1 との交流 (キ) 5 歳児交流会	ができた。また、学年部会や保幼小連携部会で教職員がつながり、取組方法や内容を確認し合ったり足並みを揃えたりしながら実践を重ねることができた。 ウ 生徒指導部会、教育相談部会、養護部会を開催し、児童生徒の実態等の共有を図ることができた。また、児童生徒の生活習慣や SNS との関連性の改善に向けて生徒指導部と養護部の連携ができた。
家庭、地域との連携、情報発信	ア 網野学園学校運営協議会の取組 (ア) 網野学園の教育や子育て環境について学校・家庭・地域が目標や課題を共有・協議し、具体的な取組を推進して学園の教育環境づくりを進める。 (イ) 網野学園保幼小中一貫教育の推進に向け、学校（P T A）園所（保護者会）、家庭、地域社会が連携・協働して取り組む。 イ 京丹後市 P T A 協議会網野小中一貫校 P T A の取組 (ア) 網野小中一貫校 P T A として、「学園合同あいさつ運動」等、一体となって取り組む。また、学園の「目指す子ども像」の実現に向け、保護者会とも連携して取り組む。 (イ) どの家庭でも、幼児期から大切に「これだけは！」（家庭編）の取組 ・基本的生活習慣の確立 ・規範意識の基礎の確立 ・家庭学習の習慣化 (ウ) 「子育て講演会（ゲーム・ネット講座）」については、主催は網野学園とし、運営は運営会議が行う。また、P T A 及び保護者会とも連携し進める。	ア 網野学園学校運営協議会を計画的に実施し、学校・家庭・地域が一体となった必要な教育支援について意見交流し、学校づくりへの参画意識が一層高められた。 イ 「網野学園これだけは！」（家庭編）の配付と活用を通して、保護者に保幼小中一貫教育で大切にしている視点を知っていただき、協力を得てきた。 ウ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターが中心となり、学園だより、ホームページ、リーフレット等を通して、学園の教育活動を保護者・地域に積極的に広報することができた。 エ 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業を活用し、京都ノートルダム女子大学高井教授に「幼児期に大切にしたい親子の関わり」について各園所においてオンラインによる講演をしていただき、保護者の学びの機会を設けることができた。 オ 網野学園あいさつ運動を学期1回設定し、保護者だけでなく関係団体や地域の方々と協力しながら、全ての学校園所で実施することができた。 カ 学校支援ボランティア等を活用して地域の方々の支援を得ることができ、網野町民にも教育活動に参加していただいた教育・保育活動を展開することができた。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
令和6年度網野学園経営及び進行管理について 成果 ア 経営会議を定期開催し、学園の教育課題を共有し、教育目標・目指す子ども像の実現に向けた経営を行うことができた。また、事務局は、事務局会議を開催し、学園経営の進行管理を行った。 イ 学園経営の基本方針に基づく「重点的な取組内容」を具現化するため、経営会議はその統括を行い、各会議・部会を組織的に進めることができた。 ウ 経営会議で運営会議、推進会議、領域部会の取組の進捗状況の把握と成果・課題を掌握・整理し、調整や改善に努めた。 エ 事務局部長が経営会議に参加することで、学園の取組を把握して運営費の調整に活かす	3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価、4 今年度の成果と課題 改善方策を踏まえ、以下を令和7年度学園経営での改善方策とする。 (1) 組織体制及び運営上の改善 組織体制について ア 経営会議は、学園内の教育課題、各会議・部会等の実践の進捗を把握し、年間を通して課題を整理するとともに、課題の改善・解消につながる取組を提起し、学園教育目標達成を目指した学園経営を行う。また、各会議・部会担当校長・教頭は、経営会議に連絡報告及び決済を受けながら、実践の方向性や目指すゴールのイメージを明らかにして取組を計画的に進める。 イ 事務局は、会議を適時に開催し学園経営の円滑な進行管理に努める。また、第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究成果を生かした新たな学園経営充実の進行管理に努める。

ことができた。

オ 全体研修会、授業研究会を計画通り実施することができた。

カ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターが各園所・小学校を訪問し、各校の授業の様子や取組をたよりやHPを通して紹介し、各学校園所を繋ぐことができた。

キ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターは、網野学園学校運営協議会の事務局長を務め、地域学校協働本部地域コーディネーターと連携して保護者・地域の方々の学園運営への参画意識の高揚に努めた。

ク 小1を対象とした「まなびスタート調査」や学力充実部のたよりにおいては、研究推進加配を活用し実施することができた。

ケ 第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究成果をもとに、さらに、「網野学園で育成したい非認知能力（指標）」を基に、学園として授業研究を進めていく。

引き続きの課題

ア 今年度の学園児童生徒アンケートの分析から、課題を明確にし、学園としての手立て、指導の方向性を明確にし、具体的な取組を進める。

イ 行動連携『どの家庭でも、幼児期から大切にする『「これだけは！！」(家庭編)』の中の、規範意識の基礎の確立の中で、「テレビ・ゲーム・インターネット・SNSなどのルールを決める」を挙げている。しかし、網野学園生徒指導部のアンケート結果からも、大きな課題になっている。

ウ 学園評価アンケートから「自己肯定感」や「将来の夢や目標」をもつ児童生徒の割合が学年が上がるにつれ、減少する傾向にある。

【網野学園児童生徒アンケートより】

- ・児童生徒アンケート肯定率80%以上の項目数
 小1 (19⇒16 /19) 小2 (19⇒13 /19)
 小3 (13⇒17 /19) 小4 (16⇒14 /19)
 小5 (10⇒12 /20) 小6 (17⇒14 /20)
 中1 (13⇒12 /20) 中2 (15⇒9 /20)
 中3 (13⇒16 /20)
- ・肯定的な評価が高い項目
 学習面：「授業が分かる」「自分の考えをもつ」「考えを交流する」「人の話を聞く」
 生活面：「時間を守る」「きまりを守る」「友だちのよいところ見つけ」「いじめはいけない」「最後までやり遂げる」
- ・「学習意欲」「家庭学習」「自尊感情」「将来の夢や目標」に課題が見られる。

ウ 保幼小中一貫教育学園コーディネーターは、各学校園所への訪問や各会議・部会に参加し、状況把握と内容整理、調整を図る。

運営上の改善について

ア 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を土台として、児童生徒が見方・考え方を働かせて何をどのように学ぶのか、学びの質を高めていく必要がある。そのためには、「確かな学力の育成」に向け、主体的・対話的で深く探究的に学ぶ授業づくりを研究し、実践を積み上げる。

イ 網野学園が研究実践を積み上げてきたギミック・ブラッシュアップシートを継続して活用し、各学校園所では保育・授業の質的改善に努める。なお、授業研究の重点教科は各校で決定し、研究を深める。

ウ 領域部会の運営に責任をもち、必要に応じて部会を開催する。

(2) 令和7年度の重点的課題・取組の方向性について

教育目標・目指す子ども像・学校経営方針について

ア 網野学園として11年経った。10年を区切りに学園の目標や方針、重点的な取組内容等の見直しを今年度図る時期ではあったが、「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究を終えた今年度末を区切りとすることとしてきた。来年度より新たな経営方針の下、さらなる学園の高みを目指す。研究の効果の把握・検証を基にした新たな方針等を年度末研修会にて提案し、来年度当初に最終決定する。

イ 園所では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を見通した実践研究を意欲的に進めていく。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」から子どもたちの成長を連続的に捉え、園所と小学校との連携を一層進める。また、網野学園全教職員による園所参観及び事後研究会を通して、園所の教育・保育の理解をさらに進め、就学前から中学校卒業までの目指す姿の共有と系統的かつ一貫した指導の継続につなげる。

確かな学力の育成について

ア 探究的な学びを充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した研究・実践を推進会議が中心となり進める。

イ 引き続き、認知能力と非認知能力を一体的に育む保育・授業を大切し、「網野学園で育成したい力」の育成を目指す。

ウ 教科指導と生徒指導（自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安心・安全な風土の醸成）を一体化させ、子ども主体の授業づくりを行う。

エ 目標と指導と評価を一体的に捉えた授業を行う。

オ グローバルな視野を養う保育・授業を充実させる。

カ 生きて働く「知識・技能」の習得と、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成に取り組む。

キ ICT等を効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に進める。

ク 学習意欲の向上と自主的・自発的な学習習慣、自己調整力の向上を目指し、推進会議が中心となって各学

	校の実態や状況をつかみ、具体的な取組を進める。家庭学習については、保護者とも連携し、家庭学習習慣の定着・内容の充実（自主的な学習）を目指す。園所においても保護者の協力を得ながら、家庭学習がんばり週間を同一時期に実施する。 豊かな人間性・社会性の育成について ア 自尊感情の醸成と将来を展望できる力、豊かな人間性を育む場面、特別活動の充実を図る。 イ 仲間と関わり合いながら課題を解決する授業や活動を充実させる中で、他者をつながる力、コミュニケーション能力を育てる。 ウ 他者の考えに触れさせる場を意図的・計画的に仕組み、一面的な見方ではなく、多面的・多角的な見方ができる力を育てる。 エ きまり・ルールやモラルについて「話し合い活動」を取り入れ、主体的な活動を通して自ら考え、理解し、行動に移す能力を育てる。一方、情報モラルについては、小2、小4、中1～中3、網野学園保護者を対象にした講演会を運営会議が中心となり運営する。保護者対象の子育て講演会については主催を網野学園とし、PTA及び保護者会と連携して進める。また、社会的にゲームやインターネットの使用による健康被害（依存症）が問題になっていることも踏まえ、自己コントロールができる力を身に付けるため、生徒指導部と養護部が連携しながら系統的な取組を進める。 オ すべての幼児児童生徒を対象とした幼児発達支援と発達支持的生徒指導を大切にし、誰もが受け入れられる居場所づくりに努める。 カ 社会的自立に向けた丁寧なアセスメントと個に応じた支援を充実させるとともに、多様で複雑な不登校の要因や背景をできる限りの確に把握し、切れ目のない組織的な支援を行う。 評価に基づく組織的な学園経営の推進について ア 学校評価・学園評価の結果に基づきながら学園経営を行う。 イ 教育評価・指導評価の結果に基づきながら教育実践の充実を追求する。 ウ 「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」結果から変容や課題を分析し、実態に即した学園の授業研究と各校での教育実践の充実・改善を図る。 (3) 令和7年度の年間計画・行事の見通しについて 全体研修会について ア 令和7年度は第1回研修会（5月2日）、第2回研修会（8月26日）、第3回研修会（2月18日）の年3回を節目としながら研究を深める。 イ 第2回全体研修会（夏季）については、網野学園小中学校全教職員で4園所参観及び事後研究会を行い、幼児の実態把握や指導実践について共有化を図る。また、網野学園教職員が学べる場として講師を招聘し研修を深める。 授業研究について ア 5校でローテーションを組み、年2回実施する。網野学園の授業研究テーマについて授業公開から学び合うこととする。
--	---

	令和7年度 橘小 網野南小 令和8年度 網野北小 網野中 令和9年度 島津小 橘小 ・時期は、前年度末に対象校間で決定する。 ・自校の実態に応じて時期（秋または年度末）と公開学級を決める。 ・授業研究会の運営（事後研等含む）は推進会議が行う。 ・公開時には、ギミック・ブラッシュアップシートと指導案を準備する。 イ 各校の授業研究会の案内を送付し、可能な限り参観を行う。 学年部会・領域部会について ア 学年部会については、年4回実施する。（5月・6月・9月・1月）授業日における開始時刻は午後4時からとする。 イ 学年部会に合わせて幼児部会も同日に会議を設定する。 ウ 「網野学園で育成したい力」を基に交流及び実践を進める。 エ 小5と小6部会は、担任と中学教員（専科・連携加配）で構成する。 オ 小6部会は、小中連携加配を活用し、単元総括テストを作成することで授業改善を図る。 カ 小4部会は、ふりかえり学習の取組を進める。 キ 必要に応じて学年部会を臨時で開催する。 ク 幼児部会、小1部会、保幼小連携部会は、長期モデルプラン、アプローチプログラム、スタートカリキュラムを実践し検証・見直しを行う。また、架け橋プログラムの検討を進める。 ケ 領域部会は必要に応じて随時開催する。
--	--

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 丹後学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

教育目標「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」

- ①ことばで伝え合い、主体的に学ぶ子 【知】
 ②自分を大切にし、人を思いやれる子 【徳】
 ③ねばり強く身体をきたえる子 【体】

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

- ①学力向上につながる授業づくりの研究と実践を推進する。(目標と指導と評価の一本化を目指した『授業改善の10のチェックリスト』を活用した探究的な学びを追究する授業改善と学習への主体性を高める実践。そのため、研究推進に係る教科指定はあえて設定しない。)
 ②保育所・こども園・学校間が連携して、就学前から中学校卒業までを通して適時性、一貫性・連続性のある教育課程を編成し、小中合同事業・保幼小接続に係わる事業・小小連携合同事業と3つの事業の充実を目指す。(幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿についての研究・実践)
 ③丹後学園の取組や事業等を積極的に発信することで保護者や地域の方の理解を一層深める。

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	①全体研修会、授業を通した研修会(3回)、各部会よりの課題提起、学年部会を通した研修を計画的に実施し、目指す子ども像の実現、目指す教師像の意識化に努める。 ②各期の指導のポイントを設定し、子どもの交流を図る行事等の実施を通して、「集団生活の中で人と関わる力」や「コミュニケーション能力」を高める。	○各校で、年度当初に「生活のきまり」を使って、学校生活のルールやマナーについて指導することができた。タブレット指導やタブレット点検を通して、正しくICTを活用できるための指導をすることができた。校区一斉あいさつ運動の取組を通して、生徒の挨拶に対する意識向上につながることができた。 ○不登校や不登校傾向、教育相談課題のある児童生徒の交流をし、丹後学園として情報共有ができた。実態交流だけでなく、家庭環境などの背景や要因、支援のあり方なども探ることができた。また、児童生徒の気になる様子等について、必要に応じてこまめに小中学校で情報共有を図ることができた。不登校児童生徒の未然防止や早期対応の取組を交流し、自校の取組の参考にできた。 ○中学校入学後の様子を参観交流することによって、支援の在り方等を検証し、教育相談活動に活かすことができた。 ○2学期末に、6年生の授業参観と懇談をもつことによって、小中の円滑な接続が組織としてできた。小学校においては、児童の様子や課題などの情報の提供ができた。中学校においては、12月頭に参観懇談をすることで、余裕をもって各学校の児童の雰囲気、児童の実態や課題などを把握することができ入学後の見通しがもてた。 ○スクールカウンセラーの勤務日に部会を設定したことで、部会に参加してもらうことができた。さらに、専門的なアドバイスをもとに児童の心の安定を図ることができた。児童生徒の内面理解につながった。事例研究は不登校の中学1年生の事例から、小学校児童の様子についても交流することで、不登校児童生徒や別室登校児童生徒の対応について学びあうことができた。 ○小学校在籍中15日以上欠席があるなど気になる児童の個別記録を中学校に持ち上がり、実態や指導・支援のあり方等を円滑に中

		学校に接続する予定である。(3月末) △各校共通の「生活のきまり」について、2小学校、1中学校の「生活のきまり」についての内容を協議し、実施することはできず、各校それぞれの実施になってしまった。 △定期的に部会を開き、各校の生指事象の交流や研修についての協議などができなかった。改訂された生徒指導提要の視点を入れた指導の交流により、研修にもなるため、次年度は各学期に部会を設定していきたい。また、センターファイルサーバなどを活用し、共通ファイルに入力するなど、担当者が集まって部会が持てなくても定期的な情報交流ができるようにしていきたい。 △昨年度、作成した「丹後学園情報モラル指導モデルカリキュラム」については、学園の生徒指導から各校、各教員への周知が広がらず、系統的ではなく部分的な指導になってしまった。令和4年度の部会で作成された「モデルカリキュラム」を活用した授業研究をしていくなどの案もあったが、実施できなかった。次年度は、年度当初に年間計画とともにこのモデルカリキュラムを学園全体に提案し、各学年で実際に活用してもらえるようにする。 △来年度の学園生指部会として、学期に1度は部会を持ち、情報交流や事業実施に向けた協議などをする。集まることが難しい場合は、オンラインにするなど部会の形式を工夫していく。また、生徒指導提要の視点を全体に広げ、生徒指導部の方向性を丹後学園の全教員に広げ、実際に教員が動きやすいものにし、生徒の変容が見られるよう実働的な取組にしていく。 △6年生の参観懇談に、組織としてより多くの先生に参加してもらえると良い。 △研修会で得た知識が、各小中学校の教職員に幅広く熟知させることができなかった。 △SSW の研修を実施できなかった。来年度は小中学校の来校日に合わせて設定するなど工夫し、児童生徒の家庭への支援について専門的な立場からアドバイスをいただき指導に活かしたい。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	①2小学校が集合して実施する事業と各校で共通して実施する事業を行う。 【2小学校合同事業】 ②総合的な学習の時間を活用した「丹後学」を教育課程に位置づけ、実践研究を進める。 ③『子どもの主体的な学びの変容』を重点とし、『主体的・対話的な深い学び』を意識した授業改善を行う。授業改善の10のチェックリストの活用。	○授業づくりの重点やチェックリストを作成し、学園、各校の研修会で確認することで、一人ひとりの先生方が意識をして自らの授業を振り返ることができ、授業改善につながった。 ○小4～中3までの学力・学習状況(の変容)を把握できる「京都市学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果(質問紙調査)の分析を行い、児童生徒の学力実態と非認知能力の実態、その変容について共有することができた。 ○昨年度の課題点を参考に、参観や協議のポイントを明確にして授業研究会を行ったことにより、事後研究会においても焦点を絞って議論を深めることができた。また、参観した授業からヒントを得て自身の授業づくりを行う先生もあり、その広がりが見られた。 ○こども園での主体的な活動の様子、学校での授業を互いに参観し、学び合うことができた。また、夏季全体研修会で園児たちがどのような場面で主体的になっているかを共有することができて、小中学校の教員にとっても主体的な学びについてのよき研修となった。(学校園所連携) ○家庭でも生徒の主体的な学びを進めるために、「家庭学習頑張り週間」について、児童生徒がめあてや教科、実施時間などを計画し、振り返りができるように記入の仕方を工夫することができた。子

		どもたちの感想の中で前向きなコメントが見られ、保護者からも子どもたちが自分の決めたことを頑張っていた旨のコメントがあった。 △学園で学力・学習状況の交流を行うことができたが、学園として長く続いている学力課題に対して、どのように各校、教員が解決に向けた実践をすればよいのか、授業づくりの重点やチェックリストを軸に焦点化し、具体的な方策を立てたが、その成果を検証するには至っていない。 △ICT の効果的な活用については、各校や個々の教員で創意工夫をしたが、教育課程部会としては具体的に方向性を打ち出し、各校に提案することができなかった。来年度はより一層クラウド等を活用した授業を推進するために、各校で積極的に使用し、その様子を交流していきたい。 □「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」の結果（質問紙調査）を踏まえ、確かな学力を育成するために、学園全体で授業改善を確実に進めていく。また、本学園では質問調査の「計画性」や「目標を決めて物事に取り組むことができる」のポイントが低い傾向にあり、自己調整力や粘り強さを身に付けさせるための研究を進めていく。 □家庭学習の在り方について検討し、ICT を活用し、授業での学習と連動した家庭学習に自主的に取り組むことができるよう研究を深める。 □ICT の活用方法についての研究を進め、クラウドの活用方法等、各校での研究を学園内で広げる。 □学園の学力課題について分析し、10 年間を見通した学習習慣の定着、学力向上のための方策を検討する。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	①年 3 回の全体研修会・授業研究会を実施するとともに、保幼小接続部会や期別部会・学年部会を開催し、それぞれの課題の改善や解決に向けた取組を実践する。 ②中学校 1 年生入学後 1 カ月ごろの状況及び出口となる中学校 3 年生の授業公開を行い、多様な視点で課題共有すると同時に指導について研究協議を行う。 【小中合同事業】 ③教職員間…学年部会での授業研究会 保幼小接続部会でのスタート研修会【保幼小接続に係わる事業】 ④保幼小の子ども…5 歳児と小 1 年生との交流会（2 回）、遊びと交流 保幼小の教職員…5 歳児と小 1 担任の夏季研修会 ⑤保幼連携…4. 5 歳児の交流活動	○年度当初に 1 年生の授業参観を実施することで、入学した児童の様子について保育園で共有することができた。また、授業参観と同日にスタート研修会を設定することで、今年度入学した児童の姿をもとに、より良い接続の仕方について協議することができた。 ○スタート研修会で、スタートカリキュラムの活用について交流することで、入学児童に必要な対応について、具体的に考えることができた。 ○保育参観でこども園の取組を知ることで、幼児期の教育の基本的な考え方や保育園の接続の在り方について具体的にイメージをもつことができた。また、子どもの主体性を育てる指導の参考にもなった。 ○なかよし交流会においては、遊びだけでなく、生活科に係る活動を取り入れることで、丹後こども園、宇川小学校、丹後小学校の交流を深めることにつながった。 ○保幼小連絡会等で入学前に小学校に伝えたことが指導に生かされ、保幼で大切にしてきた子どもの関わり方が引き継がれていた。5 月の保幼小連絡会も保幼から入学後の助言があり、小学校の指導に生かされた。 △次年度のなかよし交流会については、引き継ぎ内容を確認後、実施年度の子どもの状況により活動内容等を考えていきたい。 △これまで、なかよし交流会では、2 つの小学校とこども園、宇川保育所の 4 グループをもとに役割分担等を考えてきたが、児童数等の変化により、活動の仕方も見直していく必要が出てきてい

		る。
家庭、地域との連携、情報発信	①「丹後学園学校運営協議会」の機能化と充実を図る。(年間2回の総会) ②「丹後学園だより」等を発行し、保護者や地域に配付する。各校のホームページにて、取組の状況を発信するように計画する。	○小中一貫校PTAと市教育委員会とともに教育講演会を開催し、家庭や地域での非認知能力の育て方等を保護者、地域住民と学ぶことができた。更に今年度は研究協議の時間を取り、児童生徒のための熟議の時間を持つことができた。 ○学校と家庭、地域社会の横の連携を深めるために丹後学園学校運営協議会委員、町内民生児童委員、主任児童委員、保護司、各種団体の方々に保幼小中一貫教育の支援、協力、理解を得ることができた。 ○各校ホームページや学園だより等で、教職員や児童生徒、保護者に広く広報することができた。 △保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 □次年度も、2学期に予定している教育講演会を学園PTA行事として、位置付ける。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
1 経営及び進行管理について ○今年度の経営方針や計画について、ほぼ予定どおりに進めることができた。また、丹後学園学校運営協議会の委員や民生児童委員の方々には、挨拶運動や授業や体験活動等の参観をととして、小中の連携や子どもたちの実態を見ていただく良い機会となった。 ○今年度より、教科の枠を取り払い、ねらいを明確にした授業研究会が実施できた。丹後小学校では、安心できる学習環境が整えられた中で、自己決定を大切にされた深まりのある授業が展開された。宇川小学校でも個々の学力状況を把握しながら小規模の良さを生かした丁寧な授業が進められていた。丹後中学校では、小学校と中学校では学習内容、ボリュームなど多くの違いがあることを共有し、互いが学び合い、スムーズな接続を図ることの重要性が再認識されたが、中学校段階においても小学校と変わらずわかりたい、教えたいという気持ちが主体性を高めることに繋がることが確認できる授業であった。 ○経営会議の前に実施し、各会議、部会等の実践状況や学園内の教育課題を把握し、教育目標の達成に向け経営会議等の調整・事務作業を行う事で経営会議がスムーズに運営できた。 2 保幼小中一貫教育の基本方針4点を見据えて (1) 丹後学園の目指す子ども像の共有 ○小学校・中学校からの課題提起を受け、学園全体で課題を共有し、課題解決に向けた動きや取組を各部で進める上で意識を高めることができた。 ○各学校等で課題に応じた教育実践を行い、全ての学校等が中学校を卒業する姿を想定し、生きる力の育成につながる指導ができた。	●経営会議を受けて、4部会が見通しをもって上手く機能するように更なる連携を目指す。 《事務局会議（代表・庶務・学園コーディネーター）》

(2) 就学前から中学卒業までを見通して一貫した指導 ○年間を通しての保幼合同での様々な取組や「丹後こども園・宇川保育所合同での1年生と5歳児のなかよし交流」「中学校授業体験」「中学校部活動体験」「小学校合同校外学習」等、効果的に進めることができた。 (3) 子ども、教職員の交流と協働 ○本年度の夏季研修会では、午前中はこども園参観、午後はこども園の実践発表から多くのヒントを得ることができた。また、その後は分散会をもち、今までの実践を振り返ったり、今後の指導構想などを交流する良い機会となった。 ○小小合同行事、「中学校部活動体験」、「中学校授業体験」、「ふれあい交流会」等は中学校生活への不安を解消する良い機会になった。 (4) 学園での豊かな環境づくり ○小中一貫校PTAと市教育委員会とともにSNS講演会、教育講演会を開催し、スマホやネットに潜む危険から身を守る方法や家庭や地域での主体的に取り組む子どもの育て方等を保護者、地域住民と学ぶことができた。 3 学園評価の結果から (別紙参照) (1) 児童生徒アンケートから 【学習面】 ○学園の「授業づくりの重点」に沿って、特に「探究的な学び」を充実させ、「子どもたちが主体的に学ぶ授業づくり」を各校で推進したことで、授業改善が進み、「生活や授業で自分の思いや考えを表現する」項目で一定の成果が見られた。 【生活面】 ○今年度、学園として家庭学習の時間を設定せずに「家庭学習ががんばり週間」等に取り組んだ。その結果、「自分で家庭学習の内容や時間を決めて進んで取り組む」という点で成果があった学年もあった。今後も授業と家庭学習とを連動させ「自ら学習を調整する力」を育成したい。 ○学校のきまりを守るという規範意識やものごとを最後までやり遂げようとする意識が高い。 【その他】 ○「R6 京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～授業改善の進捗状況を評価する質問項目(丹後学園)」を参考に、認知能力と非認知能力を一体的に育むという視点で、児童・生徒の変容を捉えながら授業改善等を進めていきたい。 (2) 教職員アンケートから ○12項目中9項目について、「十分にできた」「だいたいできた」の回答が昨年度より増加している。学園全体や各校で意識して取組が行われている状況が見られる。 ○平均約85%が「十分にできた」「だいたいできた」の回答であり、過去3年間より高い割合となった。各先生方が、目的を意識して努力されている結果だととらえることができる。 (3) 関係者アンケートと保護者アンケート ○4項目全てが、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の肯定的な回答が85%以上になった。関係者・保護者が肯定的な回答をして	●次年度さらに保幼小中一貫教育を推進していくため、各期でつけるべき力を指導の柱にして、実践や研究を深めていく必要がある。 ●育てたい力が、ついたかどうかを検証し、それに対しての改善策を検討していく必要がある。 ●分散会等では、協議内容の精選、内容を検討し、限られた時間の中で効率よく進める事等を更に推進していく事が大切である。 ●講演会への保護者の出席者が少なかった。呼びかけを考えていくとともに、保幼小中一貫教育の成果として顕われた子どもたちの成長を広く発信し、地域住民へ学園のめざすところがさらに浸透するように取組を継続させていく必要がある。 ※次年度も、SNS講演会、教育講演会を学園PTA行事として、位置付ける ●小学校での外国語活動から外国語の学習、中学校での英語の学習へと系統的に、かつより丁寧に進めていく必要がある。 ●「学校は楽しい」と感じている児童生徒の割合は高いが、「あまり楽しくない」「楽しくない」と感じている児童・生徒へ目を向け、丁寧なアセスメントを行う必要がある。また、生徒指導の実践上の4つの視点(自己存在感の感受、共感的な人間関係の育成、自己決定の場の提供、安全・安心な風土の醸成)を生かし、教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりを充実させることを大切にしたい。そうすることで、「自分にはよいところがある」といった自己肯定感も高まっていくのではないかな。 ●「不登校を作らない指導」については、昨年度・一昨年度と比較して「十分にできた」「だいたいできた」の割合が下がった。不登校の要因が複雑化してきていることからなかなかこれといった指導が見いだせないと感じている教員も多いと考えられる。まずは、居心地の良い集団をつくることを目指すことやこどもに寄り添う指導と情報の共有等が必要である。また、「わからない」の回答も18%あるため、不登校の対応や未然防止に関する研修を行い、組織としての対応が必要である。 ●「粘り強く挑戦できる指導」についても課題が見られた。こどもが主体的に考え活動し、魅力的だと感じるための授業改善の中に、粘り強さを
---	--

いる。 ○令和6年度は、令和5年度と比べると、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の肯定的な回答が、3項目において増加し、1項目は昨年度と同じであった。増加した3項目の中で一番多い項目は11%増加した。 ○今後も保幼小中一貫教育のねらいや目指す姿等を、年度当初に各校で啓発し、その後も定期的に取組を発信し保護者や地域の理解を深めていく。	追求できる内容を組み込んでいけるよう、今後も授業研究や学び合いを行っていく必要がある。また、行事等の精選により粘り強く取り組んでいく内容が薄れている可能性もある。来年度以降、粘り強さという部分を意識した取組内容を考えていく必要がある。 ●回答者数が、保護者アンケートは、令和5年度の61名に対して、令和6年度は38名と減少した。中学校においては、前年度より半分程度の回答になった。 ●アンケートのForms回答は、特に保護者の回答率に課題があるため、幅広く周知してご協力いただけるよう工夫していく。
---	--

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

令和6年度 弥栄学園保幼小中一貫教育報告書

1 「目指す子ども像」教育目標

1 教育目標
【ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで自他を大切に、たくましく生き抜く子どもの育成】
2 目指す子ども像
(1) 知識と技を磨き、活用する子 *自ら課題に取り組む
(2) 自他の良さを知り、共に伸びる子 *仲間を大切に、ともに知恵を絞る
(3) 心身をきたえ、何事もやりぬく子 *解決策を探り、自信をつける

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

1 重点課題
(1) 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指す授業づくりの推進
・授業実践力等の向上（他校種研修、授業研究会、全体研修会等を通じて）
(2) 自尊感情の醸成を目指し、生徒指導の実践上の視点を生かした多様な教育活動の推進
・異年齢の交流活動、自尊感情、自己調整力、自己有用感、上級生への憧憬、下級生を包み込む姿勢
(3) 校種間連携の充実を図り、中学校卒業時の生徒の姿を共有した力の育成
・コミュニケーション力、社会性、自己理解、学びの連続性、教職員研修
2 取組みの柱
<u>研究主題</u>
自ら課題を見つけ、他者とのつながりを通して、主体的に課題解決に向かおうとする力の育成
(1) コミュニケーション力の向上、授業改善、探究的な学び
ア コミュニケーション能力の向上、互いにつながる力、探究する力の育成を図り、グローバル人材の育成を目指す。
イ モデルカリキュラム、丹後学をもとに、10年間を通して教育課程編成を行う。
ウ 授業公開、事後研を実施し、学力の定着と指導力の向上を図る。（授業研究会）
エ 園小、小中の円滑な接続・学びの連続性が担保できるよう期別部会を充実させる。
オ ICTを効果的なツールとして活用し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行う。
(2) 交流・連携の取組み（園小・小中の交流活動、小学生の中学体験授業）
(3) 地域人材、外部機関等の効果的な活用並びに発掘を行い、多様な人や異なる文化からの学びを通して、自己の視野を広げる。
(4) 学園内のいじめ、不登校、ネットトラブル等の未然防止と解消に向けた取組み
(5) 積極的な情報公開や戦略的な情報発信・広報活動（HP等により地域へ発信）
(6) 関係機関、地域（人材・施設などを含む）との連携（弥栄学園運営協議会との連携）
(7) 授業力の向上と教育課題解決のための研修会の開催（研修会、研究協議）

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有方策	1 弥栄学園の組織の機能化 (1) 経営会議、運営会議、教育課程会議との各部の連携 ○経営会議 12回開催 ○運営会議 9回 ○教育課程会議 8回 (2) 各会議、各部の中での各校の交流と分析、指導方針の確認	(1) 組織運営について ア 本年度学園組織の改編を行っての運営・活動であり、各会議・部会の機能的な動きでは課題があったが、学園内の課題に解決・改善に向けた活動を進める事ができた。 イ 学校適正配置後の弥栄学園として保幼小中一貫教育の方向性、目標の具現化に向けて、より機能的、有機的な学園組織の整理に向けての議論を進める事ができた。 ウ 経営会議、運営会議、教育課程会議の3会議

	○生徒指導・特別活動部会 ○教育相談・特別支援部会 ○養護部会 ○事務部会 (3) 全体研修会で子どもの実態や分析結果、指導方針の共有 ○第1回全体研修会 5/2 会場：弥栄小学校 ○第2回全体研修会 8/22 会場：弥栄小学校 ○第3回全体研修会 2/18 会場：弥栄中学校	が定期的に会議を行い、事前調整・運営を進めることができた。更に各会議の役割、任務について整理する必要がある。 (2) 各活動における交流 ア 1園1小1中の特色を生かすためにそれぞれの会議、部会が試行錯誤しながら活動し、10年間を見通した一貫性のある指導のための協議・交流を行った。各校園の指導や校風等を理解して互いに学び合い尊重する機会となり、次年度の組織の再編成に向けて一定の整理が進んだ。 イ 学校数の減少により、各会議、各部構成や編成が変わる中、接続期に係る部会や学園全体に係る部会については、方向性を共有しながら各種活動に取り組むことができた。しかし、部会によっては活動内容等が不明確であり、十分に機能できない部会もあった。 (3) 全体研修会 3回の全体研修会を開催し、学園の方針、教育目標、重点課題、取組みについて、学園全体での共通認識を深めることができた。また、夏季全体研修会では、こども園の教育・保育について学園全体で学ぶ機会となり有意義であった。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程	2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 (1) 個別最適な学びに繋がる家庭学習の習慣化に向けて ○家庭学習がんばり週間 (2) 円滑な接続に向けて ○園小接続期における接続プログラムの効果的な活用 (3) 一貫した授業づくりの推進 ○授業改善で目指す子どもの姿の共有	(1) 家庭学習がんばり週間 弥栄学園全体の取組みとして、家庭学習の取組みを中学校の期末テスト期間に合わせて年2回実施した。こども園では、家庭と連携して読み聞かせの依頼など自ら学びに向かう素地の育成を図った。また、小学校・中学校では、家庭学習の充実と自己調整力・自己決定力の育成を図る為に、昨年までとやり方を変え、自分で学習の開始時刻の決定など主体的に学習に取り組む等の変容が見られた。 (2) 保幼小接続プログラムの実践 0期からI期のスムーズな接続に向け、0期I期前半部会（園小接続部会）においてスタートカリキュラムの見直しを行った。夏季全体研修会時に、小中学校の全ての教員によるこども園参観での教育・保育からの学びを接続期の効果的な指導・支援に生かしていく。 (3) 学びのパスポートの分析と効果的な活用 府の学びのパスポートのデータ・質問紙分析から得られた各校の学力実態、非認知能力との相関関係などの分析を通して、学園としての課題改善に向けての手立て、教育課程の工夫など令和7年度に向けて研究を進める。
幼児児童生徒、教職員の交流と協働	3 教育活動の連続性・協働性 (1) 授業研究会の取組み ○授業公開 弥栄小 5/2 ○授業公開 弥栄こども園 8/22 ○研究授業 弥栄小 11/27 3年 算数 ○授業公開 弥栄中 2/18 (2) 弥栄学園こども園小中連携 ○園小交流活動 9/5～10/22 まで ○小学校弥栄中体育祭練習見学 9/24 ○こども園弥栄中体育祭練習見学 9/24 ○中学校授業体験 9/2（体育・美術）	(1) 授業公開・授業研究会 今年度は小学校の適正配置後の児童の様子や弥栄こども園の教育・保育について学園の教員が集まり、発達段階を踏まえた指導方法や学習形態等の工夫について共通認識を図ることができた。授業研究会については、11月27日に弥栄小学校で実施し、研究主題に応じた授業展開について研究協議を進めることができた。 (2) 弥栄学園異年齢連携活動 ア 園小接続プログラムに基づいて、園児・児童の発達段階・実態に応じた交流行事を計画した。こども園、小学校との交流活動では、週2回隣接する小学校とこども園の門を開放し、1年生との交流を実施した。 イ 弥栄中学校の体育祭の練習の様子をこども

	○部活動体験 10/30 ○園小合同交流会 10/22 ○ふれあい交流会 12/3 (3) 情報モラル教育に向けた取り組み ○情報モラル教室 12/2 ・篠原嘉一 様 (NITネットワーク取締役) ○情報モラルアンケート ・インターネットの利用に関するアンケート実施	園5歳児、小学校6年生児童が見学した。小学生にとっては、中学生の活動の様子からリーダー性について学ぶ良い機会となった。 ウ 部活動体験では、小学6年生児童が中学生黄龍することにより、中学校に向けての不安(特に人間関係)が軽減され、入学への期待を高めるものとなった。中学生にとっても、自尊感情、自己有用感を感じられる取り組みになった。 エ 今年度の中学校授業体験は、実技教科(体育・美術)を選択性で実施した。中学校教員による授業を受けることで、学習に対する不安の軽減にもつながり、入学への期待を高めるものとなった。 (3) 情報モラル教育に向けた取り組み ア 情報モラル研修会 オンラインゲームやSNS等に関する知識・理解が深まり、ネット上での様々な問題点を知る機会となった。また、民生委員様や学校運営協議会の委員の方も、小中学校の授業を参観していただき、地域の方とも課題意識を共有することができた。本年度初めて実施した弥栄学園PTA家庭教育委員会主催の保護者向けの研修会では、こども園から中学校までの保護者が参加し、意義ある講演会となった。増加傾向にあるネットトラブルの予防、低年齢化への対応を図る為にも、PTAや関係団体との連携をすすめていきたい。 イ 情報モラルアンケートの実施 アンケート結果から、各校・学年の特徴的な課題や傾向をつかむことができた。結果については、校内だけでなく、学級懇談会等で保護者にも伝え、学校と家庭が課題を共有できた。また、今後も児童生徒の実態を把握するためにアンケートを継続実施し、意識や実態の変容について分析等を行い、学園・学校としての今後の指導につなげていきたい。
家庭、地域との連携、情報発信	4 家庭、地域との連携・情報発信 (1) 弥栄学園学校運営協議会との地域連携・教育環境づくりを進める。 (2) 弥栄学園便り等による広報活動を積極的に行う。 (3) 学校行事等において学校支援ボランティアを積極的に活用することを通して交流を深める。	(1) 学校運営協議会との連携 弥栄学園学校運営協議会の活動が5年目となった。学園の取り組み等へ熱心に参観していただき、貴重な意見や励まし、評価を頂くことができた。学園の活動や教育目標に対してさらなる理解や協力を得るために、啓発活動と同時に運営協議会と学園PTAと連携した活動にも取り組んでいきたい。 (2) 広報活動 こども園、各学校のたよりやホームページ、保幼小中一貫コーディネーターの学園だよりの配布等を通して弥栄学園学校運営協議会の取り組みや学園の活動について広報・啓発をした。 (3) 学校支援ボランティアの活用 地域のボランティアの方々に、こども園や各学校の教育活動や交流事業に多くの支援を頂くことができた。子どもたちと地域の方々との交流や学園に対する理解が深まり、学園・家庭・地域の「横の連携」を深めることができた。

4 今年度の成果と課題 改善方策

成果と課題	改善方策
1 弥栄学園経営及び進行管理 本年度の組織改編により、各組織の運営、事業の実施時期など調整等が円滑に進まず、不十分であった。また、新しい学園組織体制における課題や役割・任務についての課題点も明らかとなった。経営会議の計画的な進行管理により、組織的・機能的な学園経営を行う必要がある。 2 発達段階に応じた系統的な指導・活動 本年度の「家庭学習がんばり週間」は、こども園も取り組むことにより、学園一体として進める取り組みとなった。今後は、より学園としての取り組みのねらいを明確にし、家庭学習の在り方の研究を更に進める必要がある。コミュニケーション力の向上と合わせて、児童・生徒同士の「教え合い」「学び合い」更には、系統的に「主体的に学習に向う」「自ら学習に取り組む」姿を目指した研究・実践を更に深化させていく必要がある。 3 教育活動の連続性・一貫性・協働性 学園規模や立地条件等から本学園の交流連携活動は教育活動の連続性・一貫性・協働性を担保するものである。本年度は、取り組みや行事だけでなく、立地条件をいかした日常的な交流をすすめることもできた。不登校への取り組みとして、経営会議での情報共有、教育相談部会での事例研究、接続期の学年の授業参観等の実態把握を行った。小規模の学園のよさをいかし組織として小中共通の引継ぎ資料の作成に取り組むだけでなく、日常的な連携を継続していく。 4 家庭、地域との連携・情報発信 こども園、小学校、中学校がそれぞれに、たよりやホームページで各校園の取り組みを発信するとともに、学園ニュース（教職員向け）、保幼小中一貫教育だより（保護者、地域向け）や学園ホームページでも情報発信し、学園の動きを地域に広報した。また、学園のリーフレットを、保護者や学校運営協議会等、関係諸団体にも配布して学園の活動を紹介し、弥栄学園の活動について啓発を行うだけでなく、行事等の案内を配布し、学校園に来ていただき子どもの姿をみていただくことを大切にできた。	1 学校適正配置による1園1小1中体制での組織運営に係る令和6年度評価を踏まえ、経営会議が主体となって現組織の再編成を行い、運営・活動内容等について調整を行う。 2 こども園から中学校への系統的で一貫性のある指導・支援を計画的に進め、10年間で育みたい力、本学園の課題の克服、探究的な学びへつながる授業改善に向けた研究・実践を関係部会を中心に推進していく。特に自ら学習を調整する力の育成を目指し、ICT・クラウドを活用した授業改善、授業と連動させた家庭学習について更に研究していく。 3 中学校卒業時（第Ⅲ期）の「生徒の姿」を全教職員で共有した上で、継続的な実態把握と評価に基づいた弥栄学園の教育活動、事業における成果・課題を明確にし、保幼小中一貫教育の教育内容の充実を図っていく。次年度から、教育相談・特別支援部会にこども園からも入っていただき、10年間を見通した支援の継続と丁寧なアセスメントを組織として行っていく。 4 今後も弥栄学園の活動について、広く情報発信を行うだけでなく、実際に子どもの様子をみてもらうことを通して、保幼小中一貫教育への理解と協力を得るとともに「地域とともにある学園」を目指し、連携・協働を進めていく。

5 今年度の目標の実現状況や、保幼小中一貫教育の推進状況などが分かる資料がありましたら添付してください。

1 「目指す子ども像」、教育目標

[教育目標] 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心を持ち、根気強く努力する子どもの育成」 [目指す子ども像] (知) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子ども (徳) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども (体) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども

2 保幼小中一貫教育として解決を目指す重点課題、取組の柱とする内容

(1) 中期的な展望(取組の見通し)

年度	教職員の意識	学力	ギャップ(不登校)
R3 (6年次)	・新学習指導要領への対応 ・学力向上の方策を全職員で検討	学力向上試案の策定 (教育課程会議)	接続期の校種間連携充実 事例研の継続
R4 (7年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践 新学習指導要領で求められている資 質・能力の育成	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	学校に起因する不登 校人数の減少 事例研の継続
R5 (8年次)	学力向上の方策を全職員で検討・実践	学力向上方策の実践、 改善(全学年)	早期対応、情報共有 の徹底(全職員の共 有)
R6 (9年次)	↓	府・全国学力テスト・調査全 学年平均以上(学園)	↓
R7 (10年次)	久美浜学園保幼小中一貫教育の継続 した取組の整理とまとめ 次の10年を見通し新たな取組の構築	府・全国学力テスト・調 査全学年平均以上(全 学校)	早期対応、情報共有 の徹底(全職員の共 有)

(2) 重点目標

「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」～子どもの実態や系統性を踏まえた指導～

(3) 指導の重点

『学力向上』①基礎・基本の徹底 ②主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) ③家庭学習時間の確保

(4) 取組の柱 ① ② ③ ④

ア 10年間(就学前から中学校卒業まで)の幼児児童生徒の成長発達に全教職員で責任をもつという意識の向上 ① (ア) 久美浜学園全教職員がチームとしてみんなでやるという協働「教職員の協働」意識を醸成。「教職員の協働」と「対話と理解」の推進 (イ) 目指す授業として、学習指導要領に示された「主体的・対話的で深い学び」を実現する。 ・学園テーマを「主体的に学ぶ力の伸長」とし、すべての教職員で幼児児童生徒が自ら主体的に学ぶ力を伸ばすための教育活動を推進する。 ・認知能力、非認知能力の一体的伸長を図る具体的な取組を進める。 ・「リーディングDX事業」の先進事例をもとに、ICT活用を軸とした授業研究を進める。 イ 各校園所における規範意識の醸成を基盤と ②落ち着いた学校(園)づくり、授業づくり (ア) 生徒指導の4つの視点(自己決定・自己存在感・共感的人間関係・安全安心な風土の醸成)を生かした授業づくりと学級経営・特別活動の充実により、規範意識を醸成し学ぶ意欲を育てる。 (イ) 基礎・基本を徹底し、基盤となる力を十分付け、互いに認め合い、励まし合い、支え合える雰囲気作りを進める。 ウ 子どもの交流行事並びに教科指導交流の推進による ③行動連携強化 (ア) 共に学ぶ意識を育て、子ども同士を結び付ける保幼小、小小、小中における交流行事・授業 (イ) 豊かな教科指導を目指す指導交流(保幼小連携、小小連携、小中連携) エ 保護者、地域とともに ④「久美浜を支える人づくり」の視点に立った取組を進める。 (ア) PTA・保護者会、学校運営協議会、地域学校協働本部事業の推進と充実 (イ) 家庭学習時間の確保に向けた連携
--

3 保幼小中一貫教育の具体的な内容と評価

項目	内容	評価 (実践の過程・幼児児童生徒の姿・教職員の見方等)
幼児児童生徒の実態や課題、目指す子ども像や目標、方針等の共有 ① ② ③	(1) 経営会議を中心に組織的且つ丁寧な、実態や課題、目標、方針等の共通理解を図る。 ア 年度当初の学園全体会での提起と全体研修会での全教職員による協議を通して、共有を進める。 イ 夏季全体研修会、公開授業、園所参観、分散会の取組を通じて教職員同士の「理解と対話」の充実を図る。 : R7 2/18 (2) 保幼・小・中で共通指導内容を確認し、PDCAで改善を図りながら共通理解を深める。	○久美浜学園7校園所が1つの目標に向かう中で、ICT活用や取組の工夫を行い、教職員及び児童生徒園児の交流を実施し、「理解と対話」の継続を図り目標や方針等を共有 ①2/18 (年度末全体会での全体協議他) ○②園所参観とその後の交流会を実施することができ、10の姿を見通した保育・教育の在り方を学んだ。 ○③2つの公開授業、分散会を実施し、授業研究を進め深めることができた。 ○連携部会、領域部会等の会議や部会を計画通り実施できた。今後も運営のあり方等を改善し、引き続き目標やめあて、指導内容を振り返りながら進める。
就学前から中学校卒業までを見通して一貫した指導、教育課程 ① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦	(1) 子どもの育ちと指導の一貫性を目指した教育課程編成 ア 考えを深め、コミュニケーション能力を高める学習の推進 イ 郷土への愛着と誇りをもち、人とつながる力を育てる学習の推進 ウ 保幼小中の接続を意識した教育課程編成 (2) 重点指導 ア 学力向上 (ア) 基礎・基本の徹底 (イ) 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) (ウ) 家庭学習時間の確保 イ 生徒指導の4つの視点を活かした指導と不登校の解消 (ア) 規範意識の醸成と互いに認め合い、励まし合い、支え合える雰囲気作り (イ) 学級活動の充実と児童会・生徒会活動等自主活動の活性化 (ウ) 自尊感情の高揚 (エ) 保幼・小・中の連携強化 ウ 今日的課題 (ア) 1人1台端末とクラウド環境を活用した効果的な授業実践の推進 (イ) 「リーディングDXスクール事業」先進事例からの学びの共有(「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実)	○「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実として、R5「リーディングDX事業」及びR6市学力向上対策会議授業公開・府小研生活科第2次研究協議会授業公開等の先進事例を活かした研究が継続して進んだ。「自由進度学習」「思考ツールを活用した学習」等、先進的な授業実践もうまれ、授業公開や分散会で教員が学び合った。①子どもが主体的に学ぶ新しい授業イメージを共有した。 ○コロナ後、②地域に出での学習や地域講師を招聘しての学習が数多く展開された。特に中学校では、中1地域学習、中2職場体験、中3福祉施設体験、地域ボランティア等が豊かに実践された。また、学習発表会等で、地域での学習をテーマにした発表をするところが多くあった。郷土への愛着や人とのつながる力を育てることになった。 ○昨年度のDX研究を引継ぎ、各学校で多様な効果的なグループ学習が取り込まれるようになり、子どもが関わりあい、学び合い、共感的な人間関係を築くきっかけになっている。 ○年3回の③家庭学習がんばり週間は、園所から中学生までの全家庭で取り組まれている。兄弟で意識して頑張ることや家族で協力し合うことなど、一斉に取り組むことの成果が表れている。また、この機会に平日頃の生活を見直すよいきっかけになったという感想も多く出てきている。 ○PTA・保護者会を巻き込んだ久美浜学園共通の「家庭学習がんばり週間」の取組を進めることで、学習習慣の定着を進めた。 ○情報機器の望ましい活用(情報モラル)のための④SNS講話学習を小3・4年生、中学1・2年生、中学3年生と、3回実施した。1人1台タブレットの持ち帰りも進んでいるため、どうしても必要な学習となっている。 ○メディア・コントロールについての指導では、

	教育相談部会	養護部会が0期の指導内容についての保健指導案を作成し、⑤年長児への出前講座を実施している。工夫した教具も作成し、効果的な指導となっている。 ○⑥夏季全体研修会で「不登校児童生徒とその保護者への支援」と題して著名な講師の話を聞いた。不登校についての基本的な考え方や対応について全員で学び合うことができた。 ○⑦SSWを招いてピカジップ法を用いた事例研究を行い、児童生徒や保護者の様子や気持ちから対応や支援の実際を学んだ。また、保幼小中の教員が一同に介して事例研を行い、活発な論議により、不登校の未然防止や不登校の解消につながる取組ができた。園所から中学校まで10年間を見通した論議ができた。
幼児児童生徒、教職員の交流と行動連携 協働 教職員 ① ② ③ 子ども ① ② ③	(1) 全体会、全体研修会、公開授業、園所参観と分散会、領域部会、連携部会を中心とした教職員の交流と協働 ア 中学校卒業時の生徒の姿を意識した協議 イ 児童生徒の実態交流に基づく具体的な取組の推進 ウ 「主体的に学ぶ力の伸長」の系統性を意識した指導を目指す授業研究 (2) 学校、校種間をまたがった指導の推進 ア 小小連携、小中連携、専科教育、出前授業等、人的交流をもとにした協働 イ 振り返りスタディ等指導面での協働 (3) 幼児児童生徒の行動連携 ア 保幼の連携 イ 保幼小の連携 ウ 小小連携 エ 小中連携、保幼小連携 (4) 児童会生徒会合同会議の取組推進による交流と協働	教職員行動連携 ①公開授業（6月久美浜中、11月久美浜小）、園所参観とそれぞれの分散会を実施した。昨年度のDX研究指定の学校での公開授業であったため、その成果を引き継ぎ発展させる形の授業が公開され、学びが深まった。また、園所参観では、保育、教育についての理解が深まるとともに、校種が違っても主体的な学びにつながる手法について考えることができた。 ②夏季全体研修会では、久美浜学園の大きな課題である不登校への対応について、全員で研修することができた。各校種から質問も多く出て、理解が深まった。 ③各校の授業研究会の案内を発出し、連携部会で1人1つは授業を参観するということができた。また、昨年度の研究に基づく授業も自主的に参観するなど、教員の研究（授業改善）意欲が高まった。 ①小小連携授業では、1年かぶと山公園での生活科の授業、3、4年生のSNS講話学習が実施された。また、5歳児交流会はかぶと山登山を予定していたが、登山道の倒木のためかぶと山公園での交流となった。 ②小中連携では、合唱祭参観、部活動体験、授業体験を計画通り実施した。保幼小連携では、小学生の生活科へ5歳児を招待、体験入学を実施した。保幼小連携は、中学2年生の職場体験で3園所へ多くの生徒が行った。また、中学校吹奏楽部が3園所でコンサートを実施し園児と交流した。 ③児童会・生徒会の合同会議は、対面による会議やリモートでの会議を年3回実施した。「夏みかんの日」の取組に係るあいさつ運動やSDGsの取組等を行った。SDGsの取組は、年々充実し、3園所5歳児が全員中学校を訪問しペットボトルキャップの贈呈式をしたり、小学校

		でも子ども服を集めたり、学園としての大きな取組となってきた。
家庭、地域社会との連携、情報発信 ① ② ③ ④ ⑤	(1) 久美浜学園保幼小中一貫教育に係る目標、活動等の広報及び啓発 ア たよりの発行 イ リーフレットの作成、配布 ウ ホームページによる広報活動 (2) 学校運営協議会の取組を通じた「久美浜を支える人」の協議 (3) 地域学校協働本部事業の積極的な活用等による久美浜町民の学校教育活動への参加と積極的支援 (4) 久美浜学園PTA・保護者会との連携による家庭教育支援	○様々な取組を様々な機会を通じて広報できた。学園の取組を①リーフレットにし、全戸配布をした。 ○②町区長幹事会、各地区自治会、民生児童委員協議会等への取組説明が実施できた。学園活動の周知や協力を訴えた。 ○③学校運営協議会は3回実施し、学園基本方針等の承認、活動状況の説明、意見聴取を行った。3つの部会では、「久美浜を支える人づくり」「学校園所の応援団としての役割」「地域での子どもに関わる活動」等について、多くの意見をいただくことができた。 ○④中3 夏休み地域ボランティア、中1 地域学習で、自治会や区長さんの協力を得ての取組を行った。生徒が地域とつながり地域を考える貴重な学習機会となった。 ○⑤久美浜学園PTA・保護者会があることで、学園の全家庭で「あいさつ運動」「家庭学習がんばり週間」「教育講演会」等の取組ができた。特に、SNS 講演会は、学園PTA・保護者会が主催し、情報モラル高揚の研修ができた。

4 今年度の成果①～⑥ と 課題①②

成果と課題	改善方策
①久美浜学園は、来年度で一貫教育10年となる。10年の成果と課題をまとめていかなくはならないが、取組の柱に掲げた「教職員の協働」も「落ち着いた園所学校、授業」も、「校種間連携」も「地域とのつながり」も、一定できてきた。	・「目指す子ども像」「学園教育目標」「重点目標」「4つの取組の柱」の成果を明らかにし、今後10年の保育、教育の方向性を定める取組を構築することが、来年度の大きな取組となる。そのためには、管理職の構想と教職員全体で論議しようという機運を1年かけて作り上げていく必要がある。
②コロナ以降の保育、教育活動として、様々な取組を実施することができた。園所校内の取組はもちろん、積極的に地域とかかわり、豊かな学習を進めた。	・前例踏襲ではなく、必要なものは残し、効果の薄いものは実施しない、スクラップ&ビルドを行っていく。
③「リーディングDX」研究が、各校に波及し、確実に授業が変わってきている。子どもたちが主体的に活動し学ぶ授業が進められている。1人1台端末、クラウド環境を活用した授業、教育活動が当たり前のように展開されてきた。	・「個別最適化」と「協働的な学び」「自由進度学習」「思考ツールを活用した学び」などをキーワードに、今後も様々な授業（方法、形態）にチャレンジしていくことが、子どもたちの豊かな学び、探究的な学びを促すことになる。

④経営会議の方針のもと、企画運営会議が事業を運営し、教育課程会議が学習指導、学力充実等に関する内容の具現化を図り、相互に共有して進めるという運営の機能化を図ることができた。 ⑤学園 PTA・保護者会は、コロナ時は会議の開催が難しかったが、今年度は、会長会議 2 回、家庭教育委員会 2 回実施され、充実した取組ができた。 ⑥共同事務室ができて 3 年目、会議の定例化、各種業務の見直し等を進めることができた。また、経験年数の短い事務に対して相互支援の機能を果たすことができた。 △①学園として不登校の課題が大きい。深刻なケースも見られる。日々の丁寧な対応、職員の協働的な対応は続けられている。 △②連携部会の取組は回数が限られている中で、ミッションを成果が見えるところまで高めることは難しい。	各会議の使命を認識する ・経営会議、企画運営会議は、原則月 1 回の定例会とするのが、今後ともよい。授業研究の充実を目指し、教育課程会議が主となり学園の研究推進を行い、連携部会が具体的な授業づくりについて協議ができるよう、計画的に運営する。 ・園所と一緒にあった学園 PTA・保護者会は久美浜の大きな特色なので、今後とも継続し充実した活動を目指したい。 ・月 1 回の事務部会を実施し、課題の共有化、事務作業の効率化等について、きめ細かく協働することが大切である。 ・今後も教育相談部会での事例研修、具体的な取組の協議等、地道な取組の継続が必要である。 ・未然防止について、事例研修や入学説明会への講師招聘等、スクールカウンセラーの具体的な活用を図る。 ・校種間での情報連携や家庭支援連携を進め、不登校の未然防止や早期対応に努める。 ・小学校でも、オンラインを活用するなどして、同学年担任間の交流や連携の方法を模索する。
---	---

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立峰山こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点（短期経営目標）	
元気いっぱい 笑顔いっぱい こども園 だ〜い好き！” ～互いに認め合える心豊かな子どもをめざして～ 1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体で生きる力を育てる。 2 主体的に活動し、友達と関わりながら、夢中になって遊び込める環境を整え、持続力や協同力を育てる。 3 身近な人や地域とのかかわりをもつ力を育てる。 4 互いの良さを認め合い、心豊かに意欲的に活動する力を育てる。		○保護者と連携をもちながら、様々な行事や活動の内容を見直すことで、落ち着いた雰囲気の中、意欲的に生活や活動を進める教育・保育を行うことができた。 ○様々な実体験・感動体験の活動を通して、学びに向かおうとする姿勢や豊かな言葉力に繋げることができた。 ○園児が言葉で伝え合いながら主体的に協同活動を進めたことで、達成感や満足感を味わい自己肯定感に繋げることができた。 △子ども一人一人を受け止め関わることを心掛け、教育・保育を進めたが、それぞれの思いをしっかりと受け止め丁寧に関わるのが充分とは言えなかった。 △職員の資質向上のための園内研修に努めてきたが、実施の仕方や時間を確保するための体制などが難しく、充分に行なえなかった。	・園児自らが生活の仕方や健康に関心を持ち、規則正しい生活が習慣になるようにする。 ・様々な実体験や感動体験を通して、豊かな感性や言葉の力を養う。 ・「楽しいこども園」を基本に、遊びを中心とした活動の中で、コミュニケーション力や持続力、学びに向かう力を育てる。 ・園児の主体的に取り組む姿を見守りながら、互いの良さを認め合い、他者と関わる力を育てる。 ・保護者が安心して子育てができるように、子育ての不安に寄り添いながら支援する。 ・地域に開かれた園として、情報発信に努める。 ・滑らかな接続ができるように、峰山学園（保幼小中一貫教育）の連携を深める。	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進 （保幼小接続）	『峰山学園』の連携 ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成 ・確かな学力の育成 ・コミュニケーション能力の育成 ・評価を見通した取組の充実	・峰山学園経営会議を通して園児・児童の実態を交流する中で、共通の目標をもち、主体的・対話的で深い学びを軸とした教育・保育を進める。 ・幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえ、幼児期から中学校まで一貫した指導を園内で共有する。 ・遊びを通して人と繋がる楽しさを味わい、ことばで伝え合う力を育む。 ・「保幼小の架け橋プログラム」を反映しながら、小1スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムの検証を私立園や学園担任会と共に、教育・保育内容の理解を深める。	○経営会議や公開授業・公開保育を通して、互いの状況を把握し、課題意識をもちながら教育保育を進めることができた。 ○幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を振り返りながら、園で大切にしていることを伝え、小中学校と連携を取ることができた。 ○コミュニケーション能力の育成を大切にしなが遊びを充実させ、言葉力の向上につなげることができた。 ○スタートカリキュラム・アプローチカリキュラムを担当保育教諭も一緒に見直しながら、私立園や学園担任会を通して学園内で共通理解することができた。 △学園の研修会や公開授業などに保育教諭が参加する機会があまりもてず、実際に小中学校の様子を見て学ぶ機会とならなかった。	・保幼小中間の連携が深まってきたことを感じているが、保護者や地域にどこまで伝わっているだろうか。配信など通し伝えていくことが必要である。 ・学園と同じ時に、保護者会と連携しあいさつ運動を行っているが、挨拶が返ってこない状況がある。人間不信の子ども達もいるのではないかなと思われる。乳幼児期の人との関わりを引き続き大切にしたい。 ・私立園と連携し、教育保育のねらいや内容を共有することが大切だと感じる。

教育課程	- 感動する体験や伝統行事などを大切にし、豊かな感性やコミュニケーション力を養う。 - 基本的な生活習慣や態度を育てる。 - 互いを認め合いながら、自分の思いや考えを表現したり行動したりし、意欲的に活動を進める力を養う。 - 日常的に園内外での安心・安全に過ごそうとする姿勢・態度を養う。	- 園内外での感動体験や発見などを通して、考えたり工夫したりしながら生活や活動を行う。 - 挨拶を通して、人と関わることの心地よさを感じられるよう保護者会と連携し、あいさつ運動を実施したり、生活点検表などを作成したりして、生活習慣を整えていく。 - 互いを認め合いながら、園児が主体的に話し合ったり協同的な活動を進めたりできるように綿密に計画をする。 - 人とのつながりの中で自分らしさを発揮し、自信をもって意欲的に活動を進められるよう環境を整える。 - 園児の生活や発達の状況を把握し、個々に合った助言や援助・指導を行う。 - 園外保育を通して、実際に交通ルールを体験したり、園内では生活や遊びを通して集団でのルールを園児と考えたり、知らせたりしながら、様々な場面での危機管理について学ぶ。	○様々な活動を通し、実体験や感動体験を大切にしながら教育・保育を進めることができた。 ○職員同士が同じ保育観をもちながら連携し、子ども達が主体的に取り組んで活動を進めることができるよう行事の在り方を再確認した。 ○子ども達の育ちの背景を職員間で共有し、助言や指導などを考えながら関わる事ができた。 △保護者会と協力しながら、あいさつ運動に取り組んだが、その時だけの活動や行動になってしまい、継続ができなかった。 △熱中症の危険から、園外散歩に出掛けて実際に交通ルールを体験したり考えたりする機会が十分にもてなかった。園内で交通ルールを学ぶ機会もあったが、子ども達が実際に体験する学びとしては不十分であった。	- 一年を通し体づくりに取り組み、持続する成果が子ども達の遊びを見ていると感じる。 - 様々な行事に目的をもって活動・参加していることがうかがえる。取り組む際の目的やねらい、教育・保育の大切さを保護者にも伝えられている。 - 子どもが「したい」と言う気持ちを大切に、自信をもって活動する姿が見られる。 - 環境に工夫され、安心、安全面にも気を付けられている。
子育て支援	子育ての不安に寄り添い、安心して子育てができるように支援する。	- 保護者の思いや不安な気持ちに寄り添いながら、相談しやすい雰囲気をつくり丁寧に対応をする。 - 園開放や園庭開放・懇談会などを通し、保護者同士が交流し合える場を提供する。 - 園児や家庭の実態を把握し、保護者との連携を丁寧に行い、個々に合った支援や対応をする。	○相談しやすい雰囲気に関心掛け、丁寧に対応することができた。また、職員からも率先して保護者に声を掛け、相談にのったり子育てについての話をしたりし、それぞれの不安に寄り添うことができた。 △個人懇談を中心として丁寧な対応はできたが、クラス懇談会など大勢で話す機会がもてず、保護者同士が気軽に交流できる場を提供することができなかった。	- 支援センターに祖母との参加も見受けられ、利用しやすくなっていると感じる。 - 親の育児の低下を感じる。支援してもらって当たり前と言った風潮も見受けられ、園を通して子育ての大切さや関わり方など機会を見て伝えていってほしい。
研修 (教員の資質向上・人権教育)	- 園内研修の充実を図り保育教諭の資質向上(人権を含む)に努める。 - 保育支援システムやICTの活用を効率よく進める。	- 職員同士で保育の振り返りや意見交流などの時間をもったり、指導力や関わり方(人権)など学び合ったりするためにドキュメンテーション・公開保育・担任会・事例研修などを活用し、保育教諭の資質向上に努める。 - 保育支援システムを活用し、教育・保育の実践に活かすと共に、業務の見直しを進める。	○人権について、園内研修を重ね、職員の人権に対する意識改革、質の向上に繋げることができた。 ○各クラスや学年がドキュメンテーションを活用し、教育・保育を保護者に伝えたり、連絡事項や行事の様子など機会を見て、保護者に配信したりすることができた。 △ICTの活用は進んできているが、現状をふまえながら業務改善につながるような見直しを進めていく必要がある。	- 行事等様々な物が手作りされているが、時間がない中で先生たちの大変さが伺える。 - 不適切な声掛けや関わりなどは見られず、適切な教育・保育がされている。
次年度に向けた改善の方向性	- 園の取組や活動などを積極的に配信し、一貫教育での縦の繋がりを大切にしながら職員も一緒に連携を深めていく。 - 実体験や感動体験を大切にしながら、様々な活動に子ども達が主体的に関われるよう進めていく。 - 活動や行事を振り返り工夫しながら、開かれた園として保護者や地域に取組を発信し、教育・保育を進めていく。 - ICTの活用を進めながら、質の高い教育・保育の実践に努める。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立大宮こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点（短期経営目標）	
○人との関わりや体験を通して、心豊かでたくましく、生き生きと遊ぶ子どもの育成 ・心も体も元気な子ども ・のびのびと遊び、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、感性豊かな子どもの育成 ・人の話を聞き、自分の思いや考えを言える子どもの育成 ○テーマ 『わくわく げんき えがおのわ』 ～伸び伸びと遊び、ともに育つ子どもをめざして～		○大宮学園の教育目標や方針を公開保育や実践報告などを通して研修することで共通理解をすることができた。 △自然に恵まれた地域ではあるが、交通量の多さからの安全確保が難しいため園外に出る機会が少なかった。園庭や園内の環境を整え、自然体験や身体を使った遊び、地域の人との交流など充実を図っていきたい。 ○年間を通して毎朝サーキットを行うことで生活リズムが整い、朝の持ち物の始末が習慣付き意欲的に取り組むことができるようになった。 ○医療的ケアの必要な園児や国籍の異なる園児、障害のある園児など様々な背景をもつ園児がいる中、生活や遊び、異年齢交流などを通してそれぞれの違いを受け入れ、一人一人の良さを生かすことで、思いやりの気持ちや認め合う豊かな心が育ってきた。 △様々な体験から自分の思いや考えを伝えることの嬉しさを感じる園児が増えてきたが、うまく伝えられず友達や保育教諭に補ってもらい話すことを経験している園児もいる。	・戸外活動、運動活動の充実による基礎体力の向上と望ましい基本的生活習慣サイクルを構築する。 ・友達との関わりを通して多様性を認め、自分らしさを発揮しながら育ちあう教育保育を進める。 ・園の環境の充実を図り、主体的に環境に関わりながら友達と一緒に様々な遊びや活動する場を保証し、豊かな感性やことばの力を養う。 ・地域の人や文化に触れる機会を設け、生活体験や社会体験を豊かにする。	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中 一貫教育 の推進（保 幼小接続）	・大宮学園の教育目標をもとに基本方針や取組内容を理解しながら教育保育を進める。 ・保園小の連携を密にし、一貫性、連続性のある指導に努める。	・学園コーディネーターを招いて園内研修を行い、園の教育 保育と学園の教育目標の一貫性を確認し、全職員で共通理解して実践していく。 ・アプローチプログラムを基に、教育保育内容を検証しながら架け橋期の教育保育活動を進める。	○学園の方針を園内で共通理解するために学園コーディネーターを招いて研修会を開き、園と学園の教育目標の一貫性を確認し共通理解することができた。 △学園の担任会や連絡会などを通し連携を密にしてきたが、体験入学において園と小学校のねらいの違いが浮き彫りになった。園と小学校間で交流活動のねらいや内容をしっかり共有するとともに、架け橋プログラム作成の必要性も感じる。	・学園の便りで様子がよくわかる。 ・運動会や発表会の行事などに小学校長が来賓で来られていて連携が取れていることを感じた。 ・挨拶は人をつなぐ言葉なので、学園の取組として続けてほしい。
教育課程	・楽しい園生活を過ごせるようにする。 ・主体的で伸び伸びと遊ぶ力を育て、遊びを学びにつなげる。 ・人とつながることの喜びを味わえるようにする。	・幼児理解に努め、一人一人の園児が個性を発揮できる教育を推進する。 ・築山の環境を生かし、園児の学びを豊かにする園庭の環境づくりを目指す。 ・大宮学園の取組「ハイタッチモーニング」を定着させ、心を育成するための教育活動の充実を図る。	○興味や関心を引き出す環境をつくることで、好きな遊びを自ら選び楽しみ、個性や想像力を発揮しながら楽しく学びを得ることができた。 ○海と星の見える丘公園の野木園長の協力を得て、築山環境整備を行うことで、人とのつながりを喜び、自然環境への興味、関心や、体を使った遊びの楽しさも感じるようになった。	・園周辺の交通量が多いため、園外保育には十分気をつけ、地域の駐在さんをお願いするなどして安全面の強化に努めてほしい。

	・直接体験からの感動を経験し、ことばの力の育成に努める。	・異年齢や地域との交流を行い、生活や遊び、様々な体験を通して思いやりの気持ちや人と関わる楽しさを感じられるように進めていく。 ・話したい、伝えたい、聞きたいと思えるような様々な遊びや体験ができる環境づくりをしたり、振り返りの時間や場をもったりする。	○大宮学園の「ハイタッチモーニング」を通して、人とつながる喜びを感じたり、異年齢の友達と一緒に菜園活動や琴の演奏、お茶会など交流活動を実施したりする中で、他者と関わる大切さや楽しさを実感し、思いやりや社会とのつながり、地域への愛着も深まる様子が見られた。 ○安心できる環境の中で、直接体験や感動体験を通して、自分の思いや考えを伝えようとしたり、振り返りの時間をもったりすることで、伝わることの喜びを感じ、ことば力の育成に繋がった。	・築山の環境は子ども達が遊びたいと思えるようになっていてとても良いと思う。保護者も巻き込みながら園庭の環境づくりができればよいのではないかな。
子育て支援	・保護者が安心して子育てができるよう支援する。 ・家庭の教育力向上を図るとともに家庭と連携し、「共育て」を目指す。	・日頃から保護者の話や相談に耳を傾け、一緒に課題解決に向けて進めていく。 ・月2回定期的に園庭開放を行い、園児の姿を見守りながら保護者同士が交流したり、保護者が気軽に職員と話したりできるようテーブルやパラソル、椅子などを設置して場を整える。 ・エントランスにテーブルや椅子を設置し、保護者向けの絵本や育児書を置くなどし、保護者が集ったり安らいだりできる環境を整える。 ・園児の具体的な姿をできるだけリアルに伝え続けられるようホームページやドキュメンテーションなどを活用して配信し、信頼される園づくりに努める。	○週一回の保育ドキュメンテーションを配信したり、全職員で園児の姿を共有して担任以外の職員からも保護者に声をかけることができるようにしたりし、園全体で教育・保育を行っていることを保護者に感じてもらうように努めた。 ○送迎や園庭開放時に積極的に保護者と園の様子について話すことで、保護者は安心感をもち、園の方針や活動に対する理解が深まった。また、保護者同士が自然に交流できる環境を作ることで、保護者同士のつながりが強化され、園全体のコミュニティ感が向上した。 △延長保育利用のため直接、園での様子を伝えるにくい保護者もあった。個人懇談や保育支援システムをうまく活用しながら、より丁寧な連携を取っていきたい。	・多国籍の方や様々な事情を抱えている家庭が多いので、園が居心地の良い場所となり、相談窓口となるよう、丁寧で親切な対応をして信頼関係を築いてほしい。 ・保育支援システムで子どもの様子がよくわかると保護者も安心できるととても良いツールだと思う。
研修 (教員の資質向上・人権教育)	・園内研修の充実を図り、保育教諭の資質向上（人権を含む）に努める。	・年間研修計画に基づき事例研究や公開保育などを行い、保育教諭の資質能力の向上を目指した研修に取り組む。 ・大宮こども園の教育保育について全職員で園内研修を実施し、教育保育のあり方について共通理解する。 ・園内研修の内容を工夫し、研修の充実を図る。	○グループワークを中心に事例研究や研修報告などを工夫しながら行ったことで、全職員が思いや考えが出しやすく、資質能力の向上につながった。また、月毎の指導の反省では、成果と課題を他学年と共有したり、意見を聞いたりすることで、異なる視点や新たなアイデアを得ることができ、園全体の教育・保育の質の向上が図られた。	・時間の確保が難しいと思うが、よりよい保育・教育をするためにも研修をして、質の向上に努めてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	○大宮学園の新たな教育目標をもとに基本方針や取組内容を理解しながら教育保育を進める。 ○自然環境への興味関心をより深め、遊びや活動の中で地域や専門分野の方々とのつながりながらSDGsの意識を高める。 ○こども園と小学校の連携を強化し、特に、「架け橋期」における支援を充実させる。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立網野こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
『園児自らが主体的に環境に関わり、心豊かでたくましく生きる力を育てる』		○網野学園経営会議や全体研修会の参加報告等を通し、学園で育成したい非認知能力について職員間で共有した。また授業研究会に参加し、小中学校の教職員と意見交流をしたことで園での教育・保育を言語化や明文化する等、実践に向けた取組を定着させることができた。 △園では温かい雰囲気づくりや一人一人に応じた配慮を心掛けてはいるものの、生活習慣においては、それぞれの家庭で認識の差があった。また、家庭の事情や保護者の多様性を理解し、対応する難しさも感じた。 ○保育者が遊びや行事を見通し、園児が自己決定をしたり、やり切ろうとしたりする雰囲気をもつ等、環境の工夫が園児の主体的な遊びの充実につながった。 △教育・保育における人権意識の大切さを重視しているが、関わり方や捉え方は職員の意識の差にも係わるので、機会を捉えて研修をしていく必要がある。 ○教育・保育内容や園児理解、支援策について等、ベクトルを合わせて実践できるようOJTを重視し、職員同士のやり取りの活性化を図ることができた。		・改めて遊びの中の学びや非認知能力の育成について、網野学園での取組や研修等を踏まえ共有し、実践や検証をしていく。また、アプローチプログラムを指導計画に反映させながら、架け橋期の充実を図るとともに、さらに小学校との連携を密にしていく。 ・乳幼児教育・保育の中で意識したいSDGsの項目を選定したり、捉え方を見直したりして、職員自ら進んで取り組むような環境づくりをする。 ・園児一人一人を丁寧に見取り、子育て支援や家庭支援を重視しながらウェルビーイングを探り、高めていく。 ・危機管理の徹底を図るとともに、心身共に豊かな遊びや生活が展開できるよう努める。 ・職員一人一人が人権意識を基盤に探究心をもつとともに、主体的に同僚性やOJTを生かしながら、質の高い教育・保育につなげていけるよう職員同士をつないでいく。
＜テーマ＞ 『どきどき わくわく きらっ！ ひとりひとりがかがやいて』				
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進（保幼小接続）	・「網野学園」の教育目標をもとに、目指す子ども像や基本方針を念頭におき、園での教育・保育を進める。 ・園児と児童の交流の機会や相互理解を深めながら、互惠性のある取組を進める。	・網野学園で研究する第2期『未来を拓く学校づくり』の取組を確認したり深めたりしながら、教育・保育の中で育む非認知能力と認知能力の相関性について探っていく。 ・園児と児童の交流の機会や内容を見直し、『架け橋期』を意識した連携の在り方を共有し、実践する。	○京丹後市保幼小中一貫教育授業研究会で公開保育をするにあたり、子どもの姿から、非認知能力と認知能力を丁寧に捉え直したり、職員間で共有したりすることができた。相関するところはあるが、就学前では、非認知の部分（土台）を積み上げていくことの大切さを確認し合った。 △小学校からのアプローチによって交流が密になり、連携の強化にはつながったものの、『架け橋期』に関しては踏み入れることができなかった。今後、学園の中で架け橋プログラムを作成していきたい。	・園と小中学校がお互いの立場で満足感や充実感のあることを1つずつ積み重ねている。それが大切なことである。 ・授業研究会をはじめ、今年度は特に園と小中学校との連携交流活動が多かった。実際保育を参観したり、網野学園のたよりを見たりする中で、一貫教育が根付いていることがよく分かった。

教育課程	『包み込まれているという感覚』を基盤に、園児の安心や安定的保障をしながら、心豊かに園生活が楽しめるようにする。 - 探究的な遊びが展開できるよう、環境や援助の工夫をする。 - 遊びと非認知能力の相関性について、指導計画に反映させながら実践を重ねる。	- 多様性を踏まえながら園児や家庭に適切な支援が提供できるよう、園内で作成した『こころの育ち指標図』をもとに、全職員の連携を強化し、実践する。 - 探究心を高めながら遊びを展開していくことができるよう、園児の興味や関心を丁寧に見取り、保育者も共に心揺さぶられる遊びや活動を共有する。 - RV-PDCA を充実させながら、マネジメント効果を実践に生かせるようにする。	○園児一人一人を丁寧に見取り、個別最適こそがウェルビーイングにつながることを園内で共有した。園内研修には欠かさず『心の育ち指標図』をもとに話し合い、実践につなげていった。 ○「なぜ」「もっと」等の言葉や思いを遊びの中で価値付けをして、園児と保育者が共主体となって広めたり深めたりしながら進めることができた。 △保育者の資質やそれぞれの保育の在り方を助長するような指導には至らなかった。	- 一人一人の思いややる気を大切につなげて教育・保育を進めている。保育者が子どもに寄り添い、主体性や長所を伸ばしている様子が随所に見られた。 - 非認知能力やウェルビーイングを掲げて1年間取り組んでいたが、意味の分からない保護者もあったと思う。エピソードをもとに具体的に伝えることで、さらに成果や好評を得ることができたのではないかな。
子育て支援	網野学園の取組を啓発しながら、家庭と連携し、基本的な生活習慣の確立と定着を目指す。・園開放や園庭開放日を設け、親子で楽しさを共有できる場の提供をする。	- 網野学園リーフレットを活用したり、『網野学園家庭学習頑張り週間』の取組意義を伝えたりしながら、基礎基本の定着が学習基盤になることを啓発する。 - 親子や保護者同士が交流できる場を通して、こども園での様子を知ったり、子育て情報を交流したりすることができるようにする。	○『網野学園家庭学習がんばり週間』の定着に加え、京都ノートルダム女子大学の高井特任教授による『子育て講演会』や、『学びスタート調査結果』等、直接的または間接的にも子育て支援に係わる取組を充実させた。 △園庭開放は好評だったものの、園開放への参加が少なく、保護者同士の情報交流の場にはなりにくかった。網野地域子育て支援センターが拠点となっていると感じる。	- 保護者からの依頼で面談や子育て相談を受けている園の信頼関係や体制づくりは今後も続けてもらいたい。 - 支援センターがこども園と離れているため園児との交流がもちにくかったり、土曜利用者の制限があったりなど課題もあるのではないかな。
(A) 研修(教員の資質向上・人権教育)	非認知能力の育成や特別支援教育等を軸にした園内研修を進め、全職員の資質と人権意識の向上を目指す。	- 遊びと非認知能力の育成について可視化しながら同僚性やOJTを活用しながら、職員の人材育成につなげていく。 - 園児一人一人を丁寧に見取り、人権意識をもちながら適切な教育・保育にあたるための園内研修を充実させる。	○ギミックブラッシュアップシートの共通理解と保育構想シートを作成し共有したことは、専門性を高めるための大きな成果となった。全担任がメインとなる園内研修を行うことで、同僚性やOJTにつながる意義のある学びとなった。 ○人権意識を持続するため、学期ごとに全職員がチェックシートを活用し、振り返りを行った。また、園児や保育実践に対して忌憚のないやり取りができる職員関係が、適切な教育・保育に結び付いた。	- 保育者が自主的に園内研修をしていることは自分磨きにもなり素晴らしいことである。それが子どもの姿に返っている。保育者の表情や言葉、動き等を見ていて気持ちがよいと感じる。 - 働き方改革の視点で考えると、保育者の資質向上をどのようにしていくかが課題である。
次年度に向けた改善の方向性	- 既存のアプローチプログラムを参考にしながらさらに、5歳児と1年生との学びをつなぐ『架け橋プログラム』を作成し、架け橋期の充実を図る。 - 網野学園の新たな教育目標や目指す子ども像、経営方針等を職員はもとより保護者にも周知し、自園の教育・保育計画に反映させるとともに、RV-PDCAを生かし、さらに質の高い教育・保育を目指す。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立丹後こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点（短期経営目標）	
- 生活や遊びの中で様々なことに心を動かし、豊かな園児を育む。 - 地域に愛され、保護者に信頼される園づくりを進める。 - 職員同士が互いに学び合える組織づくりを進める。		○生活の中で一人一人の園児の声を聞き、気持ちに寄り添うことで自分の思いや考えを伝えようとする園児の姿がたくさん見られるようになった。 ○園の生活や活動の様子を動画やクラスだよりなどでアプリを使ってタイムリーに知らせてきたことで保護者と連携して教育・保育を進めることができた。 △正職員は、職員会議や日々の保育の振り返りをする中で援助や環境について話し合う機会をもつことはできたが、会計年度職員に細かく伝えることができないこともあり、実践につながらないこともあった。	「やってみよう！やってみよう！いっぱい遊んでつながって」～一人一人が輝き、育ち合えるこども園をめざして～ - 様々な人やものに関わったり触れ合ったりしながら、豊かな心を育てる。 - 友達と力を合わせたり異年齢児との関わりを楽しんだりしながら集団の中で育ち合える環境を設定する。 - 職員の連帯・協働意識の高揚を図り、「チーム」で取り組む体制をつくる。	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進(保幼小接続)	『丹後学園』間の連携 - 幼児期の学びがどのように深まり、広がっていくのかを見通す。 - 児童期の育ちを見通した教育課程を編成する。	- 小学校との交流を通して幼児と児童の実態を知り、子どもの育ちへの理解を深める。 - 研修会や連絡会等を通して幼児教育と小学校教育の指導方法の違いを知り、互いの教育への理解を進め、幼児や児童の発達を捉えた環境の構成や教材の工夫をする。 - 小学校への滑らかな接続となるよう、スタートカリキュラムやアプローチプログラムを見直し、実践につなげていく。	○小学校との交流や授業参観、事後研究会等に参加することによって、小学生の実態を把握したり指導内容や指導方法について理解したりすることができた。 ○園の公開保育では、小中学校の先生に参加してもらい話し合う機会をもったことで幼児教育への理解を進めることができた。 ○子どもの実態や支援の仕方について、小学校と何度も連絡を取り合ったり話し合ったりすることで、子どもも保護者も安心して学校生活を送ることができた。	数年前と比べると交流の回数や内容が変わり連携が進んでいることを感じた。
教育課程	教育・保育活動の充実 - 夢中になって生活や遊びに向かおうとする園児を育てる。 - 心身共に健康な園児の育成	- 園児が興味をもって、自分から素材・用具等に関わることができるよう環境を整え、援助の方法を工夫する。 - 様々な人やもの、自然との関わりの中で見たり触れたりする機会をもち、不思議さや自分の思い通りにならないもどかしさ、思いやりの気持ちなど、多様な感情体験ができるようにする。 - 園児一人一人の個性や発達に即した多様な経験を重ねる中で、十分に自己発揮して遊ぶ喜びや達成感を味わい、自信をもって行動できるように環境を整える。 - 自分でできることの範囲を広げながら、個々に合わせて援助し、生活に必要な基本的生活習慣や	○園児の興味・関心や発達に合わせて環境を整えることで、興味をもったものを自ら遊びに取り入れたり繰り返して遊んだり試したりする姿が見られた。 ○異年齢での活動を積み重ねることで、小さい組の友達に対して優しく声をかけたり手をつないだりする姿が多く見られるようになった。 ○園児一人一人の個性や発達に即した環境や活動を準備することで友達と一緒に試したり工夫したりして好きな遊びを十分に楽しむことができ、達成感を味わい自信をもって行動する姿が増えてきた。 ○年に2回生活点検をしたり、登園が遅い家庭には懇談をして生活リズムを整えることの大切さについて伝えたり	- 職員の仲の良さが子ども達の育ちにつながっている。 - また、昨年と同じではなく園児の姿に合わせて活動の内容も変化している。

	・ 自他共に大切に思える園児の育成	・ 態度を身に付けることができるようにする。 ・ 体を動かす気持ちよさを感じられるよう多様な動きができる機会や場所、環境を充実するようにする。 ・ 自分の思いを表現し伝わる喜びを感じられるように、全体場で発表したり、友達同士で話したりする機会をつくる。 ・ 様々な年齢や立場の人との交流を実施し、ときどきわくわくするような感情体験が味わえるようにする。 ・ 生活や遊びの中で、自分の思いや考えを伝える、相手の話を聞く、受け止めるなどの体験を通して互いを認め合い大切にすることを育てる。	したことで、早く登園する園児が増え生活習慣の見直しにつながった。 ○天候に応じて園庭や室内でマラソンやサーキットを継続して続けることで多様な動きを経験することができ、体づくりにつながった。 ○一人一人の思いを読み取り言葉に変えて伝えることで自分から担任に伝えたり友達同士で話したりする姿が多く見られるようになってきている。 ○クラスの担任が一人一人の思いを丁寧に読み取りじっくり関わり、その思いをクラス全体に伝えることで子ども同士で認め合う姿が広がりつつある。	・ 誰に対しても挨拶をしたり、話しかけられると自分の言葉で答えたりする園児が増えたことはとても嬉しく感じる。
子育て支援	・ 保護者と連携し、それぞれの家庭に合わせた支援をする。 ・ 支援を要する園児に対しての支援策について園全体で考える。	・ 子どもの育ちや乳幼児期の教育・保育への理解を深める機会をつくり、園児の健やかな成長を支援する。(個人情報には十分留意しつつ、園日よりクラス日より、アプリを使つての動画配信等) ・ 懇談会等で発達状況を伝えたり家庭の様子を聞いたりしながら、園児の課題や今後の方向性について保護者と共通理解し、医療や療育などの関係機関と連携し、一人一人に合わせた支援ができるようにする。	○登降園の際に園児の様子を詳しく伝えたり、たよりやアプリなどを使つての動画配信を積極的に行ったりすることで、園児の様子や成長している姿を共有することができた。 △懇談会や登降園の際に丁寧に園児の様子を伝えたり、懇談をしたりして担任と保護者と共通理解することはできたものの、クラス懇談会を実施できなかったため、保護者同士をつなぐ機会を十分に設けることができなかった。	・ アンケートの結果からも保護者との関係がうまくいっていると感じる。日頃から職員が丁寧に関わっているからだと思う。
(A) 研修(教員の資質向上・人権教育)	・ 資質向上を目指し、意欲的に取り組もうとする職員を目指す。 ・ 保育研究を継続的に実施し、指導改善に生かす。	・ 園児一人一人に応じた指導をするため、各クラスの職員同士が園児の発達課題を共有し、援助や環境の工夫について話し合う機会をもつ。 ・ 職員同士が支え合い、協力し、高め合える職場環境や子どもの姿を自然に語り合えるような雰囲気づくりをする。 ・ 全職員が研究テーマの目的・仮説・方法について具体的に理解できるよう研修の場をもち、教育・保育が意欲的に進められるようにする。	○付箋を用いてのワークショップ形式で月反省を行うことで、新人職員も自分の意見を発表する機会がもて自信につながった。また、援助や環境について職員同士で意見を出し合う姿が多く見られるようになった。 △日々の業務に追われ、十分な研究の為の時間をつくるのが難しかった。 ○職員同士が、活動や子どもの様子について語り合ったり相談し合ったりする姿が多く見られるようになった。また、職員同士が互いを認め合い思いやる姿を見せる事で、園児の中にも遊びや生活の中で励ましたり認めたりする姿がたくさん見られるようになった。	・ 長時間園児がいる中で研修したり保育を振り返る時間をつくることは難しいと思うが、日頃から園児の様子について語り合うだけでも学びになっているのではないか。
次年度に向けた改善の方向性	・ 一年生との交流や小中学校の教員との交流の内容を検討し、また公開保育を通じてより子どもの育ちへの理解を深められるようにする。 ・ クラス懇談会や参観を通じて保護者同士がつながることができるような機会をつくる。 ・ 園児の姿や活動を振り返り、子どもの発達や内面について園内研修を重ね、より深く理解できるようにする。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)**

こども園名〔京丹後市立弥栄こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題		本年度こども園経営の重点（短期経営目標）
1 生活に必要な習慣・態度を身に付け、健康な心と体を育てる。 2 自ら様々な環境に関わり意欲的に遊ぶ中で豊かな心を育てる。 3 身近な人や地域に関わり、思いやりの心や人権意識、規範意識の芽生えを育む。		○学園内での公開保育と実践報告研修を通して、実際に園児が活動を進める姿や保育教諭の関わりや言葉掛けなどを参観してもらうことで、乳幼児期の大切な関わりや捉え方などを共通理解することができ、小学校との連携についても検証することができた。 ○保育教諭間で連携をとり、活動内容に応じた場や人数、音量など環境構成の工夫をし合うことで、少しずつ落ち着いて生活や活動を進めることができるようになった。 ○園児一人一人の気持ちの安定を図ることを第一に考え、園児の思いを受け止め、寄り添い関わることで、気持ちに折り合いをつけることができる園児が増えた。 ○朝の体の目覚めや体づくりのため、年間を通して計画的に体操やマラソン・サーキットなどを取り組み、園児同士や保育教諭と楽しみながら進めていくことができた。 △園児の姿を受け止め、寄り添う大切さを職員間で共有し同じ方向に向かって教育・保育を進めていくよう繰り返し話し合いを進めてきたが、それぞれの保育の考え方の違いから保育の進め方や関わりについて共通理解や連携に難しさを感じる時があった。		・一人一人が安心安定できる環境を整え、意欲的に生活や遊びに向かう中で基本的な生活習慣を身に付け、自立心を育む。 ・園児自らが周囲の環境に関わり活動する充実感を味わいながら、発達に必要な経験を積み重ね豊かな心を育む。 ・いろいろな人との関わりを通して、自分の思いや考えを伝えたり、人の話を聞いたりする等、コミュニケーション能力と思いやりの心を育む。 ・園児のあるがままの姿を温かく受け止め、自己肯定感を育み、相手の良さや多様性を認め合える柔軟な心を育む。 ・家庭、学校、関係機関及び、地域との連携を行い、充実した教育保育を進める。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進（保幼小接続）	・弥栄学園の教育目標を踏まえ学園の基本方針に基づき、取組を進める。 ・小学校との連携を密にし、スムーズな接続を図る。	・弥栄学園の重点課題と園児、児童、生徒の実態を把握し、不登校の解消などについて取り組む。 ・弥栄学園の諸会議や公開授業・保育などに参加し、全職員でスタートカリキュラム、アプローチプログラムの検証を行いながら、実践を重ね、幼少期に育成する資質、能力を明確にして、小学校への滑らかな接続を図る。	○1園1小1中となり、その特色を生かすために何ができるのか学園内の会議や部会で考えて取り組んだ。その中で、各校園の指導や校風等を理解して互いに学び合うことで、10年間を見通した園児の支援の仕方等を考えることができた。 ○園小連携の中で、小学校と園生活の流れを共有し合い、安心して学校生活を過ごせるようスタートカリキュラムの見直しを図ることができた。 ○隣接している小学校のフェンスを曜日により中間休みに開放して交流を図ったことで、より1年生に親しみをもち交流活動を深めることができた。	・いろいろな交流や活動を行っていることは、たより等を見てたいへんよいことだと思っている。連携も進んでいると思うので、これからも頑張ってもらいたい。

教育課程	・保育教諭との信頼関係を基盤に安心、安定の中で園生活を楽しむ、自分の力で行動する充実感を育む。 ・基本的生活習慣を身に付け、見通しをもって行動する園児を育てる。 ・自分なりの言葉で表現したり、相手の話を聞こうとしたりする意欲や態度を育てる。	・一日が気持ちよく迎えられたり、送れたりできるように挨拶の大切さを知らせたり、人とつながる心地よさを感じられたりするような対応に心がける。 ・友達と一緒に体操、マラソン、サーキット遊びなど、体を使った遊びを積極的に取り入れ、健康な体づくりをする。 ・園内外の自然体験を通して、感じたことや考えたことを様々な方法で表現できるようにする。 ・一人一人の心情や発達を見取り、園児に寄り添い居心地のよい環境づくりや関わりを進めていく。 ・絵本などに親しみ、言葉の楽しさや美しさに気付き思いを巡らせ保育教諭や友達と同じ世界を共有し、心通わせる経験をする。	○登園時や活動中、気持ちが不安定になる園児の様々な姿があったが、寄り添い自己決定して行動できるよう援助をしてきたことで、落ち着いて生活する園児の姿が増えてきた。 ○登園してきた親子を5歳児の挨拶当番が迎える活動が3年目を迎えた。5歳児の元気な挨拶で園全体が活気づき、1日の良い始まりとなった。一緒に並んで玄関に立つ年下の園児の姿もあり、5歳児の姿はよい手本となっている。 ○発達に応じた体の動きを年齢ごとに考え、年間を通してサーキット遊びや運動を行うことができた。繰り返し活動することで、健康な体づくりができた。 △天候や気温などを考慮すると散歩に出る機会がもちにくく、いろいろな地域の自然に触れる機会が少なかった。 ○弥栄学園一斉に取り組んだ『家庭学習頑張り週間』を通して、絵本貸し出し回数を増やし絵本に触れる機会をつくることができた。	・学園の一斉挨拶運動で園に来ると、園児の元気な挨拶が聞こえてくる。大人も朝から元気をもらって嬉しい。恥ずかしくて声が出せない様子の園児もいるが、笑顔やハイタッチで返してくれるなど子どもなりにコミュニケーションを取ってくれることが嬉しい。 ・参観すると、行事等でいろいろな工夫が見られる。いつも保育者が子どもに寄り添う優しい姿がある。
子育て支援	・保護者の子育ての不安や悩みに寄り添い、喜びや楽しさを感じられるように支援をする。 ・未就園児の子育ての不安解消を図り、楽しく子育てができるように支援する。	・保護者が園児の成長に気付き子育ての喜びを感じられるように登降園時に園児の日々の様子を伝えたり、園だよりやクラスだよりの発行や保育支援システムでの配信をしたりする。 ・保護者の就労や家庭事情、子育ての悩みや不安、ストレス等配慮し、悩みを抱えている保護者への相談にのったり、リフレッシュ支援を行ったりする。(個人懇談、一時預かり保育等) また、不適切な養育等が疑われる場合は、関係機関と連携し適切な対応を図る。 ・こども園や地域子育て支援センターで、未就園児の親子や、出産前の保護者が育児を楽しんで行えるように相談にのったり、遊んだりできるようにする。	○保護者に行事や活動を知らせるために保育支援システムを通じて配信をした。特に乳児は写真で日常の様子を伝えることで、保護者から信頼を得ることができた。 ○園児の様子や面談等から家庭事情や保護者の悩みを知ることができた。その都度、園児や保護者を見取り、寄り添い丁寧に対応することに努めた。また時には関係機関と連携を図り、保護者や園児の支援を行った。 ○地域子育て支援センターを通して、入園前の子どもの遊びの姿を知ることができた。また、保護者の入園に関する悩みや不安などの相談にのり、園児が安心して入園できる支援につなげることができた。	・様々な家庭事情があると思うが、保護者も一生懸命子育てをしている。しかし、中には寂しさを抱えている子どもがいると思うので、保育者が受け止め温かく関わってほしい。保護者の頑張り認め子育てに気持ちが向くよう応援してあげてほしい。
研修	・園児一人一人の発達や家庭環境を考え、温かい関わりで支援できるよう職員の人権意識の向上を図る。	・園児のいろいろな姿を受け止めたり、寄り添ったりしながら自信をもって支援ができるような方法を学び合う。 ・日常的に保育内容についての話し合いの場をもち、保育を振り返り、園児一人一人によりよい関わりや支援が行われているかなど園内研修を行い、共通理解できるような職員会議をもつ。	○職員間でその都度、園児の姿から背景を見取り、支援の仕方を考え、共通理解しながら保育を行うことができた。多面的に園児を捉えようと職員間で話をする機会が増えたことで、いろいろな姿を見せていた園児が落ち着いて過ごせるようになりつつある。 △園内研修の参加人数や時間調整など、計画的に進めるための工夫が難しかった。	・保護者アンケートのなかで、園への信頼と保育者の温かい関りが嬉しいという評価が多く見られた。これは、園が頑張っている成果だと思うので、これからも頑張ってもらいたい。 ・職員の頑張りがよく分かるが、働き方改革を考え、負担になり過ぎないようにしてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	○園児一人一人に対する職員の人権意識の更なる向上に努め、安心安定して生活し意欲的に遊びに向かう園児を育成する。 ○様々な地域の特色を教育・保育活動に活かし、豊かな心と健康な体を育む。			

(別紙様式4) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告(こども園)** こども園名〔京丹後市立かぶと山こども園〕

こども園経営方針（中期経営目標）		前年度の成果と課題	本年度こども園経営の重点（短期経営目標）	
こども園教育目標 「元気な体と豊かな心、生きる力を持ったたくましい子ども」 《元気 勇気 笑顔 つながれ仲間》 ～やってみよう！やってみよう！ 一人一人が輝くために～ 1. 園児自らが興味関心をもって環境に関わり、心豊かでたくましく、生きる力を育てる。 2. 人との関わりの中で、人に対する愛情と信頼感、人権を大切にすることを育てる。 3. 相手の思いを受け止めながら、自分の思いや考えを表現する力を育てる。		○一つ一つの活動に頑張る個々の姿をしっかり受け止め認めることで園児は自信を付け、自己発揮しながら活動を進める姿が多く見られるようになった。 ○定期的なドキュメンテーションの配信により各学年の保育内容について理解を深めることができた。また、アプリでの配信により保護者の既読が確認できるようになり、お願いやお知らせ等が周知しやすくなった。 ○裏山での遊びの環境を意図的に多く取り入れたことで、体を動かしたり、自然を通して感じたり考えたりする体験を積むことができた。 △伸び伸びと園生活を送る園児は増えつつあるが、友達のよさに気づき園児同士が認め合えるつながりは、十分にもてなかった。 △積極的に栽培活動を取り組んだり、飼育物を通して愛情や生命の尊さについて意識したりしてきたが、行動や態度に結び付けることは難しかった。	・自ら遊ぼう、活動しようとする意欲、態度を大切にしながら自己発揮できる環境や関わりを工夫し、様々な人や物と関わったり触れ合ったりしながら、豊かな心を育てる。 ・一人一人の内面理解に努め、良さを認め、発達の特性に応じた指導と支援に努め共に育ち合う集団をつくる。 ・身近な自然を意図的、計画的に遊びの中に取り入れ、主体的で協同的な活動ができる環境を工夫し、健康な心や体、豊かな感性を育てる。 ・生き生きと遊ぶ、言葉で伝え合う、互いに思いやり共同する力を育成するための教育活動、異年齢活動、体験活動の充実を図る。 ・小動物や植物、野菜などの世話を通して、飼育物にも命があることを気づき、思いやりやいたわりの気持ちを育み豊かな感性を育てる。	
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題（自己評価）	学校関係者評価
保幼小中一貫教育の推進（保幼小接続）	・「久美浜学園」のめざす子ども像をもとに、学園の基本方針を理解しながら取組を進める。 ・園所や小中学校の交流の機会をつくり相互理解を深めるとともに園内研修で学びを共有し、保育実践に活かす。 ・就学の際の円滑な接続、必要な支援の継続をめざす。	・久美浜学園経営会議を通して子ども達の実態から課題点を知り、共通の目的をもつ。 ・小学校との連携（スタートカリキュラムやアプローチプログラム）を見直し、スムーズな接続に繋げる。 ・園児と児童、生徒との交流が深まるような学校行事（運動会、学習発表会、マラソン大会など）に参加し、豊かな心の育成につなげる。 ・学園内の園所や小、中学校と合同研修の場に参加し、互いに教育の理解を深め、効果的な指導方法や指導の連続性、一貫性について研修する。	○経営会議や小、中学校の授業参観に参加することにより子どもの実態を把握し、支援や連携につなげることができた。 ○園生活の生活スタイルや教育、保育内容を知ってもらうことで、幼児期と児童期の教育を円滑に接続することができた。 ○小学校の行事に参加することによって発表会に向けての取組や意欲につなげることができた。また中学生との交流によってSDGsの意識を高めることができた。 △園の公開保育は学園内の幼児教育の理解につながっているが、研修会等は学校のように全職員が参加することができず、限られた職員へのみの参加であるため、園内での職員へのしっかりと周知の必要性を感じた。	・小中学校との連携をもつことで、こども園でどのような力を身に付けなければならぬのかを明確にし、意識して取り組むことが必要である。 ・保幼小中一貫教育をなぜ取り組んでいるのか、取組みや成果などを保護者へわかりやすく伝えていく必要性を感じる。 ・園の公開保育をすることによって、10の姿を意識することができた。

教育課程	・楽しい園生活を繰り広げる。 ・異年齢とかかわる機会を大切に、人ととかかわる楽しさを体験させる。 ・園生活を通して子どもの主体性や協同性を育てる。 ・様々な人との出会いを大切に、人と関わりを楽しめる子どもの育成に努める。	・朝マラソン、体操など友達と一緒に体を使った遊びを取り入れることで、体を目覚めさせ、リズムある生活が習慣となるようにする。 ・異年齢の活動を通していろいろな友達と関わり、葛藤体験を通して思いやりの心やあこがれの気持ちを持てるようにする。 ・失敗しても大丈夫と安心感を与えるような保育者の態度や肯定的な言葉がけのもと自己発揮できるようにする。 ・結果だけでなくそこにたどり着くまでの過程を認める。 ・集団でなければできないこと、大勢ですると楽しいことに気付かせ、他人に関心をもたせる。 ・身近な地域の環境に関わり、活動を展開する充実感を味わいながら楽しい経験を積み重ね、地域の良さを気づくようにする。	○朝マラソンや巧技台、鉄棒などを組み合わせたサーキットに継続して取り組むことで、友達と一緒に多様な動きを身に付けることができた。 ○異年齢の行動を真似てやってみたり、一緒に遊んだりする中で、我慢や悔しい気持ち、友達の役に立つ喜びなどの体験を重ね、活動を発展させることができるようになってきた。 ○様々な活動をする中で、自分の思いや考えを伝えようとする園児の姿がたくさん見られるようになった。職員が仲立ちをすることにより少しずつ互いを受け止め、認め合う姿も見られるようになってきた。 △近隣の果樹園などに度々熊が出没し、山遊びを通しての遊びを体験したり、散歩に出かけたりすることがなかなかできなかった。地域の良さが感じとれるように年間を通して園外保育等を計画し、地域に触れる機会を増やしていきたい。	・生活リズムを整えて、継続して体づくりをすることの必要性を感じる。 ・異年齢児と一緒に生活することにより、友達関係を広げ、思いやり、譲り合いの心を育てることができるので、持続して交流する機会を増やして欲しい。 ・地域の人にも協力してもらい交流する中で、つながる力を育てたり、地域の良さを見たり触れたりする機会を増やし、久美浜の良さを知って欲しい。
子育て支援	・保護者の気持ちに寄り添い、安心して子育てができるように支援すると共に保護者が子どもの成長に気付き子育ての喜びを感じられるようにする。 ・未就園児親子の子育ての安定を図る。	・登降園時に職員が玄関で迎え入れたり、見送ったりすることで、保護者がいつでも気軽に話や相談できるような雰囲気をつくるようにする。 ・園庭開放日や園開放日を通して、保護者同士が交流したり子どもの成長を見たりする場をつくり子育ての楽しさを共有できるようにする。 ・園児の様子をドキュメンテーションや動画配信等を活用した情報発信を工夫し、遊びが学びそのものである。ということを保護者に伝え共通理解を図り、信頼される園づくりに努める。	○登降園時、各クラスの職員と共に迎え入れたり送りだしたりし、何気ない話や相談に耳を傾け保護者との対話に心掛けることで信頼関係を築くことができた。 ○園庭開放日を設けることで園内のいろいろな年齢の親子が交流する場となった。また園開放日は、未就園児の親子が同年齢の子どもと遊んだり、子育ての不安が解消されたりする場となった。 ○各クラスの活動の様子を配信することで園での子ども達の様子を伝え、保護者と園の教育方針やねらい等を共有することができた。	・園庭開放や園開放をすることによって、園の保護者同士や未就園児の保護者と交流してつながりを深めることを続けて欲しい。 ・ドキュメンテーションはその日あったことをリアルタイムで保護者に知ってもらえて良いと思う。
特色ある園づくり	・地域の人や身近な自然環境を活用した教育、保育を取り入れ、目指す。 ・自然体験やSDGsについて考え、日々の生活の中でも意識付けていく。	・地域の人との協力のもと泥田んぼ遊びや山遊びを通して、新たな疑問や発見から好奇心や探究心が芽生え、主体的に取り組むことから得られる達成感を味わうことができるようにする。 ・牛乳パックや空き缶の回収、ペットボトルキャップの収集また、微生物による堆肥づくりなどの取組からものや食べ物を大切にする態度を習慣化していく。	△泥田んぼや山遊びを始動しようとする熊騒動に遭遇し、自然環境を活用した教育保育を十分に行うことはできなかった。子どもの安全を第一に考えながら好奇心や探究心が育まれる環境を探していきたい。 △回収物の収集は保護者にも浸透していて常習化しているが、微生物による堆肥づくりは子どもたちに浸透することができなかった。目に見えない微生物の存在を子ども達にわかりやすく伝えたり、堆肥を土に混ぜたらどうなるかななどの興味付けをしたりなど工夫が必要であった。	・自然に触れて遊ぶことはとても良いことなので山遊びを再開し、園児と共に環境を整えて欲しいと思う。 ・年間通して、回収を継続しながらSDGsに興味をもったり意識したりする機会をもって欲しい。
次年度に向けた改善の方向性	・久美浜学園での保幼小中のつながりの中で、幼児教育で身につけたことが学習の基礎や姿勢のもととなることを伝えるために公開保育を行い、研修を重ねる。 ・保育の環境や援助の仕方について、各年齢のねらっていることを共通理解できるように職員間での話し合いを重ねる。 ・自分の興味や関心のあることに取り組んだり、友達とコミュニケーションをとったりしながら、探究的な学び（実体験）ができるような保育を工夫していく。 ・地域の方との交流で、自然に触れたり地域の良さに気づいたり、豊かな心と健康な体を育んだりしていきたい。			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立峰山小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
多様な人々と協働し、個性や能力を発揮して主体的・自律的に生きる力を育てる。 1 自ら学び、学んだことを伝え合う子どもを育てる。 2 生き方・在り方を深く考え、自律して行動する子どもを育てる。 3 よりよい社会をつくろうと力を合わせる子どもを育てる。		○ICT機器の活用により、児童の興味・関心が高まり主体的に学ぼうとする意欲の向上につながった。 ○児童自らが考え仲間と共に課題解決する取組を進めたことにより多様性への理解を深めたり、コミュニケーション力を高めたりすることができた。 △いじめの未然防止に向け、人権学習を基盤とした心の教育を専門家の活用も図りながら組織的に進める必要がある。		全ての児童がつながりながら、将来の社会的な自立を目指して力を伸ばし合う学校づくりを行う。 そのため、「学び合う」「高め合う」「認め合う」をキーワードとし、具体的目標①考えをもつ②考えを伝える③自分の力で挑戦する④仲間と問題を解決する⑤相手の立場で想像する⑥違いを認める の6点を重点とし、学校経営を進める。 それらに取り組む重点的な場を「①学習指導 ②児童活動 ③児童支援」とし、全ての教職員が分掌して目標の達成に迫る。					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	○学び合いによる主体的な学びや探究的な学びを進め、生きて働く知識・技能、思考力、自律的に判断し行動する力、他者と協働する力など確かな学力を育てる。		①教科の見方・考え方を働かせる授業づくりを行い、思考力・判断力・表現力を高める。 ②タブレット端末等のICT機器を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に進める。 ③総合的な学習の時間を中心として探究的な学びを進め、仲間との学び合いを通して課題発見、解決できる力を身に付ける。 ④峰山学園が目指す「探究し続ける子ども」の実現に向け、小中が連携し授業改善を行うと共に、家庭学習の目指す姿を追求する。		○「つながりの中で学び合う力が豊かに育つ授業づくり」を研究主題として研究を積み上げることができた。より良い学び方として重点に掲げた6つの力を意識したり、教科の見方・考え方を働かせたりする授業づくりを進めたことにより、京都府学力・学習状況調査（国語、算数）の結果が昨年度に比べ向上した。 ○タブレットを学びの道具として児童が主体的に使えるようになったり、他者参照をすることで自分の考えを深めたりできるようになってきている。更に効果的な活用について研究を進める。 △総合的な学習の時間には課題設定からまとめまでの一連の流れによる学びは実現しているが、連続性のある探究的な学びについては今後研究を進める。 △約3割の児童は自ら計画を立て主体的に家庭学習に取り組めていない状況にある。【児童アンケートより】峰山学園が目指す児童自らが学習の主体者となり自己調整しながら学んでいける力をつけられるよう指導や支援を行う。		・丹後の子どもと都会の子ども達との学力差が開いているように感じる。粘り強く継続する力を付けてほしい。 ・海外の学校とカリキュラムの違いがあり海外は探究心がすごいと思う。指導者の変化が求められると思う。 ・峰山学園として思考力、判断力、表現力を伸ばしていけるとよい。	
	生徒指導	○相互に認め合い、高め合う活動を通して、自己肯定感と共感的な人間関係を醸成する。 ○組織的な児童支援を行い、不登校、いじめを未然防止する。		①児童自らが考え、話し合い、判断し、問題を解決する自主的・自律的で自治的な活動に取り組む。 ②不登校・学校不適応の未然防止、解消に向け、個々の児童のアセスメントを丁寧に行い、学習指導・教育相談・特別支援等の多面から個に応じた適切な支援を行う。 ③スクールカウンセラー、児童養護施設、医療、福祉等との情報連携・行動連携を丁寧に行う。 ④峰山学園内での校種間連携を強化し、早い段階からの移行支援に取り組み円滑な接続を目指す。		○児童自らが主体者となる行事や取組を設定し、重点に掲げた3つのキーワードを大切に指導や支援を行った。互いの違いを認め合い、折り合いを付け協働しながら取り組む中で、自己肯定感や他者を理解する力を伸ばすことができた。 △しかし、自分の思いや考えを安心して表現できないと答える児童が3割程度あり心理的安全性の高い集団づくりを進めていく必要がある。 【児童アンケートより】「自分に良いところがある」…84% 「みんなと一緒に何かをするのは楽しい」…94% 「学校で安心して自分の思いや考えが表現できている」…72% ○外部機関との連携や専門家の活用、校内での組織的な児童支援により、不登校や登校渋りが改善されてきているケースがある。 （学期に10日以上欠席の状況 1学期：4名 2学期：3名） △今なお厳しい状況にあるケースもあり、不適応・不登校（傾向）の解消に向けて、専門家等と連携しながら取組を強化する。		・取組を進める上で他校とのギャップや中学校入学後のギャップによって子ども達が困らないようにしてほしい。 ・絶対にいじめを許さないということを教員が発信することがとても大切だと感じる。 ・発達段階に応じた声掛けの難しさを感じる。	

健康（体育）・安全	○心身ともに健康な生活に自ら取り組む意欲と態度を育て、望ましい生活習慣を確立させる。 ○交通事故防止を徹底し、児童の安全を守る。	①望ましい生活態度や健康づくりに向けて、児童が自分の生活を振り返り、考えることができるよう生活習慣に関する指導を計画的に行う。 ②メディアコントロールできる力を育てるようPTAや峰山学園と連携し、児童・保護者の学習・研修・啓発を進める。 ③登下校の安全確保と事故防止に関して、地域の安全ボランティア組織と連携した取組を進める。	○非行防止教室や食に関する学習等の外部講師による指導や長期休業明けの「生活リズム確立の取組」等を通して児童が自らを振り返り元気で健康に過ごすためにどうすればよいかを考えることができ、実践しようとする姿が見られた。 △4、5年生が峰山学園「SNS講習会」に参加しゲームやネットの使用について考え自分自身を振り返る機会となったが、行動実践に結びつかない児童が少なくない現状である。 ○PTAや安全ボランティア等と連携し登下校の見守りを行い、事故やけがもなく安全に登下校することができた。峰山町内に熊が出没した際には、PTAで即時、熊よけ鈴を購入してもらい児童の安全確保につながった。	・遊びがゲーム中心になっている。自律できるようになってほしい。
特別支援教育	○将来の社会参加に向けた自立を支援するという視点を大切に、一人一人の教育的ニーズを整理し、すべての児童が自分らしさを伸ばし合える環境をつくる。	①「多様性を尊重する」という方針の下、全ての児童が取り組み、力を伸ばし合える学習指導や特別活動を追求する。 ②校内に学習ルーム等を設置し、必要な児童への個別の支援が行えるようにする。 ③特別支援学級では、個々の児童に応じた支援計画と教育課程をつくり、地域と連携した生活単元学習を中心に得意を伸ばす指導をする。 ④保護者と定期的な懇談を行い、合意形成を図りながら、一人一人に応じた合理的配慮を行う。	○特別活動においては、常に児童全員が主体的に参加できることを目標とし、児童が「やってみたい」と思える課題を設定した。児童は互いの違いを認め合ったり、相手の思いを想像したりと試行錯誤しながら取り組んだことで、不登校傾向の児童も含め全員が参加（スポーツフェスティバルや秋祭りという学校行事）し達成感や充実感を味わうことができた。 【児童アンケートより】「人が困っているときは進んで助ける」…92% 「失敗してもあきらめず挑戦している」…82% 「物事を最後までやり遂げようとしている」…80% ○複数対応を基本として保護者との懇談を行い、課題の共有、ニーズの把握等を行い一人一人の課題に応じた対応を進めることができ、登校や学習機会の保障につながった。 ○配慮を要する児童に対しては丁寧なアセスメントのもと、個別の指導計画や教育支援計画の作成・見直しを行い、個々の児童の実態に合わせた指導や支援に活かすことができた。特別支援学級における生活単元学習では教科学習と関連付けながら学びを進める事ができ、学習に向かう意欲が向上し基礎基本の習得につながってきている。 △愛着形成に課題のある児童や、貧困等の厳しい状況にある家庭へのケア・支援をさらに工夫する必要がある。	・多様性の時代になっているが、それ許容できるキャンパシティを子ども達にもってほしい。 ・特別支援学級の子ども達も含め、子ども達が互いの違いを認め合っており、関係性がいいと感じる。 ・愛着や貧困の課題等も大きいと思う。
開かれた学校づくり	○保護者や地域と連携・協働し、児童の将来の社会的自立に向けた教育活動の工夫改善を行う。	①地域性を生かし、地域の人材を活用した学習活動を創意工夫して実施する。 ②保護者や地域に対して、本校の方針や教育活動についてホームページ等を通して発信する。 ③学校評議員、学校関係者評価委員、峰山学園学校運営協議会の意見・評価から学校経営等を改善する。	○峰山町内の企業や峰山高校、学習支援ボランティア等、外部の方の支援を受けて教育活動を進めることができた。地域の方々から直接受ける指導や支援は児童にとってとても新鮮で魅力のあるものとなり、学習意欲の向上だけでなく、将来の夢や郷土愛の育成にもつながった。 【児童アンケートより】「今、住んでいる地域が好きですか」…96% 「今、住んでいる地域の行事に参加していますか」…84% ○本校の方針や教育活動を随時ホームページで発信し、保護者や地域の方に興味をもっていただけた。（ホームページ閲覧数：月平均2900件）また、行事や各種委員会で、本校の教育活動や取組の意義について説明を行うことで、本校の教育方針を理解していただくことができ、肯定的な評価をいただくことができた。	・小学校の間から社会の人と繋がり様々な体験をすることで身に付けられることがたくさんあると思う。
次年度に向けた改善の方向性	(1)認知能力と非認知能力を一体的に育む指導を充実させ、主体的・協働的に学びに向かう力を高め、学力格差を改善する。 (2)児童の主体的・自主的・自律的な活動をより一層進める中で、心理的安全性を高め、自ら考え判断し、協働して問題を解決する力や自治の力を高める。 (3)一人一人の児童のニーズに応じた適切で効果的・継続的・計画的な指導・支援を全ての教職員が行えるようにするため、年間を通して実践的な研修を積み上げる。 (4)全ての児童に学校での学びを保障する観点から、児童個々の特性・特質・差異・選択を尊重し、不登校、いじめ、家庭の貧困や教育力の課題などに対し関係機関と連携したチーム支援を一層強化する。			・この方向性で次年度更に教育活動が充実するよう進めてほしい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立いさなご小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)					
教育目標「ふるさとを愛し 多様な人とつながりながら学び探究し続け子どもの育成」 目指す子ども像 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども		コミュニケーション能力の育成を重点としてすべての教育活動に位置づけ3年間取り組んできた。「お互いを認め合う」学級づくりを進めることにより、自分の得意なことでも力を発揮でき、自分の居場所を感じることができた。学習の場面では、ペアやグループを活用して、人とのやり取りができるが、日常生活の場面では、うまく関われない状況があるので、今年度は「人との関わり」を重点に安心できる学級・学校づくりを進める。		目指す子ども像を具現化する重点 1 自ら考え判断し、行動・表現する力を向上させる。 2 自らの時間と力を周りの人のためにも使い、他者に貢献する意欲と態度を育てる。 3 自らの目標を設定し、自分で調整しながら根気強く力を育てる。 4 保護者、地域から信頼される学校づくりを推進する。					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題(自己評価)		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 目標を明確にしたうえで、児童に理解させるために有効な指導方法を工夫する。 2 探究的な学びのある授業に挑戦しようと思えるような研修を行い授業デザインのイメージを持つ。		1 ペアやグループで人と関わりながら学ぶことを継続し、主体的に自分が授業に参加できる授業を研究していく。学力充実、生徒指導、特別活動、特別支援教育の視点で研究授業を行い、教員が学び合う。 2 探究的な学びが構成しやすい教科や単元での授業デザインの見通しを持つ。学習の振り返りを行い、なぜだろうと思ったことを個々に整理し、次の授業に結びつける。学級の実践を全体のものとするために発信する方法を工夫する。 3 意見の交流や調べたことのまとめ下書きなど、ICTを活用する。アプリを活用したドリル学習を取り入れながら、基礎の定着につなげる。		○「人と関わる力の育成」を重点とし、ペアやグループで交流しながら自分の学びを深めていく授業を展開し、児童が友達と交流しながら学ぶ良さを感じられた。 △学び合いながら、その時間に習得する内容を定着させきることに弱さがあった。 ○自分で課題(問い)を見つけて、追究していく授業づくりを進め、自分で考えたいという意欲が持てた。 ○生徒指導・特別活動等の視点で6回の研究授業を行い、教員の授業研究の機会となった。		・授業では、一緒に学習して、友達から吸収しようとしていた。将来的に自由に考えられるようにすることが大事である。 ・自分で課題を見つけて追究し、探っていく家庭学習が必要である。	
	生徒指導	1 いじめ防止・不登校未然防止となる取組を進める。 2 自己存在感・共感的な人間関係・自己決定の場を取り入れ、安心・安全な居場所とし、互いを認め合う集団をつくる。		1 道徳や特別活動等を通して、自分の思いを伝えたり、友達の意見を受け入れたりして、望ましい人間関係をつくり、いじめを生まない雰囲気を醸成する。 2 不登校を未然防止するためにも、居心地の良い学級・学校をめざし、児童同士の関係づくりや、児童と担任の信頼関係を築く。 3 互いの個性や価値観の違いを認め、自分の得意なことを実感させ、違いがあるから友達と関わる意義があることを指導する。「今の自分」に自信を持ち、さらに良さを伸ばす意欲が持てるように指導する。 4 学級活動や異年齢集団での活動における、行動価値として、他者貢献の視点を常に伝え積み重ねていく。		○「居場所がある」と思える学校・学級づくりに努め何でも話せる雰囲気を醸成し、困ったことを伝えれば担任・友達に伝えて解決できる体験を重ねた。 ○自分の良さを友達に見つけてもらったり、自分の得意な力を発揮したりして、友達とは違う「自分」に自信が持てるようになった。 ○不登校児童が教室に戻れるように組織として関わり、3学期から教室で学習できている。学級での自然な関わりが安心できる環境であった。 △相手のことを考えない言動は減らない。その都度、自分の行動を振り返り指導を続けている。		・挨拶は一番初めのコミュニケーションであるので、自分からしてくれるのはうれしい。 ・6年生が一生懸命頑張る姿を下級生が見て、自分達も下の学年と関わる活動があるのが良い。 ・自分は人の役に立っていると考えるようにしてほしい。 ・自分の得意がわかると、自分に自信を持てるのではないかな。	

健康（体育）・安全	1 積極的な児童への指導、保護者への啓発により、自分自身の心身に関心を持たせる。 2 自分で目標を設定し、困難なことに粘り強く挑戦しようという意欲を高める。	1 健康安全部が中心となり、各学期1回の保健指導や「ほけんだより」の発行により、睡眠やメディアコントロール等、自分でコントロールできる力を伸ばす。 2 学習・取組において、個々の目指す目標を設定する力を身につけ、目標に向かって取り組み、振り返ることを繰り返しながら、小さな成長があることを実感させ意欲を高める。	○「ほけんだより」や心・体・いのちの学習、食に関する指導を行い、生活習慣等自分で気を付けて生活しようとする児童が増えた。 ○自分で目標を設定して取り組み、過程を振り返ることにより、目標達成に届かなくても成長できたと感じる児童が増え、意欲が持続した。 △結果がすべてではないとわかっているが、できなくてあきらめてしまうことも多い。できなくても挑戦してみようという学級の雰囲気をつくっていく。	・「目標を達成しなくても成長している」と評価しているのが良い。あきらめずに挑戦する姿勢を育ててほしい。 ・メディアコントロールについては、自分でコントロールできるようにメディアリテラシーの指導も必要である。
特別支援教育	1 特別支援教育についての理解を深める。(児童・教職員) 2 支援を要する児童を中心に、すべての児童に対して合理的な配慮を心がけ、適切な支援を行う。	1 特別支援学級や通級指導教室について、児童の実態や指導方法についての研修を行い、教職員のアセスメント力を伸ばしながら、通常学級に在籍する児童への支援についての力量を高める。 2 スクールカウンセラーやまなび生活アドバイザー、与謝の海地域支援センターと連携し、児童への適切な支援を探る。個に応じた支援については、保護者と方向性を確認しながら進める。	○肢体不自由学級が新設されたのをきっかけに、理解教育の中に車椅子のことも加え「みんなが過ごしやすい学校」を考えた。 ○スクールカウンセラー、まなび生活アドバイザーと連携し、助言を受けながら適切な支援方法を探った。児童の見立てを教えてもらう中で、アセスメントの力を伸ばす機会となった。 △適切な支援について研修を進める。	・「ちがいがあって当たり前」ととらえて、多様性を認めて、それぞれが力を発揮できるようにすることが大事である。
開かれた学校づくり	1 学校や児童の様子を積極的に発信し、教育活動の向上と信頼される学校づくりにつなげる。	1 学校だよりや学級通信、ホームページを活用して学校や児童の様子等を発信して理解を得る。そのために、取組の目的や方法をわかりやすく伝える工夫をする。 2 校区探検や地域にある施設や事業所等の見学を行い、校区・峰山町のことについて学ぶとともに、地域人材や学校支援ボランティアを活用して地域の方とのつながりを広げる。	△学校便りやホームページで学校の様子を発信したが、取り組みの目的の伝え方について工夫し、発信方法を改善したい。 ○地域にある施設見学させてもらい、普段気づかなかったことを学習することができた。 ○学校支援ボランティア・いさなごっ子見守り隊の方々へ協力いただき、児童は安心して学校生活を送れた。	・地域の人は、学校便りが回覧で回ってくるのをとても楽しみにしておられる。写真等で学校の様子を伝えてほしい。 ・校区にある施設や会社の見学をして、何をしているところなのか理解することが良い。
次年度に向けた改善の方向性	・変化し続ける社会に対応できる力を育成するための学習指導、生徒指導について研究し、保護者・地域に発信する。 ・自分で考え、児童が主体となる授業や特別活動を連動させ、安心して過ごせる学級集団作りを進める。 ・人との違いを認め合ったうえで、人と関わりながら力をつけていく ・スクールカウンセラーなどの外部機関と連携し、方向性を明らかにしたうえで、個別に適切な支援を行う。			・児童が自分で考えるヒントを学校・保護者がどのように与えるかが大事である。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立しんざん小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
【峰山学園 教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【峰山学園 めざす生徒像】 1 主体的に学び続ける子ども 2 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども 3 粘り強く挑戦し続ける子ども		○ 目指す子どもの姿4点を設定し、全ての教育活動において目標を共通理解した取組を進めた。毎学期児童アンケートを実施し、3学期は4点とも概ね90%の児童が肯定的な回答をしていた。 △ 個別の児童課題、指導による課題等により、授業や学級経営に困難さをきたした学級が複数あった。		子どもの将来や社会的自立に向けて、 ◆ 「考えて行動する」力を伸ばす 望ましい判断・行動、思考・熟考、選択、探究 ◆ 「自分なりに表現する」力を伸ばす 多様な表現、アウトプット、自己肯定感、夢・目標 ◆ 「言葉を大事にする」力を伸ばす 話す・聞く・書く・読む、命・人権、名前を正しく呼ぶ	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、保護幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	○「探究的な学び」の授業づくりについて、研究推進部を中心として、積極的・意欲的に取り組めるよう、理論的・実践的に学び合っていく。 ○児童実態・課題をベースにして、個に応じた指導・支援を実践する。全国学力調査、府学力調査学びのパスポートの結果を分析し指導に生かす。		○タブレット端末とクラウドを活用して、国語科を中心に授業での他者参照や途中共有をしながら進める探究的な学びの授業づくりについて、校内外の研修をとおして理論的・実践的に授業づくりをすすめた。 ○京都府学びのパスポートの結果分析を全教員で共有し、個に応じた指導・支援の充実につなげた。保護者アンケートの「前向きに授業や行事に取り組んでいる」項目では、82%が肯定的な回答であった。 ●発達や愛着等に課題のある児童がどの学級にもおり、対応に追われたり学力をつけきれなかったりする課題がある。	・以前の授業や教育に比べて、授業や行事の様子から、子どもの自主性を育む教育活動をされていることが伺える。 ・いろいろな行事の様子からは、児童自身が考えて、進んで学んだり行事を進めたりする様子が見られた。
	生徒指導	○児童実態・課題、指導課題等の教職員間の共有を重視し、いじめやトラブルの未然防止と早期発見・解決に努める。 ○多様な表現方法を互いに認め合い、自己肯定感や自己有用感、夢や目標をもって生活することにつなげる。		●個別の課題や事象への対応が後追いになってしまい、授業や学級経営が成り立ちにくくなる学級があった。 ●児童同士の心無い言葉やからかいの延長、規範意識の低さから、いじめ事象も発生した。保護者アンケートの、「子ども達は言葉を大事にしている」項目では、52%が肯定的な回答であり、全項目で最も低い結果であった。 ○問題事象やいじめ対応については、いじめ防止基本方針や校内体制により基本的原則的に対応した。 ○児童アンケート等を活用し、児童が夢や見通しをもって生活を送ることにつなげた。	・保護者アンケートの「言葉を大事にする」の結果が低い、言葉は家庭環境や保護者によるところも大きいのではないか。 ・年度当初から児童の落ち着かない状況もあったが、3学期は徐々に落ち着いてきている様子が見られた。 ・今後も保護者との連携を丁寧にしてもらいたい。

健康（体育）・安全	1 年間を通じた体力向上の取組を進め、児童の体力・耐力を育成する。 2 生徒指導と連携し、ネット・SNS との望ましい関わり方を指導する。	○児童の実態や課題に応じて、多様な体力づくりに取り組み、運動の楽しさに触れさせ、意欲や自己肯定感を高める。 ○学園や学校の実態アンケートをもとに、日々の指導を充実させる。問題事象と指導について情報共有を徹底する。	○マラソン大会や運動会で、児童自身が主体的に選択したり、意欲を高めたりする種目設定を工夫した。 ○市の補助金を活用し外部講師によるランニング教室を開催した。市駅伝大会の入賞等の結果にもつながった。 ●ネットやゲームに依存する児童は年々増加しており、今後も注視して粘り強く取り組む必要である。	・種目や距離を選択したりする方法は賛否両論があると思うが、丁寧な説明や理解が必要である。 ・SNS に係る講演会は11月ではなく、年度の早いうち設定して保護者に啓発できないか。
(A) 人権教育	1 子どもの命・人権を大事にすることを基盤に、年間を通して人権教育を進める。	○互いの名前を正しく呼び合い、年間を通じて命や人権を大事にした教育活動を進める。 ○教職員の研修や時事の人権課題等の情報共有を充実させ、人権意識の高揚、いじめやハラスメント防止に努める。	●ルールやマナーを守ることについては課題が大きく、様々な問題事象につながっている。 ○年間をととして研修の機会を設け、人権教育、体罰やハラスメントの防止等について学び、未然防止につなげた。 ○保護者アンケートの「子ども達は仲が良く良い友達関係を築いている」項目では、83%が肯定的な回答となっており、一定学校の取組を理解していただいている。	・あいさつをしない子ども、さらに大人も多くなっているのではないか。地域でもっと声かけを広げていきたい。 ・よく考えて判断したり行動したりする力が今後大事ではないか。
(B) 特別支援教育	1 支援を必要とする児童への支援体制を整え、保護者や関係機関と連携して支援する。	○保護者や関係機関と連携し、児童の課題に応じた支援と就学指導に見通しをもって計画的に推進する。	○保護者や関係機関と連携して就学相談を進め、新たに入級や次年度の通級につながった児童が複数いる。	・どの子どもも伸び伸びと過ごしている様子が見られてよい。
次年度に向けた改善の方向性	□ 児童自身が主体的に「考えて行動する」力を伸ばすことを、引き続き、目標や教育活動の中心に据え、繰り返し、児童に「考えて行動する」ことを促していきたい。毎時間の授業や年間をととした行事・取組の中で、児童自身が考えたり探究したり、葛藤したり、話し合ったりする場面を意図的・継続的に設定し、望ましい判断や行動ができる力を身につけたり、思考力・判断力を伸ばしたりしていく。 □ 今年度の児童の状況、取組の成果課題を丁寧に次年度へ引継ぎ、年度当初より安定した授業や学級経営、学校運営ができるようにする。			・自主性・自発性を大事にする一方で、ルールやマナーを守ることにも大事にしてほしい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立長岡小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
「峰山学園」の経営方針を踏まえ、教育活動全体を通して学園教育目標 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」に迫る。 〈峰山学園 めざす子ども像〉 ・主体的に学び続ける子ども ・人を思いやり仲間と共に高め合える子ども ・粘り強く挑戦し続ける子ども		○学校教育目標の理念が教職員、児童ともに浸透した。 ○気になる児童や事象について組織的に早期対応を行う中、不登校傾向児童はいない。また、大きな生徒指導事象もない。 △各教科の「見方・考え方」を踏まえ「主体的・対話的で深い学び」の実現や探究的な学習についての研究を推進する。 △PTA や保護者と連携して SNS の利用の仕方や就寝時刻について考え、よりより生活習慣の確立を目指す。 △特別支援教育について、外部と連携して個々のニーズに応じた指導や支援の方法を学び指導に生かすとともに、保護者や児童の気持ちに寄り添った就学相談を進めていく。		学校教育目標「ちがいを認め合い、笑顔あふれる学校」 人権尊重を基盤とし、あらゆる教育活動を通して、一人ひとりを大切に教育を推進する。 1 人を思いやる豊かな人間性の育成、安心できる居場所づくり(心理的安全性) 2 一人ひとりを大切に個性や能力を最大限に伸ばす指導(発達支持的生徒指導) 3 確かな学力・コミュニケーション能力の育成(個別最適な学び・協働的な学び・探究的な学び・深い学びの推進) 4 たくましく健やかな心身の育成 5 ふるさとを愛し、安心・安全で信頼される学校づくり(環境整備、保護者・地域連携)	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校 諸計画 教育指導 及び各 学園の 重点中 小一貫 教育の 基盤と して	教育課程 学習指導	1 各教科の「見方・考え方」を働かせながら、「深い学び」「探究的な学び」の実現に向けた授業づくりを追究する。 2 振り返りを重視し、自己調整力を育成する。 3 目標と指導と評価の一体化を図る。 4 ICTのより効果的な活用を推進する。	1 学園の秋季研修会の公開授業に向けて、研究推進部が中心になり、理論研修や研究授業を計画的に実施し、教員の意識の向上を図る。 2 自分を見つめ直す場を設定し、成長や効果的な学習方法等に気付かせる。 3 児童実態に応じた目標を設定し、ゴールを明確にした授業づくりを行う。 4 授業と家庭学習を連動させたICTの活用について、交流しながら追求する。	○△学園の秋季研修会で全学級を公開することで、個々が授業研究に励んだ。京都教育大学の教授を年間5回招聘し、「主体的・対話的で深い学び」や探究的な学習について学ぶことができた。全教員の授業力向上に向けて継続して研鑽していく必要がある。 ○振り返りの視点を共通確認し、場を設定することで自分の成長や課題などを見つめさせ自己調整力の育成に繋げていった。 ○△3年生以上でICTの活用が積極的にでき、授業と家庭学習の連動もできつつある。探究的な学習になるよう模索していきたい。	・どの学級もわきあいあいとして楽しそうに学習している。 ・タイピングがとても速くて驚いたが、スキルに差はないだろうか。思考力は付くのだろうか。 ・タブレットに頼りすぎているだろうか。人として、自分の手で書く力や自分の言葉で伝える力が必要であると思う。
	生徒指導	1 人を思いやる豊かな人間性を醸成する。 2 発達支持的生徒指導を全教育活動で推進し、不登校傾向やいじめ事象等の未然防止、早期発見、早期解消に努める。	1 教え合い助け合う児童同士のつながりを通して、誰もが安心して生活でき居場所のある学級、学校づくりを進める。 2 児童が主体となる活動を仕組むと共に、一人ひとりを大切に、全教職員で全校児童を育てることを意識化する。また、生徒指導部、教育相談部、いじめ防止委員会の機能化を図る。	○学校教育目標の理念を機会あるごとに伝え価値付けすることで、思いやりのある行動を多く見ることができた。 ○児童の希望に寄り添いながらできることを模索し、「誰もが楽しめるように」工夫しながら児童が主体となる行事や取組を行うことで、達成感を感じさせることができた。 ○気になる事象については情報を共有し組織的に早期対応を行った。いじめや大きな生徒指導事象はなく、不登校傾向児童もいない。	・みんな仲が良く楽しそうである。 ・不登校児童がいないことがとても素晴らしい。

健康（体育）・安全	1 体を動かすことを楽しみ、体力づくりやスポーツに親しむ態度を育成する。 2 家庭と連携して基本的な生活習慣を確立させる。 3 危機管理の充実や環境整備による安心・安全な学校づくりに努める。	1 体育や中間マラソン、縄跳び等、目標を明確にし、振り返りながら取り組む体力づくりを充実させる。 2 生活ががんばり週間を活用し、PTA 本部役員や保護者の協力を得て、SNS の使用時間や就寝時刻を考える等、健康的な生活習慣を確立させる。 3 年間 4 回の避難訓練を実施し、状況に応じた身の守り方を学ばせる。また、毎月安全点検を行い修繕に努めるとともに、家庭や地域と連携し、安心安全な登下校を目指す。	○各自が目標に向かって取り組んだことで、達成感を得ることができた。 △年間 3 回の生活ががんばり週間を設定したり、PTA 本部役員から啓発の便りを発行していただいたりしたが、ゲームの時間や就寝時刻は改善できなかった。 ○避難訓練を計画通りに実施し、状況に応じた避難の仕方を学ばせることができた。年間を通して、安全点検やニコニコカーでの保護者による登下校の見守り活動が実施できた。	・ SNS の使用時間や就寝時刻を守らせることは難しいが、改善していけるとよい。 ・ ボランティアや保護者が登下校を見守っている様子をよく見かける。ボランティアには、学校便りを個々に配付し、学校の予定を直接伝えてほしい。
人権教育	1 人権尊重を基盤とした学校経営を推進し、教職員の人権意識の高揚を図る。 2 違いを認め合い、多様性を受け入れ、誰とでも仲良くできる児童を育成する。 3 人権について考える機会を設定するとともに、保護者への理解を深める。	1 全教育活動を学校教育目標と連動させ、研修等を通して、教職員に人権尊重を意識させる。 2 違いを認め合い、教え合い助け合う学習や異年齢活動を通して、居心地のよい学校・学級づくりを進める。 3 人権旬間や人権月間で課題に応じたテーマを設け取り組む。また、学校・学級日より等や授業公開を通して保護者等に啓発・発信をする。	○学校教育目標を日常的に意識させるとともに校内研修等で自身を振り返る機会を設け、教職員の人権意識の高揚を図った。 ○児童会活動等で「誰もが楽しめること」を考えて取組を計画することが定着した。 △友達関係の中で気になる事象があり組織的に対応することで緩和されたが、継続して状況把握をしていく必要がある。 ○人権旬間や人権月間等を計画的に進めることができた。良い所見つけや外部講師による講話等により、人権尊重の気持ちや障害に対する理解を深めることができた。ホームページ等での発信や、授業公開も実施できた。	・ 誰もが楽しめるよう工夫していることがわかった。 ・ 子どもはいろいろある中で考え合って成長していくと思う。 ・ 学校評議員にも小学校に孫がいない地域の人にも学校の様子をもっと発信してほしい。また、学校行事等への参観をどんどん呼びかけてほしい。
特別支援教育	1 ちがいを理解して、認め合い、助け合える人間関係を築く。 2 特性に応じた指導・支援の方法を追求する。 3 保護者や関係機関と連携し、個々のニーズに応じた就学相談を進めていく。	1 学級開きや人権学習等を通して、様々な障害に対する理解教育を行う。 2 発達障害等、個別の支援が必要な児童への効果的な支援方法を他機関と連携して追求していく。 3 保護者との定期的な懇談を実施し、保護者の願いを反映させた個別的教育支援計画を作成する。また、外部と連携して個々のニーズに応じた指導や支援の方法を学び指導に生かすとともに、保護者や児童の気持ちに寄り添った就学相談を進めていく。	○学級開きや朝会等の講話で理解教育を行い、互いを認め合う雰囲気が醸成された。 ○局の研修会や丹後地域教育支援センターの巡回相談等により、支援を要する児童の効果的な指導や支援の方法を学んだ。 ○事前に打ち合わせをして懇談に臨むことで、保護者と良好な関係を保ちながら懇談を継続することができた。今後も、児童や保護者の気持ちに寄り添った就学相談を継続していく必要がある。	・ 令和 8 年度にいさなご小学校と適正配置されても、長岡小学校の子ども達が萎縮することがないように、来年度からフォローをしてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	1 各教科の「見方・考え方」を意識した「主体的・対話的で深い学び」の実現や探究的な学習になる授業を全教員ができるように引き続き研修を実施する。 2 PTA や保護者、児童会と連携して SNS の利用の仕方や就寝時刻について考え、よりよい生活習慣の確立を目指す。 3 特別支援教育について、個々のアセスメントを丁寧に行うとともに、外部との連携を図り個々のニーズに応じた指導や支援の方法を学び、保護者や児童の気持ちに寄り添った就学相談を継続して行う。			・ いさなご小学校との交流の機会を多く設定し、スムーズに適正配置が進むようにしてほしい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立大宮第一小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点 (短期経営目標)	
「学校教育目標」(長期目標) ◆自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成 「目指す学校像」 ◇一人一人が輝き、生き生き活動する学校 【児童】 ◇やりがいを持って自分の力を発揮する学校 【教職員】 ◇安心して子どもを任せられる学校 【保護者】 ◇他の地域に誇れる地域とともにある学校 【地域の方】		○ICTの活用がさらに進み、まとめたり表現したりする学習での活用ができてきている。 ○特別活動の異年齢活動等も活用し、協調性・自制心・やり抜く力などが身に付いてきている。また、日々の学級経営の中で多様性を認め、居場所のある学校づくりに向けて組織的に取り組んでおり、「安心して学習ができる」「学校が楽しい」「自分には良いところがある」の項目では多くの児童が肯定的評価をしている。 △今年度のDRTの結果では、特に国語において厳しい結果が見られた。学力差の課題を解決する視点からも、学習の見通しをもったり学習したことを振り返ったりする等、児童が主体的に学習に取り組む自己調整学習を積極的に取り入れる必要がある。 △日々の授業ともつなぎ個別最適な学びの実現を目指した家庭学習の取組を工夫する必要がある。		「一人ひとりが自分の良さを発揮し、将来の自立に向けてつながりながら力を高めることができる学校経営を行う」 ・子どもたちをつなぎ、「心理的安全性」のある学級を目指す。その学級経営の基礎の上に主体的に学習に取り組む。自己調整学習を積極的に進め、一人ひとりの学びを自己調整する力を最大限高める。 ・保護者との丁寧な連携を進め、将来の自立の観点で、児童へのかかわり方について信頼と理解を得ていく。 ・特別活動の研究によりつけてきた力を、さらに積み上げるとともに、思いやりやつながりのある人間関係の構築を図る。 教職員のキーワード 『互いを認め合い 多様な人とつながり 未来を創造する児童の育成』 ―自分が変わり 子どもを変える―	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題 (自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、 諸計画及び各学園の重点等 を基盤として	教育課程 学習指導	1 ICT を効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。 2 総合的な学習の時間では、「丹後学」の内容も含め、児童が主体的に課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の学習に取り組み、探究的な学習となるよう充実を図る。 3 教科の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりを進める。その際は、「大宮学園授業づくりの視点9」の活用を図る。		○新たな研究実践のスタイルで、教師が「主体的・対話的で深い学び」を目指した研修を推進した。具体的な研究テーマによってグループを設定し、グループ研究を基本として学び合い、中間発表・最終発表会において、全体への発信をしたことでさらに学びが高まった。学習や家庭学習によるICTの活用も、定着してきた。 ○外部講師を招聘し、一人ひとりが学びの主体となって学びを進める授業(自己調整力の育成等)を目指し、各学年が平均程度の結果となっている。 ○総合的な学習の時間では、児童が主体的に課題を設定し、解決に向けて家族や地域とのつながりを生かして取り組み、たくさんの発見や気づきを学ぶことができた。 ○特別活動の異年齢活動等も活用し、協調性・自制心・やり抜く力などが身に付いてきている。また、日々の学級経営の中で肯定的な評価を大切に心理的安全性のある学級作りが進んだ。 ○多様性を認め、居場所のある学校づくりに向けて、組織的に取り組み、「安心して学習ができる」の項目では約92%、「学習したことはよくわかる」の項目では約95%の児童が肯定的評価をしている。	○先生方には、丁寧に指導していただいている。 ○ペアや小集団で学び関わり合う活動は大切にしていきたい。 ○タブレットを使った学びは、これからの時代に必ず必要であるので、積極的に活用してほしい。 ○学校と地域がつながり、丹後のよさに子どもたちが気づけるような学びが実現できることを期待する。

生徒指導	1 丁寧なアセスメントと個に応じた支援による不登校の未然防止に努める。 2 いじめ等の未然防止のための積極的な生徒指導の充実に努める。	・全ての児童にとって居場所があると感じる魅力的な学校・学級づくりを進める。専門家の意見を踏まえた丁寧なアセスメントのもと、有効な支援方法を全教職員で共有し、一致した指導・支援を行う。 ・子どもの変化や小さなサインを逃すことのないよう、日々の観察をし、何でも話せる信頼関係を築き、いじめ等の未然防止に努める。アンケートの実施はもちろん、地域・保護者とも連携していじめを見逃さない体制の構築を図る。	○不登校傾向の児童への支援は、常に心理的な安心や居場所の確保に努め、教育相談部を中心に保護者との連携を大切にしてい取り組んだ。その結果、少しずつ前向きに成長する児童が増えた。 ○いじめ等の生徒指導事象についても、トラブル等の事象はあったが、被害児童に寄り添った確実な事実確認と保護者連携を進め、解決を図り、その後も丁寧な観察を継続している。 ○児童アンケートでは、「自分に良いところがある」と答えた児童が 88%以上であった。	○トラブルから学べるのも学校。成長のためには大切なことでもある。 ○つながりの中で、未来の自分に自信がもてるとよい。
健康（体育）・安全	1 全校的な体力にかかわる課題改善に向け、取組の充実と積極的な児童への指導、保護者への啓発により、心身ともに健康な体づくりに取り組む。	・体育の授業と運動し、期間を決め、集中的に朝マラソンや縄跳び等の取組を行ったり、計画的でタイムリーな児童への指導、保護者への啓発を進めたりすることで、体力（特に持久力）向上と休まず学校に来ようとする耐力（意欲）を高める。 ・休み時間の積極的な異年齢遊びを通して、安全に楽しく誰とでも遊べる経験を増やす。	○普段の体育の授業やマラソン大会の取組、縄跳びの取組等体力づくりを全校的に進めることができた。過程を大切に指導により、自分の決めた目標に向かい意欲を向上させることができた。 ○保護者との丁寧な連携を図り、子ども同士のつながりを大切に居場所を創ることでどの子も学校に来ようとする気持ちを持ち、登校できている。	○地域で外遊びをする子どもの姿を見なくなった。体力面をつけてほしい。
(A) 特色ある学校づくり	1 これまでの特別活動の研究実践の成果をさらに積み上げ、誰もができる将来の社会的自立を目指した教育活動の在り方について、実践を重ねる。	・学級活動や児童会活動等の授業や活動の考え方や指導の在り方について理論研究を進める。また、すべての教育活動の基盤として安心して学べる学級となる人間関係づくりを進める。 ・児童の姿を通して、特別活動の取組の成果を共有し、さらに、発達段階に応じた役割分担や自己決定の場を通して達成感や満足感を高める。	○学級活動の研究や実践から、児童が主体的に自他を尊重して話し合い活動を進めることができ、温かな人間関係づくりの文化が根付いてきている。 ○学級活動や児童会活動、学校行事、人権教育の取組などを通して、集団での学び合いや支え合いに取り組んだ。児童アンケートの「学校が楽しい」では、約 90%の児童が肯定的評価をしている。	○異年齢の中でのリーダーとしてとても頑張っている。しかし、もっと個性が前面に出ていてもよい。
(B) 情報活用能力 (ICT 活用)	1 電子黒板や一人 1 台のタブレットを活用した、授業改善を進める。 2 情報モラルについては、実際に使用しながら細やかに実態を把握し、課題についてはその都度よりよく使うためのルールを考えさせながら身につける。	・具体的にどのような教科や単元、場面等で活用しているか実践交流を行い、さらに使用範囲を広げながら効果的な活用を目指していく。 ・学園の取組の中でも、オンラインでの交流を行うなど、活用を図る。 ・「個別最適な学び」の実現を意識しながら、少しずつ家庭学習におけるタブレットの活用を進める。それと同時に、情報モラルにおける指導を低学年から発達段階に応じて行い、児童が適切に ICT を活用して情報社会を安心・安全に生き抜くための能力や態度を育成する。	○全学年で、どのようなことに ICT が活用できるのかを実践研究することができ、教職員と児童の活用スキルがさらに高まった。 ○学園での情報モラル研修会を行い、児童生徒だけでなく、保護者や教職員も最新のトラブル等について知り、正しく使う視点での指導に活かすことができた。 ○タブレットの持ち帰りを進め、教科書やドリルだけに頼らない家庭学習の内容に取り組み、「個別最適な学び」への意識がさらに進み、何を学ぶことが必要かを考える機会となった。	○タブレットの活用がさらに進むとよい。今後もネット社会で生きていく子どもには、危険性も知っておいてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	※ 児童が主体的に課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現の学習に取り組み、探究的な学習の充実に努める。 ※ 一人一人の可能性を最大限引き出す教育を進めるため、学習の見通しをもったり学習したことを振り返ったりする等、児童が主体的に学習に取り組む（学びの自己調整）力を高める指導を進める。さらに、タブレットを活用して、日々の学習ともつなぎ個別最適な学びの実現を目指した家庭学習の取組を工夫する。 ※ 全ての子どもにとって心理的安全性のある学級、学校の実現を目指し、居場所のある環境で力を発揮できるように取り組む。 ※ 今後も保護者地域との連携を図り、地域を知り、地域の良さを生かした探求的な学びを進め、子どもに力をつけていく。			○保護者もわからないことがある。一緒に学べるとよい。 ○学校だよりや HP を楽しみにしている。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立大宮南小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)					
「自他を尊重し、自ら学ぶ 子どもの育成」 ・意欲的に学び、チャレンジする子ども(知) ・自他を大切にし、思いやりのある子ども(徳) ・心身を鍛え、活動的な子ども(体) 全ての教育活動で「ことばの力」「思いやる心」「つながる力」の育成を目指す。		○肯定的な評価を基盤とした教育活動を実践したことで、児童にとって学級や学校が安全・安心な居場所となっている。 ○行事等において児童の発想や挑戦を大切に指導したことで、児童同士の繋がりが深まり所属感や一体感が高まった。 △特別支援教育を中心に多様な課題への支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を強化する。		「夢いっぱい 笑顔いっぱい 一人一人が輝く楽しい学校 ～生きる力を培い、未来を創造できる児童の育成をめざして～」 ・少人数のよさを生かし、確かな学力をつける教育の実践 ・信頼される学校づくりの推進 ・郷土を愛し、郷土で学ぶ教育の実践					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題(自己評価)		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	・教科における探究的な学びについて研究を深める。 ・個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」となる授業を展開する。 ・自校の学力課題を整理し、改善に向けた取組の推進とその検証に努める。		○算数科を重点研究とし児童の意欲や主体性、見通しを引き出す指導、探究的な学びに繋がる手法について研究を進める。 ○「やってみたい」「できた」「わかった」を大切に実践し、学習意欲の向上を図る。 ○一人一人の学習内容の定着を把握するとともに、自らの指導を振り返り、改善に生かせるような評価の工夫を図る。 ○各種調査を基に「主体的・対話的で深い学び」「探究的な学び」の視点から整理分析し、改善に向けた取組を推進する。		○授業改善や授業観の転換を図るため、市や局から講師を招聘したり、市の学力対策会議に参加したりしながら教員の学びを深めることができた。特に学園の取組(3Cプロジェクト)を基に、自己調整学習や児童主体となる授業についての共通認識を図り授業実践を積み重ね、授業力を高めることができた △各種テスト・質問紙等から個の学力課題を整理し、より個別最適な学びや協働的な学びにつなげ授業改善を図る。		・時代とともに指導の仕方にも変わってきている。 ・人数が少ないので、人ひとりへの先生たちの丁寧な指導ができています。 ・児童主体の授業の中でも「確かな理解や定着」は必要であり学力を身に付けさせてほしい。 ・読書の時間を大切にしてほしい。	
	生徒指導	・生徒指導の4つの視点を意識し、きめ細やかな実態把握と温かい場所のある学級経営を実践する。 ・発達支持的生徒指導を重視し、安全・安心な居場所があると感じる学校・学級づくりを推進し、いじめや不登校の未然防止に努める。 ・より効果的な支援体制を構築するとともに、保護者との信頼関係を築く。		○生徒指導の4つの視点による学級づくりを進め、児童相互及び教職員との好ましい人間関係を育成する。 ○豊かな人間関係を育むために、異年齢活動を進める。 ○日々の子どもの様子を全教職員で見守り、情報交流を丁寧に行うことで、「いじめ」や「不登校」の芽を逃さない。 ○多様な考えと触れる「考え議論する道徳」へと質的転換を図り、多角的・多面的な見方へと発展させる等道徳教育の充実を図る。 ○児童の状況把握に努め、SCやSSW等外部機関と組織的に連携し、いじめや不登校の未然防止を図るとともに、教職員の対応力を向上させるため研修の機会をもつ。		○大きな問題事象や重大ないじめ等もなく、学校が安定している。 ○3つのC(chance・challenge・change)を合言葉にすることで、目指す方向性がわかりやすく取組の活性化に繋がった。 ○各行事や取組等において異年齢活動を意図的に組み入れることで児童の繋がりが深まり所属感や一体感を高めた。 ○不登校傾向の児童が見られたが、丁寧に素早く家庭と連携しながら対応することで、改善が見られた。今後も各機関や家庭と丁寧に連携し指導を続けていく。 △評価を含め「考え議論する道徳」の時間となるよう教員の研修が必要である。 △家庭状況を背景とした個々の課題が大きく、引き続きSC・SSW各関係諸機関と連携し改善構想を立て協議・共有していく必要がある。		・児童も保護者も学校での生活を肯定的に捉えていることが教育活動の充実につながっている。 ・高学年になるにしたがって、心と体のバランスが難しくなるので、SC等とも連携しながらよりよく育ててほしい。 ・家庭環境の改善は困難であるが、学校にいる時間を優しい声掛けをしたり楽しく過ごしたりとホッとする時間をつくってあげてほしい。	

健康（体育）・安全	・健康の保持増進と体力の向上を図るとともに、様々な取組を通して粘り強く活動する心を育てる。 ・安全・安心な生活を営むための対応力を育成する。	○運動の楽しさや喜びを感じさせる授業や活動を行うとともに、苦手なことでも粘り強く頑張ったことが「よかった」と実感できる取組を仕組み、自尊感情を高める。 ○安全指導・避難訓練の改善を進め、心の面でも身体的な面でも危機回避ができるよう育成する。 ○食事や睡眠の重要性を学ぶ機会を設定するとともに、保護者の協力を得ながら健康的な生活習慣を育成する。 ○大宮学園の取組と連携させ、望ましい生活習慣の確立やゲーム SNS 視聴との課題について学習の機会を設定する。	○休み時間は多くの児童が異年齢で体育館やグラウンドで遊ぶ姿が見られる。運動が得意な児童も苦手の児童も自分らしく挑戦する姿が見られる。 ○健康安全に関する指導や取組を進めることはできたが、危機回避能力を身に付けるまでには至らなかった。 △いつでも、どこでも、誰にでも気持ちよく挨拶ができる児童を育てたい。 △基本的な生活習慣に課題のある児童が固定化している。特に、ゲーム・SNS 等の改善に向けて継続的な取組を行うとともに家庭との連携を図る。	・各家庭によってゲームや SNS 等の考え方が全く違う。PTA での交流の中の話題として設定すると考え方が広がるのではないかな。 ・活動や体験することは子どもの目の輝きが違うので、自然の中での体験や活動を大切にしてほしい。
特別支援教育	・特別支援学級を中心とした教育活動を全校的に進める。 ・支援を必要としている児童に対して、組織的な対応を進めるとともに、児童理解の力量を高める。	○特別支援教育に関する研修を通して、全教職員が専門性を身に付け、多様な児童の個性に応じた教育を実践する。 ○特別支援コーディネーターを中心に児童支援に係る部会を定例化し、現状や課題・手立て等について協議する中で、よりよい指導支援のあり方を探り、実践する。 ○保護者との面談を定期的に行い、児童の特性とともによさや成長を確かめ合う中で、合意形成に基づく支援を進める。	○学園で統一した様式でアセスメント等を行い、全教職員で交流することで支援の在り方を確認し、学び合うことができた。 ○△児童支援部を中心として安定した支援を継続することができた。個に応じた支援の在り方について研修を進める。 △定期的な面談だけでなく日常的に伝える中で信頼関係を築き、学校と家庭で支援の共有や見通しをもつことを大切にする。	・保護者との関係を築き、丁寧な面談等を進めていることはとてもよい。 ・保護者も不安を抱えている。保護者の見方や考え方を和らげ、保護者を支える視点も大切である。
情報活用能力（ICT活用）	・授業における使用から質の高い活用に高めるための研究を進める。 ・タブレット端末等 ICT を積極的に活用し、学習意欲の向上や授業づくり、学力向上に向けた指導方法を工夫するとともに「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、授業改善を図る。	○ICT 等を適切に用いて情報を得たり、情報を整理・比較したり、得られた情報をわかりやすく発信・伝達したり、必要に応じて保存・共有したりする学習を行う。また、情報機器の基本的な操作の習得やプログラミング的思考、情報モラル、情報セキュリティについても学ぶ機会を設定する。 ○個別最適な家庭学習を推進し、個々のニーズに合わせた学習活動を展開していく。 ○実践を発信するとともに、研修の機会を増やす。	○発達段階に合わせて ICT を活用した授業を工夫することができた。特に高学年は、思考ツールを活用して整理・分析する力を身に付けることができた。 ○振り返りや情報をまとめる手段として ICT を活用する学年が増えた。 △授業や家庭学習での効果的な ICT の活用が課題である。市が導入しているアプリ等の活用を進め、「自己調整力の向上」を目指す上での効果的な ICT 活用のあり方をさらに研究する。	・ICT 活用が一気に進み、児童も操作や活用にととても長けている。 ・ICT 活用により意欲や理解につながる児童もいるので、一人一人に応じた活用を進めてほしい。 ・ICT を活用した授業の充実を保護者や地域にもぜひ発信してほしい。
次年度に向けた改善の方向性	・大宮学園として京丹後市保幼小中一貫教育研究会を実施するため、教職員の参画意識を高めるとともに、探究的な学びを踏まえ、自己調整を中心とした授業観の転換を図ることで授業改善を行い、学力向上を目指す。また、自己調整力を高めるための家庭学習のあり方についても、ICT 活用も含め研究し改善を図る。 ・特別支援教育と教育相談を本校の重点課題として位置付け、発達上の配慮や家庭環境の配慮等が必要な児童に対するケアを組織的に進める。 ・全教職員が心身ともに健康な状態で児童の指導に当たれるような職場づくりを進めていく。			・児童の姿は見る者に元気を与えてくれる。児童の姿を通して学校の様子がよくわかる。 ・先生方も健康に過ごしてほしい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立網野北小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とのつながり、郷土を愛する心を育てる。		○「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究を進め、焦点化した非認知能力におけるギミックブラッシュアップシートによる全担任の授業研究会を行うことにより授業改善に取り組んだ。 ○全学級で ICT 機器を活用した授業を実施した。オンラインの配信型の課題だけでなく、Team やロイロノートに於ける他者参照を取り入れる等授業での ICT 機器の活用が進んだ。 △不登校(傾向)児童や家庭に対し関係機関や専門家と連携を図り、児童や保護者の思いを大切にした支援を更に進める。 △学年があがるにつれ自己肯定感の低下がみられる。		1 網野学園保幼小中一貫教育の「目指す子ども像」の具現化を図るため、他の保園小中学校一貫した教育を推進するとともに、全教職員が学校運営に参画する。 2 「児童が主体性とそうぞう力を発揮する学校」「児童のよさがつながる学校」を目指し、児童にとって居場所のある魅力ある学校づくりをすすめる。
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、計画及び各学園の重点等、保幼小中一貫教育の基盤として	教育課程 学習指導	1 「未来を拓く学校づくり」推進事業における研究において、非認知能力を教職員と児童が共有し、効果的なギミックや仕組み方を通じた授業研究を行う。 2 学習意欲を喚起する授業展開とねらいが明確で「わかる・できる授業」を目指し、身に付けた知識・技能を活用し考え、表現する中で、児童が学びあう授業研究を行う。 3 すべての教科等に探究の各プロセスを取り入れ、学びのスキルを向上させる。 4 多様な学習形態や学力補充・家庭学習、個の興味や理解に応じた学習を更にすすめるために ICT を積極的に活用する。 5 単元を通して児童が学習の成果や自分自身の成長したことに気づき、次の学習や学びに向かう意欲につなげられる振り返りを通じた授業改善に取り組む。	○教職員と児童が非認知能力の重要性を意識し、共通理解を深める機会が増えた。 ○粘り強さや協働性、自己肯定感を育む工夫が授業に取り入れられた。 ○ねらいを明確にし、学び合いの場を意識した授業が増加した。 ○児童が課題を設定し、自分で調べ、まとめる力が伸びた。 ○児童が自ら調べ、学びを深める活動が増えた。 ○振り返りの活動が定着しつつあり、自己評価力が向上している。 △非認知能力の具体的な評価方法が明確でなく、成長の実感を児童や保護者とのように共有するかが課題。 △児童の学び合いの質を高めるための支援方法にばらつきがある。 △探究活動の進め方に学年差があり、統一的な指導の枠組みが必要。	・教育活動の在り方が変化していることが実感される中で、児童の学びをより豊かにするための取組が進められている。特に ICT の活用は、今後の児童の学びや生活に必要な不可欠であり、積極的に活用することでスキルの獲得につなげられる。 ・一方で、タブレット学習の増加に伴い、「書く」活動が減少していることへの懸念があり、書く力を育む機会の確保が求められる。
	生徒指導	1 異年齢活動の充実を図り、児童が自ら気づき主体的に活動することで、達成感や充実感を感じ合い自他ともに大切にする安心・安全な「居場所づくり」に努める。 2 生徒指導部会・教育相談部会、いじめ防止組織の中で、児童の姿を共有し、児童の変化に気づき見逃さない校内体制を構築する。 3 気になる児童については、積極的にアセスメントを行い、なぜそのような状態に至ったのか、児童の示す行動や背景や要因、情報を収集して分析し、明らかにする。	○異年齢交流を通じて、児童同士の関係性が深まり、安心感が生まれた。 ○児童が役割を持ち、自信を持って活動できる場面が増えた。 ○児童の変化に気づきやすい仕組みが整備され、早期対応が進んでいる。 ○児童の背景や要因を踏まえた対応が進み、支援の質が向上した。 △さらに細やかな児童理解を進めるため、情報共有の方法を見直す。 △アセスメントを継続的に実施し、支援の改善を図る仕組みを整える。	・児童への肯定的な評価を継続し、行動の変容につなげる取組がなされている。また、児童数が少ない中でも、一人一人が活躍できる場面を設け、自己肯定感を高める教育が推進されている点は成果といえる。

健康（体育）・安全	1 積極的にチャレンジし、自らの成長につながっていることを実感する指導を進める。 2 基本的な生活習慣に関する児童の実践的な態度の育成を図る。	1 個に応じた目標や短期（各単元）目標を設定させ、目標児童が達成感を得られる取組を仕組む。 2 振り返りの中で、児童の相互評価や家庭との連携、指導者による肯定的な評価による価値付けを行う中で、自他の成長に気づき次への意欲を高める。 3 児童の成長の基盤となる生活習慣について、主体的実践的な態度の育成に向けた取組の充実を図る。	○目標を意識した学習が促進され、児童の学習意欲が向上した。 ○児童の相互評価を通じて、他者の学びを認める姿勢が育まれた。 ○家庭との連携が進み、児童の学習への関心が高まった。 △目標設定を児童一人ひとりに合ったものにする工夫が必要。 △目標の達成度を具体的に評価し児童にフィードバックする方法の充実が求められる。 △教職員間で振り返りの実施方法について共通理解を深める必要がある。	・児童が目標をもち、工夫しながら主体的に取り組んでいることが評価できる。さらに、家庭との連携を図りながら学びを深める取組が進められており、今後の更なる発展が期待される。
特別支援教育	1 児童一人ひとりの実態に応じた適切な支援を行う。 2 特別支援コーディネーターを中心とした組織体制の充実を図る。	1 すべての児童にとっての学びやすさ、生活のしやすさにつながる教育環境を整備する。 2 組織的なアセスメントを行った上で、支援を要する児童の教育的ニーズに応じた支援内容を検討し、保護者・児童と目標を共有しながら支援の工夫改善を図る。 3 特別支援コーディネーターを中心として関係機関と連携を進めるとともに、校内組織の機能化を図り、個に応じた支援の質の向上を図る。	○児童が安心して学べる環境づくりが進んだ。 ○校内のバリアフリー化や教材の工夫が進んでいる。 △すべての児童にとっての適切な支援の在り方を継続的に検討する。	・該当児童やその保護者が安心して学校生活を送ることができるような環境づくりが進められている。 ・支援学級の児童とともに多くの児童が自然に関わり合い、共に学ぶ姿が見られ、特別支援教育が行き届いていることがうかがえる。
開かれた学校づくり	1 丁寧で分かりやすい情報発信と積極的な学校公開を進める。 2 P T A・地域の関係機関等との連携を強化する。	1 学校だよりや学級通信、ホームページ等で、学校の様子を発信するなど積極的な学校公開を行う。 2 P T Aや地域の人材や関係機関等との連携を強化し、学校行事や授業参観を促進する。	○学校の取組を積極的に発信し、保護者や地域の関心が高まった。 ○地域の人材を活用した活動が充実した。 △学校通信やホームページの内容をさらに充実させる工夫が必要。 △地域との連携を継続的なものにするための仕組みづくりが必要。	・地域の人材を活用した活動も充実しており、子どもたちが地域と関わりながら学べる環境が整っていると感じる。 ・地域との連携を継続的に続けていくための仕組みが整うことで、よりよい関係づくりができると考える。
次年度に向けた改善の方向性	「個別最適な学びと協働的な学びの両立」を軸に、授業の質向上、児童の主体性の育成、安全・安心な環境づくり、支援体制の強化、地域との連携を進めていく。授業では、「わかる・できる学び」を充実させ、探究的な学びや ICT 活用を促進。振り返りを通じた学びの定着を図っていく。異年齢活動の充実や、児童の変化に気づく体制を整え、安心できる環境を構築。特別支援教育の質を高め、関係機関との連携を強化していく。さらに、学校の情報発信を充実させ、地域とのつながりを深めていく。			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立網野南小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
網野学園基本方針より 1 落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 規範意識を醸成し、思いやりをもち仲間と共に生きる豊かな人間関係を築く力を育てる。 3 すべての子どもに、未来を展望し、自ら将来を切り拓く力を付ける。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。		○みんなで学び合う授業、仲間とつながり合う授業の増加 ○育てたい非認知能力の明確化と取組の充実 ○ICTを活用した家庭学習、個に応じた学習の充実 ○異年齢活動を通した子ども同士のつながりの高まり ○保護者・地域と連携した安心・安全な登下校の確保 △認知能力と非認知能力の一体的な育成と児童の見取り △課題解決的な学習、探究的な学習 △文章を読み解く力 △家庭と連携したスクリーンタイム、規則正しい生活習慣の改善		○みんなで学び合う学校 ・意欲や向上心をもち、挑戦する子の育成 ・あきらめず、粘り強くやり抜く子の育成 ○仲間とつながり合う学校 ・自分の考えをもち、他者に伝えたり聴いたりすることができる子の育成 ・仲間と問題を解決しようとする子の育成 ○個を大切に作る学校 ・人を思いやり大切にする心の育成 ・よさや違い、多様性を認めることができる心の育成 ○信頼される学校					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	○探究的な学びを充実させ、主体的に問題を解決しようとする力を育てる。 ○仲間と共に学び、高まり合おうとする力を伸ばす。 ○自分の考えをもつことや、伝える力・聴く力を高める。		・地域教材を生かした探究的な学びを目指し、研修と実践交流を通して指導者が学び合い、教科横断的なカリキュラムマネジメント力と授業実践力を高める。 ・学園の研究と連動させながら認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業づくりに取り組む。 ・日々の様子や学力テスト等の結果から個々の実態を把握し、課題の改善に迫る授業と、その評価にこだわる。 ・授業や家庭学習において ICT を効果的に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」に取り組む。		○実践や情報を共有しながら地域を教材とした総合的な学習の時間や生活科の学習の充実を図り、児童の地域に対する興味・関心が高まった。また、地域の方とのつながりも広がった。 ○認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業づくりの研究を計画的に実施し、児童自らが「仲間とつながり粘り強くチャレンジ」を意識している場面が増えた。 ○タブレットを使った学習場面が増え、家庭学習での使用も定着してきた。 △研究の成果が十分に表れていない。(学力課題) ICT を活用した個別最適な学びや協働的な学びを教師が意図的に仕組み、児童自らが課題に向かって学習する力を育てる。		・6年の銚子山古墳の探究的な学習は、地域の者でも知らなかった深い内容を学習発表会で発信し、地域資源と人をつなぐ役割も果たしていた。 ・家庭学習で音読や九九の暗唱を家族が聞く光景がよく、大事にしたい。 ・情報機器の使用時間が長くなってきているが、視力が心配である。タブレットにブルーライトカットフィルムを貼るなどの予防対策も必要と考える。	
	生徒指導	○人を思いやり大切にする心を育てる。 ○児童の変化や気になる様子を捉え、いじめを早期に防止する。 ○丁寧なアセスメントと個に応じた支援を行い、不登校を未然に防ぐ。		・特別活動や道徳教育、人権教育、国際理解教育、特別支援教育等を通して、相手を思いやる心、人権尊重の心の育成に取り組む。 ・学級活動や異年齢活動を大切にし、児童が安心できる居場所やよりよい人間関係づくりに取り組む。(発達支持的生徒指導の実践) ・問題を早期に発見し対応できるよう、日頃変化への敏感に気付くことと情報共有を心掛け、組織的に動くことを基本にする。(課題予防的生徒指導の実践) ・定期的に部会を開いて気になる児童のアセスメントを丁寧に行い、対応・支援のタイミングや方法等の判断を誤らないようにする。		○「児童に任せる、委ねる」特別活動に取り組んだ。児童会活動や異年齢掃除、大縄の取組が充実し、高学年のリーダー性を高めてチーム内のよりよい関係を築くことができた。 ○教職員間の情報共有を日常的に行い、児童の様子や変化に早期に気付き、丁寧に対応することに努めた。登校しぶりや児童の困っている問題に組織的対応し、改善につながってきている。 △問題が生じてからの対応や指導することが少なかつた。発達支持的生徒指導を充実させ、日頃から心理的安全性のある環境、良好な人間関係、豊かな心をはぐくみ、問題の未然防止・抑止につなげる。		・異年齢活動は、6年生のリーダー性を育てる絶好の場である。春の頃から比べるとずいぶん成長した姿が見られる。 ・保護者が関心をもって学校行事や参観することは、子ども達の安心や安定につながるなので、大事である。 ・良くも悪くも中学生の姿は刺激になる。あいさつは、中学生の姿を見習わせたい。	

健康（体育）・安全	○進んでチャレンジし、あきらめずやり抜く力を育てる。	・自分の目標に向かって粘り強くやり抜く経験と肯定的評価を重ね、自発的・主体的な力を伸ばす。 ・実態調査の結果等を示しながら家庭と連携を図り、自ら考えてよりよい生活を実践しようとする取組を行う。 ・外部講師を招き専門家による交通安全教室・非行防止教室・薬物乱用防止教室や訓練等を計画的に実施し、危険を回避したり被害に遭ったりしないための判断力を育てる予防的指導、安全教育を行う。	○様々な場面で「仲間とともに粘り強くチャレンジ」を目標にし、児童自らが新たな取組を考え、高まり合うことができた。 ○外部から講師を招聘し、専門性を生かした学習により児童の理解を高めることができた。 △情報機器の使用状況の課題は、家庭の協力・意識向上が不可欠である。調査結果の課題を懇談会で伝えたり講演会を開催したりする以外にも理解を図る取組が必要である。 △服装等の問題について、個性と捉えた家庭責任か、規範意識の醸成と捉えて学校の対応や指導が必要かに迷い、現在は様子を見守っている状況である。	・きまりがあるから守らなければならないではなく、なぜそのきまりが必要であるかを考えさせたい。 ・きまりや校則を自分たちで考えさせると、意識化が図りやすく、自分事のできる。
特別支援教育	○個の教育的ニーズに応じた指導や支援を実践する。 ○よさや違い、多様性を認め合える心を育てる。 ○組織体制を整備し、部の動きの機能化を図る。	・あらゆる教育活動の場面を通して個のよさや違い、多様性に気付かせ、互いの頑張りを認め合い共に力を高め合おうとすることの気持ちよさや充実感を味わわせる。 ・特別支援教育コーディネーターが要となり丁寧なアセスメントを行い、特性の理解、指導の方向性を全教職員で確認し合って適切な指導・支援に努める。 ・組織的な体制を整え、短・中・長期の目標を明らかにして支援計画や指導計画等の作成・実践・検証を行う。	○児童を理解し、特性に合わせた支援が進められ、落ち着いて学習や活動に向かえるようになってきている。 ○日々、教職員間でこまめに状況を交流してアセスメントを行い、児童に適切な学びの場、環境づくりに努めてきた。 △支援計画、指導計画が形式的にならないよう、実態に合わせた見直しと、内容の充実や具体的実践が必要である。 △教職員の理解に個人差があり、研修を行った。個に応じた指導、インクルーシブ教育、ユニバーサルデザイン教育についてさらに学び合うことが必要である。	・苦手なこと、自信がないことから逃げたい、避けたいものだが、思い切って人前で行うことで自信につながる。機会を与えたい。 ・なかなかできない体験を通して自分の中の一面に気づくこともある。どんどん経験をさせてやりたい。
危機管理	○教職員の危険予知の感度を上げ、事象や事故の発生を未然に防ぐ。 ○危険を早期に発見し、組織的に早期の対応を行う。	・情報を一元化し、集合や黒板・回覧板等を活用して全教職員でタイムリーに共有する。 ・危機管理マニュアルを整備し、いざというときに活用できるように教職員で内容の共通理解を図っておく。 ・日常的な見回りや定期的な校内点検を行い、安全管理を徹底し、危険を未然に防ぐ。（リスクマネジメント） ・日頃からルールやきまりの遵守に努め、事象や事故の発生を防ぐ。	○不審者対応研修の効果が見られ、教職員の防犯意識の向上につながった。 ○日常的な情報共有が増えた。組織的な対応も早くなってきている。 △教職員の危険予知の感度を上げることが必要である。安全点検時に気付くが、日頃は見逃していることもあり、危険な遊び方への指導が後手になることがある。 △廊下歩行、登下校については課題が継続している。指導の効果は一過性であり、主体的な行動改善に至っていない。	・不審者対応研修も必要だが、今は命に関わる熱中症対応の教職員研修が必要である。 ・いざというときに教職員が動けることと合わせて、子ども達にもどのように動くかよいかわけを知らせておくことが大切である。
次年度に向けた改善の方向性	○課題や問題に自ら向き合い、解決していく過程を楽しみながら体験し、結果や答えを導き出していく授業づくりを大切にする。 ○非認知能力を高めるギミックを継続し、「自分と向き合う力」「自分を高める力」「他者とつながる力」を育てることができているかを見取りや検証の方法と、認知能力の向上との関係を追究する。 ○個々のよさや違いを教職員も児童も認め合い、児童の主体的な活動の充実、安全かつ安心できる環境づくりに取り組む。 ○保護者や地域、外部の方々に協力や支援していただく機会を大切にし、共に児童を守り育てる関係を築く。			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立島津小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす子どもの育成を図る」 (知) 意欲的に学習に取り組む子ども (徳) 規範意識をもち、仲間と支え合う子ども (体) 粘り強く心身を鍛え、やり抜く子ども 網野学園「教育目標・目指す子ども像」の実現を目指し、学園の園所や小中学校の保育・教育から謙虚に学び、常に自校教育の改善に努める。		○重点研究を総合的な学習の時間・生活科とし、探究的な学びの充実に向けた実践を積み上げることができた。 ○心の不安定な児童に対して SC や SSW や関係機関、家庭との連携を図り、適切な支援を行うことができた。 △ゲーム・SNS 等による生活習慣の課題改善に向けて取組を継続するとともに家庭との連携を強化する。 △個に応じた具体的な支援について特別支援教育コーディネーターを中心とした組織体制・研修を充実させる。		安心感の中で一人一人が自分らしく挑戦し、輝き続ける学校づくり～肯定的評価を基盤とした教育活動の展開～ 【大切にしたい5つの重点】 ・学習・生活における誠実な努力 ・約束を守り、自他を大切にする心 ・知恵を集め、新たな価値を生み出す力 ・児童・教職員の達成感と次への意欲 ・保護者・地域からの信頼	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、 諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	・重点研究を総合的な学習の時間・生活科とし、昨年度積み上げた探究過程をさらに深める。特に、各教科等における探究的な学びの波及についても研究し児童の意欲や主体性、見通しを引き出す指導を進める。 ・生徒指導提要の改訂趣旨も踏まえ、肯定的な評価に基づく居場所づくりを大切にしながら、コミュニケーション能力の向上を図り授業・学力向上の取組を進める。 ・昨年度と本年度の学びのパスポートの結果について網野学園で進める「認知能力と非認知能力の一体的な育成」の視点を踏まえ、効果的な結果分析のあり方等を研究し、経年変化からの個の学力状況・今後の課題等の把握に努める。		○本校が市保幼小中一貫教育授業研究会にて公開授業を実施し探究的な学びへの研究の充実とともにその成果を広く市内に発信することができた。 ○学びのパスポート質問調査「学校では安心して学習することができている」はどの学年も府平均を大きく上回り、安心感の中で学びを深めることができた。 ○生活科・総合的な学習の時間において地域人材活用のあり方の研究が進み、活用が学びの質の向上につながった。 △個別の学力課題への対応・改善を継続し仲間とともに自信をもって学びに向かう意欲の向上に努める。	・地域連携や地域学習の取組について地域から評価の声をよく聞いている。 ・学校に保護者・地域が入りやすくなり、学習の様子の共有とともに学ぶ機会が充実してきている。 ・児童のよい関係が、学習への落ち着きにつながっていると感じる。 ・少人数のよさも生かし、一人一人に応じた授業や支援をさらに進めてほしい。
	生徒指導	・肯定的評価や安心安全な居場所づくりと学級経営の連動について研修を定期的実施し児童のよさ、誠実な努力を引き出す指導を大切にする。 ・特別活動等において児童の発想や主体性を大切にし、失敗の中から学び、工夫・創造し挑戦する力を高めるとともに自他の成長を喜び合える力を育成する。 ・部会の定例化とともに日々の気づき、交流の中から児童の変化への丁寧なアセスメントを行う。その際、具体的な動きづくりにつながる役割分担のあり方等、方針を明確にし、対応の向上充実に努める。		○児童アンケート「学校は楽しい」は98%、保護者アンケート「学校が子ども一人一人を大切にしたい指導をしている」は96%と安心感の中で学校生活を送る児童が増えた。 ○異年齢活動をととして子ども主体の行事・取組を設定する中で、一人一人の主体性や仲間との協働性を高めることができた。 △家庭状況等からの心身の不安定や学校・集団への不適応等の改善に向け、より一層家庭、SC や SSW、関係諸機関との連携を強化する必要がある。	・朝のあいさつの声がよくなった。地域もその声に元気をもらっている。 ・教職員が一人一人を大切にしたい対応や支援をしていることが窺える。チームワークのよさを感じる。 ・高学年が中心となり、生き生きと行事や取組を進める姿がよい。その姿が低学年のあこがれでもあり、その思いをつないでほしい。

健康（体育）・安全	・運動の楽しさや喜び、心身の健康の大切さを感じさせる授業や活動を推進する。 ・望ましい生活習慣の確立と安全な登下校、事故防止に係る知識・実践力を高める指導を推進する。	・本校の特色である異年齢活動を生かしながら、仲間とともに活動する心地よさを感じさせるとともに、授業や体育の行事・取組の中で「自分に適した場や運動の設定」を大切に自分らしく意欲的に挑戦させる。 ・課題の見られるゲーム・SNS等の視聴について網野学園「これだけは！（家庭編）」や「情報モラルアンケート」等を踏まえ、家庭ルール確立に向けた啓発を継続する。 ・安全な登下校への取組や交通教室等、PTA・学園・関係諸機関との連携を強化する。	○一人一人の状況や思い願いを大切にした活動の場や仲間との一体感、所属感を感じる活動を大切にすることで「遊びや運動が好き」という児童が増えた。 ○島津駐在所や関係諸機関と連携し防犯や交通安全等について学ぶ機会を大切に、安全意識や実践力向上につなげることができた。 △保護者アンケートからは「ゲームやネット視聴の約束」や「就寝時刻」の課題が窺える。学校・学園からの啓発と保護者との連携を継続する。	・社会体育等で生き生きと活動している児童が多い。学校で遊びや運動をとおして心地よさや楽しさを感じていることが窺える。 ・家庭生活のあり方や保護者同士の関係が児童の生活習慣に表れてくる。学級懇談会や親子行事等での保護者のつながりづくりも今後より大切である。
特別支援教育	・個々の特性等を組織的に捉え共有することに努め、適切な支援をとおして児童が学び合い、育ち合えるようにする。	・特別支援コーディネーターを中心に児童支援に係る部会を定例化し、現状や課題・手立て等について協議する中で、よりよい支援のあり方を探り、実践する。 ・特別支援教育に係る研修を充実させ、個別支援とともに通常学級における個と集団の支援のあり方について研究を進める。 ・具体的な方針に基づく保護者との面談を定期的に行い、児童の特性とともによさや成長を確かめ合う中で、合意形成に基づく支援を進める。	○教育支援部会を定例化し、児童実態や変容を定期的に共有することができた。 ○事例研究等、具体的な支援のあり方等について研修し児童支援の充実に努めた。 ○保護者との面談等を大切にし思いや願いを把握し、児童の成長やよりよい支援のあり方を共有することができた。 △個と集団の支援のあり方やバランスを一層大切にさらに研修を深める。	・得意なことや苦手なことはそれぞれ違うが、行事や取組の中で一人一人のよさが発揮され、認め合う姿が見られる。 ・小規模校ではあるが、多様な子どもたちが生活している。安心して学習・生活できる環境づくりをさらに進めてほしい。
情報活用能力（ICT活用）	・探究的な学びの充実につなげる活用のあり方について研究を進める。 ・家庭学習をはじめ広く教育活動における活用の手法を研究し個別最適な学びの実現を目指す。	・児童の考えや学びをつなぐツールとしてICTをいかに活用するかを研究する。 ・本年度は「PCタイム」（情報活用スキルを高める時間）を設定し、授業で活用するアプリや機能を系統的に学ばせていく。その中で情報モラルや活用ルール等も発達段階に応じて指導し日々の活用の質を高めるよう努める。 ・「整理」「探究」「予習」「補習」等、家庭学習におけるICT活用の視点を研究し、授業と家庭学習とをつなぐ。	○授業でのクラウド活用による共同編集や他者参照等のあり方について研究を進めた。「使う」から「効果的な活用」へと質的向上を図ることができた。 ○「PCタイム」の運用は児童の情報活用スキル向上につながった。本年度実践を整理し次年度のより系統的・効果的な運用を目指す。 △タブレット持ち帰りによる家庭学習が一定定着し、今後さらにその活用のあり方や内容充実のため、保護者への説明や啓発を継続し連携・納得の中で家庭学習での活用を探る。	・ICTスキルの差が学習や学力の差にならないか心配をしていたが、授業参観等で全体のスキルの高まりや個別の対応の充実が見られ安心した。 ・タブレットに向かっている時間とともに友だちとのコミュニケーションの時間とのバランスも大切にしてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	・探究的な学びの充実やICTの効果的な活用をすべての教室で着実に進め、子ども主体の授業改善をさらに推進する。 ・学びのパスポートや各種学力調査等の結果からより一人一人の学力・学習状況の把握・改善を推進する。 ・児童が考え、実践し、失敗から学ぶことができる主体性を育む特別活動を推進する。 ・特別支援教育を中心に多様な課題への支援、関係諸機関との連携による保護者・家庭支援を大切にする。 ・タブレットの持ち帰りや家庭学習での活用を契機に、家庭連携による情報活用モラルの向上や適切なルール作りを推進する。			・今後保護者・地域との連携がますます重要になってくる。学校の進める教育を積極程に発信してほしい。協力は惜しまない。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立橘小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
【教育目標】 「将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす児童・生徒の育成を図る教育の推進」 【目指す子ども像】 あ：明るく元気に進んで学ぶ子 【知】意欲的に学習に取り組む子ども み：みんななかよく支え合う子 【徳】規範意識を持ち、仲間と支え合う子どもの：のびのび生き生きやりぬく子 【体】粘り強く心身を鍛え、やりぬく子ども		○網野学園としての「未来を拓く学校づくり」に関わる研究と連携した校内研究を進め、非認知能力の育成をベースとした学力向上に取り組むことができた。 ○本校で育てたい非認知能力を「たちっ子パワー」として設定し、教職員・児童で共有できた。 ○組織的な特別支援教育を進めることで、個に応じた指導や合理的配慮により個々の児童や学級の安定が見られた。 △学力診断テスト等について結果を分析したり、それを活用したりしたが、その効果については十分得られず、活用方法や指導について改善の必要を感じた。 △時間外勤務時間は、月平均4.5時間の目標を達成できたが、一部教員への負担が大きい状況は改善できなかった。		【教育活動の目標】 「考えてつながり、最後までやりぬく たちっ子」の育成～目的意識と達成意欲を大切に教育活動の推進～ 【教育活動の具現化に向けて】 たちばなを好きになる 安心して自己表現できる学校を、みんなでつくる。 知：知恵を磨く 自己の成長を喜び、主体的に学ぶ力をつける。 徳：場を大切にする。 豊かな人間関係を築く力をつける。 体：なに事もやりぬく。 粘り強くゴール(目標達成)を目指す力をつける。 「自立と支援の見極め」「働き方改革の推進」 「認知能力と非認知能力の一体的な育成」					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校教育計画及び各学級の重点、保幼小中一貫教育の重点等として	教育課程 学習指導	1 一人一人の個性・よさ・可能性を伸ばすことで、将来に夢と希望をもつ児童を育む。 2 主体的・対話的で深い学びの具現化に向け、学級づくりと授業づくりを連動させるとともに、非認知能力の育成を図る。		1 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、授業改善を行う。 ・算数科を重点教科とした組織的な授業研究を通して、認知能力と非認知能力を一体的に育成する。 ・児童と共に学習課題を設定し、解決型の授業づくりを通して探究的な学びを進める。 ・単元構想シートやギミックシートを活用した授業づくりを行う。 2 学力向上の取組を進める。 ・ICTの活用や、小規模校の良さを生かして個別最適な学びの具体化に努める。		○網野学園としての授業研究会と、4回の校内授業研究会を通して、教科の指導内容と非認知能力の育成の両立を目指した研究を進めることができた。 ○クラウドを活用した非認知能力の振り返りを行い、児童の非認知能力を発揮した授業参加の意識を高めることができた。 △非認知能力の向上による学力の向上を成果として表れるようにしていく。		○非認知能力を高めて、児童が学習に前向きになることはよいと思う。今後も取組を継続してほしい。	
	生徒指導	1 豊かな人間関係を築く力を育てる。 2 校内組織の連携を密にし、児童のより良い人間関係づくりを支援する。 3 いじめや不登校の未然防止に努める。		1 豊かな人間性を育てる。 ・道徳の授業や人権学習の充実を図ることで豊かな人間性の基礎を培う。 ・地域等、多様な人との関わりを通じた学習から豊かな人間性の素地を養う。 2 認め合える集団づくり ・学級や異年齢集団等多様な集団での活動を通して豊かな関わりを経験させる。 3 教育相談部、生徒指導部等の連携と機能化、丁寧なアセスメントと個に応じた支援により、いじめの防止や不登校の未然防止に努める。		○発達支持的生徒指導と心理的安全性を高める指導を大切に学級経営を進めることができた。 ○地域と関連させた学習に取り組み、人との関わりを通して豊かな心の育成に努めた。 ○異年齢集団の活動では、各学年の発達段階に応じた目標をもって参加させ、振り返りを大切に活動のサイクルによって豊かな人間関係の構築に努めた。 △自己肯定感を高め、日々の主体的な態度に表れるよう取組を継続していく。		・地域との関わりを大切にした学習は、郷土愛を育てることにつながる。今後、多くの学年で取り組んでほしい。 ・地域での子ども達の様子について、学校と一緒に見守っていききたい。	

健康（体育）・安全	1 目的意識をもって粘り強く取り組む意識を育てる。 2 運動好きな児童を育てる。	1 主体的な児童の育成 - 児童が挑戦できる場や、目標をもって取り組むための支援と肯定的な評価を大切にしたい取組を進める。 - 振り返りの場を大切に、主体的な姿を価値付けることで次への意欲を高める。 2 健康の維持・体力の向上 - ICTを活用した体育的な活動を通して、運動を楽しむ児童を育てる。 - 体力づくりの取組などを通して、児童が目標達成に向けて最後まで粘り強く取り組む力を付ける。 - 生活リズムを整える取組を進めるとともに、生活習慣等に課題のある児童や家庭に対して丁寧な支援を行う。	○生活点検の取組を、非認知能力育成と関連付けた生活点検に取り組み、児童が自己の生活リズムを見直す機会とできた。 ○マラソン大会に向けた朝マラソンの取組を熱中症対策を行いながら実施できた。 ○異年齢集団活動（春の運動会・大縄大会）の取組では、児童による振り返りを大切に進め、教職員による支援と、児童の主体性を活かした活動のバランスを考えながら進め、教育的効果を高めた。 △自己調整能力の向上のため、児童主体の活動を充実させるとともに非認知能力の意識化に向けた手立てが必要である。	- 区民運動会が中止になり残念であったが、学習発表会など子ども達の様子を見るのは楽しみである。 ○異年齢の活動の中で、上級生が下級生に関わる姿が見られてよい。
特別支援教育	1 個に応じた指導と、理解教育を進め、児童が安心して学習できる学校づくりを進める。	1 特別支援コーディネーターを中心とし、特別支援教育指導員の助言も生かした組織的な特別支援教育を進め、個に応じた効果的な指導を行う。 2 全校的な理解教育を充実させ、どの児童も安心して学習できる環境づくりを進める。	○児童個々のアセスメントを丁寧に行い、特別支援教育部の組織を通して必要な支援と自立のための活動を検討、設定できた。 ○特別支援教育指導員を活用し、個に応じた学習の場を提供できた。 ○人権教育とも合わせて理解教育を進め、全ての児童にとって安心安全な学校となるよう環境づくりに努めた。	○一人一人の良さや課題に合わせて指導や支援ができることは、小規模校の良さと感じる。
情報活用能力（ICT活用）	1 ICTを活用した多様な学習により、情報活用能力とコミュニケーション能力を高める。	1 ICTの効果的な活用 - ICTの活用により、児童の興味関心を引き出す授業展開を工夫し、学力とICT活用能力の向上を目指す。 - 授業の中でのコミュニケーションツールとして、ICTの活用を充実させる。 - 授業と関連付けたタブレットの持ち帰り学習を進め、家庭学習の充実とICT活用能力の向上につなげる。	○放課後の時間を活用したミニ研修会を設定し、クラウドの利用やデジタル資料利用時の著作権等について学ぶことができた。 ○海外の日本人学校とZoomを使った遠隔授業や、Google chatやclassroom使った学習のまとめの交流を行うことができた △指導者のICT活用能力向上のためにも校務でのクラウド利用の場を広げていく必要がある。	- ICTの活用はこれから必要なことなので進めてほしい。 - YouTubeなどの視聴が多くなったことが言葉遣いなどの乱暴さにつながらないかが心配である。
次年度に向けた改善の方向性	- 非認知能力を生かした主体的な学習活動や探究的な学びの場を設定することで、学びを自己調整する力を高める。 - 特別支援教育と人権教育を充実させ、理解教育を進めることで、児童の心理的安全性を高める。 - 教職員の人権感覚を高め、人権学習を柱としたより良い人間関係づくりの取組を進める。 - 発達支持的生徒指導の機能を働かせ、児童の主体的な活動の場を生み出せるよう行事・取組を工夫する。 - 認知能力と非認知能力を一体的に育成する研究成果を大切に重点研究を充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める。 - 基礎的・基本的な内容の定着を図り、学力課題の克服を目指す。			地域と連携した行事や学習を、今後も大切にしてほしい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立丹後小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
教育目標(丹後学園共通) 「夢と希望と創造性あふれる豊かな心を持ち、未来に向けて主体的に生きる子どもの育成」 <目指す学校像> 1 よく考え学ぶ学校 2 友だちと仲良くする学校 3 最後まで粘り強く努力する学校 4 家庭・地域のつながりを生かした学校		○研究推進部を中心に、全学年での研究授業・校内研修会を行うなど授業改善に向けて全教職員で取り組めた。 ○授業に生かす ICT 機器の有効な使い方の研究や、オンラインによるタブレットの持ち帰り学習の充実が図れた。 △特別支援教育部を中心に通常学級含めた支援を要する児童への支援に努めてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。 △教育相談部を中心に不登校の未然防止や解消に努力を重ねてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。		・再配置6年目となる丹後小学校が、安定した学校運営ができるように教職員全員でベクトルを合わせて取り組む。 ・一方的に「させる」のではなく、子どもたち、自らが作り上げるようにするために、「支える」指導を大切にする。 ・「探究的な学び」や ICT を効果的に活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実を図る。	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、諸計画及び各学園の重点等、保幼小中一貫教育の基盤として	教育課程 学習指導	・「自ら学び、認め合い、高め合う児童の育成」を目指して、教科の指導と生徒指導が一体化させた授業づくりを進める。 ・「探究的な学び」の充実を図るため、校内研修・研究授業等を効果的に実施する。 ・ICT を効果的に活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図る。 ・学力充実部を中心に、家庭学習の見直しを図り、確かな学力の育成を目指す。		○研究推進部を中心に、「探究的な学び」の推進に力を入れた。全学年で研究授業を行うなど、確かな学力の育成に向けて全教職員で取り組めた。 ○ICT を効果的に活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図った。 △引き続き、確かな学力の育成に向けて取組を推進する。	・全体として、学校が大変落ち着いている。 ・授業が以前と全然違ってきている。講義型でなく、それぞれの子どもたちが色々な取組方をしている。先生方も大変だと思う。
	生徒指導	・教師が児童の良さを、また児童同士がお互いの良さを学級活動や多様な異年齢集団での活動の中で、意識して伝えることで自己肯定感を高め、明るく積極的な態度を促進させる。 ・いじめ防止に向けて、生徒指導部を中心にアンテナを高くはり、情報を共有する中で、組織的に取組を進める。 ・不登校の解消・未然防止のために、教育相談部を中心に丁寧なアセスメントや個に応じた支援を組織的にチームで行う。		○「安心・安全な学校づくり」を大切に、一方的に「させる」のではなく、子どもたち自らが作り上げるようにするために、「支える」ことを大切にする指導を全教職員で進めた。 △教育相談部と生徒指導部を中心に不登校やいじめの未然防止等に努力を重ねてきたが、引き続き組織的に取り組む必要がある。	・先生方ばかりに教育を任せすぎていると思う。もっと家庭で保護者がしつけなどを含めてしっかりと子どもと向き合うべきだと思う。

健康（体育）・安全	・全校的な体力にかかわる取組の充実と積極的な児童への指導を行い、学校を休まない強い体をつくる。 ・困難なことにも粘り強く挑戦していこうとする態度を育成する。	・運動会やマラソン大会、大縄大会等の行事と絡めながら期間を決め、体育の授業と連動させるなど、計画的に体力向上の取組を全校で実施する。 ・体力テストの分析を行い、指導に生かす。 ・学級、学校での取組において個々のめざす目標を発達段階に応じて明確にしなが、ねばり強く挑戦する態度を高める。	○運動会やマラソン大会、小学校駅伝大会、大縄発表会等を実施することができ、児童の力をつける取組になった。 ○「保健だより」、「給食室だより」、HP等を活用して、情報発信に心がけ、家庭との連携を図った。 ○自転車教室を実施し、安全の意識を高めた。	・色々な取組が実施でき、充実した取組になって良かった。 ・放課後など、交通面で危ないと思うところも時々ある。
危機管理	・3つの安全（生活・交通・災害）を大切にし、安心して安全な学校生活を送らせる。	・登下校時の立ち番、にこにこカーの運行、学校支援ボランティアとの連携等により安全な登下校につなげる。 ・交通安全教室の充実や警察等との連携を含めた安全指導の徹底を図る。 ・校内の危険箇所点検を行い、適宜、修繕などを行うことで教育環境を整える。 ・感染症の予防対策を徹底し、児童が安心して学校生活が送れるようにする。	○登下校時等に、学校支援ボランティアとの連携や立ち番、挨拶・登校指導等を行う事により、交通事故の発生等を抑えることができた。 ○危険箇所、登下校の安全に関わる指導は、教職員で共有化し全校集会、学級内で指導を行い、けが防止につなげた。 △校内の危険箇所の点検を行い修繕に努めたが、塩害による施設の劣化が激しく、修繕が追い付かない状況である。	・朝の挨拶は、よくしてくれる所と全然してくれない所の差がある。 ・今後も地域と学校が色々な所で連携していければよい。 ・もっと子どもたちとも色々な話が出来たら良いと思う。
開かれた学校づくり	・丁寧で分かりやすいタイムリーな情報発信を行う。 ・PTA・地域の関係諸機関等と連携した取組を強化する。 ・地域の人材、学校支援ボランティア等、外部人材の積極的な活用を図る。	・学校便り、学級通信、ホームページ等により学校の取組や様子をタイムリーに積極的に発信する。 ・PTAをはじめ関係諸機関等との連絡を密に取り、協力を得る。 ・地域の人材、学校支援ボランティア等、外部人材の積極的な活用を図り、教育活動の活性化と充実を図る。 ・読み聞かせボランティア・図書館指導員により、読書への興味を高め本好きな児童を増やす。	○学校便り、学級通信、ホームページの発信等により学校の取組や様子をタイムリーに発信する事ができた。 ○PTA本部を中心に、PTA活動を大変積極的に行っていただき、会員や児童にとっても有意義であった。 ○学校支援ボランティア等、地域人材を積極的に活用し、学習効果をあげることができた。	・PTAとして楽しく活動ができた。「継続は力なり」で、今後も子どもたちと積極的にかかわっていきたい。 ・今後も地域の一員として、色々な場面で見守っていきたい。
次年度に向けた改善の方向性	・「安心・安全な学級・学校づくり」を大切にする。 ・「自ら学び、認め合い、高め合う児童の育成」を目指して、教科の指導と生徒指導が一体化させた授業づくりを更に進める。 ・「探究的な学び」やICTを効果的に活用した「個別最適な学び」「協働的な学び」の更なる充実を図る。			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立宇川小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
夢と希望と創造性あふれる豊かな心をもち、 未来に向けて主体的に生きる子どもの育成 ○目指す子ども像 （1）言葉で伝え合い、主体的に学ぶ子(知) （2）自分を大切にし、人を思いやれる子(徳) （3）ねばり強く身体を鍛える子(体)		○極小規模校の強みである一人ひとりに目配り・気配りのできる温かみのある風土の中で、「全教職員で全児童の教育を推進する」ことができた。 ○国語科を重点教科とし、主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業研究を、校内授業研究と丹後学園授業研究会を連動させながら推進できた。校内だけでなく学園全体が同一テーマで研究実践をすすめられたことは、大きな成果と言える。更に毎年行なっている学力向上の取組を確実に実施することで、学校全体の学力の底上げを図ることができた。 △素直で心の穏やかな児童の育成が進む一方、社会性が育ちにくい、コミュニケーション能力に乏しいなどの課題が残る。学力についても引き続き大きな課題として認識し、希望進路実現のための基礎学力の向上に取り組む必要がある。個別最適な学びの実現により、誰もがわかる喜びやできる楽しさを味わうことのできる授業改善を追求する。		◇学習指導要領の目指す学力の伸長を目指し、一斉指導型から個別最適な学びへのシフトを加速させる。探求型学習を多く取り入れることで、児童がより主体的に学習課題に向かうような授業改善を進める。 ◇学習端末の効果的な活用を定借させ、未来に生きる力の基盤づくりの取組を行う。 ◇学習の質の変換に合わせた家庭学習の在り方について研究・実践を進める。 ◇児童が安全で安心して過ごせる学級(学校)運営に努める。(いじめの解消、不登校の未然防止、人間関係、環境面) ◇児童が主役となって活躍できる特別活動や異年齢活動などを仕組み、主体性・積極性を育むと共に、互いを認め尊重し合える。教育活動を推進する。 ◇へき地・小規模校の特性を生かし、地域と連携した特色ある学校づくりを行う。					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校 教育 指導 の 重点 、 保 幼 小 中 一 貫 教 育 の 諸 計 画 及 び 各 学 園 の 重点 等 を 基 盤 と して	教育課程	1 「できる喜び」「わかる楽しさ」を実感できる授業、主体的・対話的で深い学びを実現する授業を目指す、学力の定着・向上を目指す。		1 授業研究を全学級で実施し、授業の質的変換を狙う授業改善を推進する。児童自らが学習者となり対話と表現にあふれた授業づくりをすすめる。児童一人ひとりの確かな学力を育成するための取組を推進する。		○児童が主体的な学び手となるような授業改善に全担任が取り組み研究授業を行うことで全校的な授業改善を推進した。学習端末の利活用を推進できるよう全校的にタイピング練習に取り組んだり家庭学習に取り入れたりした。現代的な学校課題に対応できる動きを組織的に展開できた。基礎学力の定着・向上の取組を継続して取り組んだ。(かがやきノート、計算チャレンジ等)		児童数減少のため、様々な課題があるが、少ないからこそできる活動者指導が見られた。教科学習では、授業時間内に理解の遅い児童を把握し、すぐに指導・支援をして次に進めることができるのは、少人数だからこそだと感じた。	
	学習指導	2 探究的な学びの充実による学習意欲の向上と基礎学力の定着、個別最適な学びと協働的な学びの両立を目指す。 3 学習端末の効果的な活用方法について研究する。		2 個々の学力課題を丁寧に分析し、児童の困り感に寄り添った指導を推進する。 3 読書活動、家庭学習の質の向上、ドリルタイムの充実などを図り、学力のベースづくりを継続的に行う。 4 家庭学習の在り方について質的変換を目指した取組を進める。		△家庭学習の質的転換を図った。やらされる宿題から自ら取り組む家庭学習へシフトすることを目指し、児童の家庭学習への意識改革を進めたが、まだ道半ばである。		授業において積極的に学ぶ姿勢が見られた。自ら取り組んでいる様子が素晴らしいと思えた。	

生徒指導	1 自己有用感と自己肯定感の醸成を図り、進んで学校生活に関わろうとする態度を育成する。 2 人権意識の高揚と規範意識の醸成を目指す。 3 いじめの未然防止 4 個に応じた支援の充実による状況改善を推進する。	1 特別活動や異年齢集団活動を通して、互いを認め合うことのできる望ましい人間関係を構築させる。 2 いじめ防止の取組を、年間を通じて行うことで、いじめの早期発見・解消と安心できる友達関係を構築させる。 3 少人数学級ならではの学級経営と全職員で全児童を見守ることを通して、丁寧なアセスメントと個に応じた支援による不登校の未然防止に努める。	○児童の主体性・発想を大切にすること、一人ひとりが役割を持ち活躍できること、全児童で活動することを基本方針としてチーム活動や児童会の取組などを推進することで、みんなが笑顔になる仲のよい児童集団を形成できた。 ○いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、アンケート結果や児童の小さな変化等から気になることを確認し対応を協議することで安心安全な学校づくりが進められた。	各学年や全校の取組で一人ひとりが大切にされているなど感じた。特に学習発表会では、それぞれが大役を与えられ鍛えられ力をつけ、内容の濃い発表だった。 学年を超えた関わりも多くあり、コミュニケーション能力の育成につながると思う。
健康（体育）・安全	1 体力の向上と基本的な生活習慣づくり 2 安全に生活するための知識と判断力を身につけさせる。 3 将来の夢や希望に向かって何事にも粘り強く取り組むことのできるころとからだを育てる。	1 体育科の授業や体力づくりの取組、外遊びの奨励を行い、健康に過ごせる体力づくりを行い、体力の向上を図る。また望ましい生活習慣を身につけさせる。 2 日常の学校生活の中で健康に関する取組を継続して行い、健康に関する知識と判断力を身につけさせる。 3 キャリアパスポートなどの活用で、自分の将来に目を向けさせ、目標に向かって日々努力する大切さに気づかせる。	○大勢でのスポーツを楽しむ、互いに高め合うことができるよう合同体育を実施した。全校的な取組として5分間走、短縄跳び等を実施し基礎体力を向上させた。 ○計画的に養護教諭の健康指導や栄養教諭による食育指導を実施して、健康な体作り生活習慣について意識を高めることができた ○『夢』をテーマにした朝会講話などを通して将来の仕事やなりたい自分について意識化を図り全校みんなで考えることができた。	自宅ではできない取組を学校で行うことで、を動かすことの楽しさを学校生活の中で実感できていると感じた。 将来の夢や進路について児童が具体的に夢を描いていた。様々な取組の中で縦横のつながりを大事にしながら日々学べていた。
特別支援教育	1 教育的ニーズや特性に応じた指導・支援を計画的・組織的に推進する。	1 校内教育支援委員会を中心にした組織的で継続的な支援体制と見守り活動を、関係機関との連携を密に取りながら行う。	○SC・SSWとの連携や家庭との懇談など組織的対応を推進した。支援学校と連携した校内研修などで理解教育を推進できた。	児童に応じた関わりや声掛けなどがしっかり配慮されていた。
特色ある学校づくり	1 へき地小規模校の特性を生かし地域と連携した教育活動を進め、未来を展望できる児童を育成する。	1 総合的な学習の時間や生活科の授業などに地域教材・地域人材などを活用した学習を取り入れる。地域社会との交流や情報発信に努める。	○総合的な学習の時間や生活科の授業で地域を知る学習や広く知ってもらうための活動を、補助金を活用し進めてきた。学習発表会で発表したり ICT も活用したりした。	校内だけでなく地域へ出て学ぶことは子どもの人数が多くてはできない。小規模校だからこそできる。
次年度に向けた改善の方向性	・児童が学び手となり主体的に学習を進める授業への質的転換の研究、さらに安定した学校（学級）運営により、学力向上や生きる力の育成と学習端末の効果的な利活用による新しい教育手法への対応、少人数学級のよさを生かした学習活動をより一層推進する。 ・コミュニケーション能力・社会性の向上、非認知能力を高め、自己肯定感を持てる教育活動を構築する。 ・地域学習をこれまで以上に取り入れることで、故郷に愛着をもち、未来を創造する児童を育成する。			少人数化が進む中で、学校・保護者だけでなく地域の方々に広く協力を呼びかけたり一緒に取り組んだりするとよいと思う。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立弥栄小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)
「ふるさとを愛し、主体的に学び、心豊かで、自他を大切にしてくましく生き抜く子どもの育成」		○学力検査結果を分析し、課題を中心に教員全体で共通理解を図り、学力補充の取組につなげた。 ○子どもの意見を積極的に取り入れる異年齢の集団活動を積極的に行うことで、多くの教員が子どもの発達を支える働きかけの重要性を認識することができた。 ○体育の授業などでタブレットを活用することで、自己の運動技術を改善する機会が増えた。 ○児童課題に対して、家庭環境・生育歴等からアプローチすることにより、児童の多様性を尊重した指導を行えた。		1 仲間ともに学び合える子どもの育成 2 発達支持的生徒指導 3 健やかな身体の育成 4 特別支援教育の充実 5 人権意識の高揚
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、 諸計画及び各学園の重点等 を基盤として	教育課程 学習指導	①学力調査における質問紙調査と教科結果の関連性・学力結果の推移等を分析して焦点化し、効果的な活用方法を検討する。 ②総合的な学習の時間(丹後学)を中心に、個々の児童の疑問や解決したい課題について、個別・協働的な学習を通して探究的に課題を解決する授業改善を進める。 ③保幼小中一貫教育の校種間接続期における学びの一貫性・連続性のある指導・支援の方法について校種間での連携・推進を図る。 ④児童がICT端末を日常的に活用できる環境づくりと並行してICT端末を効果的な学び・学習のツールとしての活用、個別最適な学びにつながる、家庭学習における活用についての推進を図る。	○学力調査における質問紙調査と教科・学力の結果と関連性についての研究・検など活用方法の検討ができ、学力向上の取組につなげられた。 ○総合的な学習の時間を中心に探究的な学びにつながる研究ができた。 ○保幼小中一貫教育に推進について、こども園との門を開放し、1年生と園児の交流が進んだ。また、スタートカリキュラムの見直し、検討ができた。 △ICTを効果的に活用した授業、家庭学習など更に工夫が必要	○総合的な学習の時間(丹後学)において、自分の地域に興味や関心を持ち、自分たちが知れることで更に自分の地域の良さを知る事につながる。更に進めてほしい。 ○保幼小中一貫教育を生かした学力向上に期待する。
	生徒指導	①発達支持的生徒指導を基盤に心理的安全性が担保された学級経営(学習指導・特別活動)の推進を図る。 ②日常的な児童の実態交流、情報共有を行い、児童の心・行動の変化を共有し、問題が複雑かつ困難になる前に、組織的な支援につなげる。 ③保護者面談・家庭訪問等を積極的に行い、信頼関係を築き、問題行動の早期発見・早期対応・早期解決につなげる。 ④気になる児童については、積極的にアセスメントを行い、なぜそのような状態に至ったのか、児童の示す行動や背景、要因、家庭環境など情報を収集し、多角的な視点からの分析を通して、明らかにする。	○早い段階での保護者面談の実施、情報共有等を行うことで学校での支援が充実した。 ○子どもの内面理解を進めることができた。 △児童の心理的安全性を更に担保するために学級経営の充実や個々の児童の内面理解、家庭との連携を更に進める必要がある。	○気になる児童だけでなく、全ての児童について同じように見て行ってほしい。 ○子どもたちが安心して学べる環境づくりを更に進めてほしい。

健康（体育）・安全	1 体力づくりの推進 2 健康課題（危機対応を含む）への対応	①自己のめあてや目的をもって「やってみよう」という楽しく前向きな気持ちが生まれる体育授業の推進を図る。 ②新体力テスト結果の分析から本校における課題を把握し、課題となる運動能力を高めるための取組の推進を図る。 ③地元産食材や郷土食に係る学校給食を切り口に、食に関する知識や体験を広げ、食の選択や判断ができる力を育成するための取組の推進を図る。 ④地震や自然災害に対す対応力の育成及び向上を図るため、避難訓練の見直しを行う。	○体育的行事や日々の授業において、自己の目標を持つことで、主体的に粘り強く運動に取り組める児童が増えた。 ○新体力テストの分析をもとに、本校児童の体力課題の改善に向けた取組を行った。 ○状況に応じて臨機応変に行動できる力を育成するための避難訓練計画の作成ができた。 △地元の食材・生産者と学校給食との関連から学ぶ実践的な食の指導が必要である。	○行事が精選される中で以前の様に子ども達が目標を持って行事などに取り組める様に精選や縮減のみにとらわれないように整理・工夫に取り組んでほしい。 ○危機管理について、良い意味での「災害に対する怖さ」についても教えていく必要があると思う。
特別支援教育	1 切れ目ない支援の充実 2 バランスの良い集団指導と個別支援の充実	①個別の指導計画、個別の教育支援計画を活用し、学校と保護者が将来を見据え、協働して児童を支えるための指導・支援を進めるとともに、学級担任以外の教員等と共通理解を行い、支援に係る効果的なツールとして活用を図る。 ②日常的に通常学級担任等と通級指導担当と情報を共有し、通級による指導を通常学級での指導に生かす視点を持つ。 ③関係分掌と連携を密に、未然防止の観点から個別支援と集団指導・支援の2つの視点での対応を進めるとともに、発達障害等について考慮すべき事象に関しては、きっかけや前後関係も含めてその要因を分析し、児童の適切な行動変容へとつなげる。	○特別支援学級に在籍する児童を中心に、個別の指導計画、個別の教育支援計画、アセスメントをもとに学校と保護者が学習や取組みについて共有することができた。 ○通級指導担当者と学級担任が常に情報共有を行うことで、通級指導教室と学級が連携した指導を行うことができた。 △個々の児童の事象に対する背景や家庭環境などの情報分析は進んだが、効果的な支援や行動変容にいかんにかかっているのが課題である。	○特別支援学級の在籍児童だけでなく、通常学級の児童についても丁寧な情報共有を進め、児童一人ひとりの力を更に伸ばせるように校内での連携を進めてほしい。
人権教育	教職員の人権意識の高揚	①保護者の生活実態並びに家庭の背景など社会状況や多様性など現状を具体的に捉える中で、教職員としての人権感覚を磨く。	○子どもの内面や保護者への働きかけの必要性について、教育相談部や特別支援教育部からの積極的な発信や子どもの小さな変化を捉え、共有する雰囲気や体制整備が進み、児童の多様性や家庭の状況を考慮した指導や支援が見られるようになった。	○先生方の言動が子どもたちに与える影響は大きい、出来事だけでなく、その背景も見た指導・支援をお願いします。
次年度に向けた改善の方向性	①保幼小中一貫教育を活用して、園・小・中の連携、継続的な指導を進める。 ②学校が子どもにとって安心できる場所、安全な場所となるよう、誰もが安心して活動できる、話せる学校風土の確立 ③自己マネジメント力の向上を図り、個々の教職員の資質能力の向上を図る（人材育成）			○改善に向けて方向性が具体的になるよう、お願いする。

(別紙様式3) 令和6年度学校評価学校関係者評価報告

学校名〔 京丹後市立久美浜小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)					
教育目標【久美浜学園全体】 「ふるさとを愛し 意欲的に学び やさしい心をもち 根気強く努力する子どもの育成」 目指す子ども像【久美浜学園全体】 (1) 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども(知) (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心を持つ子ども(徳) (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで、協力して取り組む子ども(体) 重点目標【久美浜学園全体】 「意欲的に生活・学習に取り組む子どもの育成」 ～ 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 ～ 指導の重点『学力の向上』 ①基礎・基本の徹底②主体的に学ぶ力の伸長 ③家庭学習時間の確保 校訓「一生懸命」を意識した教育活動の推進 指導キーワード【「子ども主体」】の教育の推進		○成果 目指す児童像の各学級、事業への浸透や具現化が進んだ。 教職員の強みを生かした協働性のUP ・コミュニケーションが取れ、助け合える働き方の見直し ・下校早める、行事の精選等働き方が見直される。 研究推進の動きにより、児童の主体性が向上した。 ◇改善点 学校業務運営上の改善点 業務推進上、「何のための取組」なのか明確化にさせる。 事業の主体となる手立てを考え、支援する。 取組の途中で交流し分掌の仕事を一人で抱えない。 担当一人に任せない。 校外研修を伝達する。 早めに計画準備し、近隣で声を掛け合う。 会議や研究会でグループ協議を入れ共通理解を図る。 「学校が楽しい」との回答児童の減少。 不登校傾向児童が3年続きゼロが途絶えた。		目指す児童像【久美浜小学校】 「つながり、たくましい 久美っ子主役」学校づくり ～将来の社会的自立へ～ 特色ある学校、を目指す。 ①「主体的・意欲的に学習する児童へ」 ＝「探究的な学び」「主体的な学び」 ・「わかった喜び」を大切にする授業づくり ②「地域とともにある学校」づくり ・子どもの元気を地域に ・学校、社会教育、地域との連携、協働 ・「久美浜を支える人づくり」の取組 ③本物に触れ、出逢う「地域に開かれた教育課程」 ・外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験 等 ・ICT(電子黒板、タブレット等)を効果的に活用した授業づくり ④研究推進のテーマ「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」 ～自分・人・地域がつながり、かかわる～教育活動の推進 ・京都府小学校教育研究会生活科指定校として総合と共に研究を推進し児童の主体性を育む ・リーディングDXスクール事業の教育実践を生かす ⑤働き方見直しを日々見つめ、教職員のウェルビーイングと子どもと向き合う時間を確保する。					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題(自己評価)		学校関係者評価	
諸計画及び各学園の重点等 を基盤として	教育課程 学習指導	生活科・総合を核とし他教科とも教育課程の編成 ①「主体的に学習する児童へ」＝「探究的な学び」 ②いきいきと自分の思いを表現する児童へ		「主体的・意欲的に学習する児童へ」 ①生活科・総合的な学習の時間の研究推進の動きで「探究的な学び」を通し、児童に思考力判断力表現力を培う学習内容を仕組む。 ②昨年度の実践を継承しICT(タブレット)の活用等を関連付けた研究を目指す ③「本物に触れ、出逢う【社会に開かれた教育課程】」 外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験 等 ④地域の人的物的資源を有効に活用させていただく。クラブ活動、授業の外部講師、読書支援ボランティア等		○2学期、30名強の外部講師にお世話になり児童にとって本物に触れる機会となった。 ○生活科・総合の研究推進で授業改善を図り教員の実践が大いに進んだ。 ○人的資源の有効活用で「本物に触れる教育」を推進し児童の心に響く実践が進み、子ども達の目の輝きが多く見られ豊かな心を育んだ。		・市域、学園内で実践を広く発信されている。思考力の育成、深い学びのために、タブレットの良さ・タブレット以外の良さを吟味して選択していくことも求められる。(タブレットのルール、モラルをしっかりと教え時間をしっかりと守らないと、視力も落ちる。・地域と連携し、子ども達に還元し創意工夫されていることが分かる。 ・学習発表会で、自ら意欲的に発表する姿に感動した。郷土愛につながっている。	
	生徒指導	豊かな人間関係を築き、学び合い、励まし合い、支え合う。 丁寧なアセスメントと不登校の未然防止に係る体制の確立を図る。		生徒指導4つの視点を土台とした学級経営指導の重点化～「学び高め合う授業」と「支え認め合う学級」 ①生徒指導の4視点を生かした学級経営と授業作り ②児童の居場所・絆づくり(集団、体験活動) ③不登校傾向、いじめ等を全校一致した組織的指導 ④特性、学習進度に応じた個別最適な学びの場作り ⑤特性のある児童と家庭とのきめ細かな連携を組織的な進行管理のもとで進める。 ⑥久美っ子ルールの生徒指導部を中心に組織的な進行管理		○学園の動きと連動し生徒指導の4視点を意識した動きで児童の主体的な児童会活動が一層進んだ。○保護者、地域との連携によるあいさつを身に付けることが増えた。○不登校傾向ゼロに向け今後も一層家庭と連携していく。		・子どもが主体となり行事等を通して支え認め合う学級作りが進んでいるように思う。 ・挨拶の声が数年大きいと聞いた。家や会社でもない大人が多いため働きかけてはどうか。 ・安心安全のため除雪の依頼をしてみるのも良いと思う。	

健康（体育）・安全	何事も最後まであきらめずにやり通すたくましい強い心を育てる。	目指す児童「たくましい 久美っ子」につながる具体策 ① 校訓「一生懸命」を意識した教育活動を推進する。掃除を協力してする子どもを育てる。 ・根気強く、一つのことを最後まで協力して行う態度を育てる。 例 朝マラソン、縄跳び、休み時間遊び ② 日常生活を当たり前にやり切る子どもを育てる。 5分前行動や「あいすつくろうよ」：生指上の行動の本校キーワード」の具現化を一層図る。 ・基本的な生活習慣、家庭学習、日常的な学校生活等 ③ 運動に親しみ、体力の向上を図る。（朝マラソン等） ④ 家庭と連携し、基本的な生活習慣、望ましい食習慣の育成を図る。	○マラソン練習、大会からたくましく頑張ろうとしている姿や掃除に懸命に取り組む姿から伝統的な本校の強みが生かされた。 ○安心安全な環境作りを図った（事故災害なし） △家庭での生活習慣の数値が例年低いため家庭との連携が必要である。	・基礎体力をつけてほしい。走り方、手の振り方など、基礎的な技能を身につけていくために、行事や取り組みだけでなく、日々の体育を大事にしてほしい。生涯スポーツの視点で運動のことを考えていく。 ・マラソン大会や運動面、今後大切にしてほしい、気持ちもある。 ・久美浜の子らしく一生懸命に運動や勉強に取り組む様子がみられた。登下校については見守り隊の取組もあり、安心する。
開かれた学校づくり	社会に開かれた教育課程の実現に向けたカリキュラムマネジメントの推進を図り「地域とともに育つ学校」を目指す。	特色ある学校「地域とともにある学校」づくり本物に触れ、出逢う「地域に開かれた教育課程」 ① 子どもの元気を地域に発信する ② 学園学校運営協議会、社会教育、地域との連携、協働（PTA、公民館、民生委員、区 等） ③ 「久美浜を支える人づくり」の取組 ④ 情報を関係機関、家庭・地域に適切に提供し信頼される学校づくり HP、便り等 ⑤ 外部の方の支援、出前授業、本物にふれる体験 等 ・ICT（電子黒板、タブレット等）を効果的に活用した授業づくり	○研究指定の実践から「地域をテーマ」にしていることで自ずと「地域とともにある学校作り」が年間を通し実践できた。 ○自治会、地域施設、警察との連携が一層進み、児童にとって豊かな心を育む機会になった。 △引き続き継承する。	・久美浜小では地域教材をふんだんに活用され、取り組むのはすごく良い。久美浜を支える人であってほしい。地域との関わりを多く持っておられ感謝している。 ・地域資源をどんどん活用していただいたら良い。協力もしたい。
特色ある学校づくり	研究推進のテーマ「生き生きと表現し、主体的に学習する子どもを育成する生活科の創造」～自分・人・地域がつながり、かかわる～2 年次目の一層の推進 京都府小学校教育研究会生活科指定校として市域・府域・全国へ授業作りの発信 ・リーディング DX スクール事業の効果的な教育実践の継承	① 生活科指定 2 年次として、総合的な学習の時間と共により授業力を磨き、探究的な学びの深化を図る。 ② 2 年次研究協議会での府市学園への発信 ③ リーディング DX スクール事業を生かした有効活用 ④ HP の更新を定期的に行う。また、授業参観、PTA 会議、懇談会等で積極的に情報の公開を行う。 ⑤ 児童主体の企画・運営を率先し取り組ませる。 ⑥ ICT 活用を今まで以上に推進させる。児童朝会、保護者アンケート、校務の ICT 化による働き方見直し 等 ⑦ 不登校傾向のゼロ維持のスキルを継続発展	○研究推進の動きにより教員の授業スタイルが変化し、結果子ども達自らがより主体的に課題を解決しようとする動きが活発に見られた。 ○第 2 次研究協議会により市域、学園内に広く実践を発信でき指定校の役割を若干果たすことができた。 △今後も家庭との連携を丁寧に進める。	・学習の評価って子ども達のやる気につながるようにするのは難しい。 ・ふるさと丹後を愛し、親しみを持ってくれる子ども達を育てていただき感謝している。地域から学ぶことはとても重要だと考える。継続し進めてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	～令和 7 年度～ 目指す児童に向けて 私たち教職員は・・・ 生活・総合の研究を一層進め、児童主体で「つながり、たくましい、さらなる、久美っ子主役」の教育を目指し、将来の社会的自立を育む。 - 子ども主体の授業観へ 教師が「教える」授業から学習者が「学び取る」授業へ - 地域・保護者の支えを生かした教育活動（「本物に触れ、出会う教育課程」） - 安定した学級経営：生徒指導の 4 つの視点を生かす - 特性を踏まえた支援：個別最適な学び 指導の個別化 + 学習の個性化 - 斬新で、支え・相談し合える風通しの良い職員室 - ICT 活用をできる学年・できる教科等今まで以上：子ども主体 授業改善 - 異年齢活動の発展継承で子ども主体の児童会活動：チーム活動 等 - 校訓「一生懸命」を意識した教育活動			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立高龍小学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点 (短期経営目標)
意欲的に生活・学習に取り組むたくましい子どもの育成 — 子どもの実態や系統性を踏まえた指導 — 1 意欲的に質の高い学力を身に付けようとする子ども 2 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子ども 3 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子ども ※ 保護者・地域に信頼される学校		○ 国語科の授業研究について、支援事業も取り入れながら研修を進めることができたので、授業改善に対する意欲が高まった。 ○ 高学年がモデルとなりうる姿を見せることで、異年齢活動が児童自らの力で進められるようになった。児童の主体的な活動の幅が広がった。 ○ 児童に付ける力を明確にした取組・行事を作ることのできる基盤が固まってきた。 △ 児童事象（生指事象・不登校など）に関して、保護者との連携の不十分さ、初期対応の遅れなどから、学校に対する不信感を大きくしてしまった。		授業づくりと学級づくりを一体的に進めることにより、学級経営の基盤を固める。3つの目ざす子ども像として、各行事や中期学校目標に絡ませ、児童・教職員・保護者への意識化を進める。 《知》自分なりの考えをもつ～授業づくり 《徳》言葉を大切にすること～学級づくり 《体》ねばり強く取り組む～体力づくり
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題 (自己評価)	学校関係者評価
学校教育諸計画及び各学園の重点、保幼小中一貫教育の基盤として	教育課程学習指導 ①言葉が大切にされる教育活動により、考えることの習慣化・表現する力の育成を図る。 ②個に応じた指導・学力補習体制を整備し、基礎・基本の定着を図る。 ③主体的に学習に向かう意欲、対話する力、学習したことを活かす実践力を伸ばす。	①国語科を重点とし「言葉を知る・考える・伝える力」を高める授業研究を行う。学園2校の授業実践から積極的に学ぶ。 ②朝ドリル、放課後補習を設定し、全校体制で基礎学力の定着を図る。また、学習支援ボランティア等を有効に活用する。 ③ICTを積極的に活用しながら、課題解決に見通しを持ったり、結果を振り返ったりして、主体性・話し合う力・既習内容を活かす力を伸ばす授業づくりを推進する。	児童アンケート「授業では、学習計画を立て、見通しをもって、粘り強く学習している」肯定的回答→85.3% 「授業では、自分の考えを言ったり、友達の考えを聞いたりしている」肯定的回答→91.3% 「授業の最後に自分の学習内容を振り返り、学習のめあてが達成できたかどうかを考えている」肯定的回答→77.3% ○久美浜小の授業公開・事後研から、児童が主体的に学習を進めていく授業の在り方について多くの学びを得ることができた。(校内で参観後のミニ研修を行った) ○授業や朝のドリル学習で、タブレット活用による自分に合った課題に取り組む姿が多く見られた。 ○単元構想を重視した「着地点を明確に示すことで学習意欲を高める」実践が各担任に定着しつつある。 △放課後補習の職員体制や時間確保が難しいため、ドリルタイムの工夫改善により新たな方策を探っていく必要がある。	・積極的に学校行事や授業公開してもらるので、子ども達や学校の様子を見られるようになり、ありがたい。 ・タブレットの活用が進んできて授業の内容や指導も変わってきていると思うが、引き続き、よりよい使い方が身に付くよう指導をお願いしたい。

生徒指導	①自分や友達の長所・短所を認め合い、自己肯定感を高める。 ②友達の名前を正しく呼び、場に応じた言葉づかいによって「思いやり」の心を育成する。 ③学校生活で配慮を必要とする児童への適切な支援を行う。	①児童の良さや頑張り、弱さも受け止められる学級づくりを進め、一人一人の児童の自己肯定感、学校や学級での安心感につなげる。 ②月全校目標を設定し、児童に目的や見通しのある学校生活を送らせる。また、「考えて行動する」場面を増やす中で、目標設定を子ども達の手になねられるようにする。 ③正しい言葉、やさしい言葉かけをしたりすることで、児童相互のつながりを深める。 ④不登校児童については、ケースに応じて情報共有と対応を組織的な動きにする。児童や保護者が見通しを持ったり意欲が高まったりするような働きかけを継続する。	児童アンケート 「人の役に立つ人間になりたいと思う」肯定的回答→96.0% 「学校や社会のきまりを守っている」肯定的回答→93.3% 「人が困っている時は、進んで助けている」肯定的回答→93.3% ○児童に考えさせる指導は、全体的な方針になりつつある。 ○高学年のリーダー性を伸ばす、学年を越えたつながりを深める取組を計画的に行うことで、異年齢集団での活動が活発になった。(児童に実感としてある) △生徒指導・特別活動・学級指導がつながった指導には至らず、自発性を高めるよりも制止性の強い指導になりがちである。 ○△不登校への指導支援は、丁寧な連携と組織的対応が定着し、一定の成果を上げている。保護者との信頼関係は強まっている。一方で、一進一退の状況も見られる。	・学校に来た時や地域で出会ったときに、以前より元気にあいさつをする児童が増えたと感じている。行事の様子等からは、上級生、高学年を中心として落ち着いて整然とされておりよいと感じる。
健康（体育）・安全	①年間を通した家庭学習の充実、生活習慣改善の指導・支援を家庭と連携して推進する。 ②朝マラソンや朝縄跳びなどを継続して行い、体力づくりを進める。	①学園共通の家庭学習がんばり週間等の取組を活用し、家庭学習の習慣化、生活リズムの安定を図る。 ②学校生活における安心・安全への意識を高め、主体的に取り組もうとする意識を育てる。また、集団生活のマナーとして必要なことを指導する。	○体育部からの提案に基づき、体力づくりの取組（朝マラソン・朝縄跳び）に目標をもって参加する児童の姿が見られた。 ○「家庭学習がんばり週間」は、ねらいや具体的な取り組み方を学級で指導することで、意欲を高めることにつながっている。	・不登校について、学校はいろいろな手を尽くされていると思うが、子ども達が安心して学校へ来られるようさらに取組を進めてもらいたい。
(A) 危機管理	①日常的な情報共有を徹底し、早期発見・早期対応を徹底する。	①管理職が積極的に情報発信することで、報告・連絡・相談・確認を教職員に徹底する。気づいたことが情報共有できるシステムを根付かせる。指導の視点に安心安全を確保する意識を高める	○土砂災害による通学路変更、熊対策、酷暑対応、破損修理など、三者＋養護教諭＋事務＋用務員の連携と迅速な対応により、問題化させることなく改善することができた。 △老朽化に伴う施設整備は軽重を付け年次計画を立てて進めていく。	・夏の暑さやクマへの対応など心配は絶えない。引き続き、児童の健康、安全に気を配ってもらいたい。
(B) 情報活用能力 (ICT活用)	①タブレット活用について、アイデアやスキルを共有し、「みな同じように使える」を目指す。	①授業における具体的な活用について、ミニ研修等を行い、広める。 ②職員間の連絡ツールに位置付け、日常的に必需品として使い慣れていく。	○自主研修「アクティブタイム」を実施することができた。強制ではない自発的な学びの場として引き続き条件を揃えていく。 ○会議のペーパーレス化、日常連絡のタブレット利用など、教職員が日常使いする環境へと進んだ。	・タブレットを使った授業を参観させてもらった。児童が上手に使っている姿に感心した。学習がよりよく進む利用を進めてほしい。
次年度に向けた改善の方向性	2学期終盤よりスタートさせた「業務改善・授業改善プロジェクト」は、校内研修でも取り組んできて教職員周知のプロジェクトになっている。引き続き、次年度の学校経営（運営）方針の中に位置付けていく。今年度の課題から導き出すべきキーワードは3つある。①「児童目標設定システムの構築」：児童の声を吸い上げ、目標と活動を決め、全員で振り返り次へとつないでいくシステムを考え、定着を図る。②「心を開く特別活動の研究」：単発になりがちな異年齢活動を計画的に配置すること。その土台となる「伝える・受け取る・思いやり」を体験学習によって醸成していく。③「地域体験活動の充実」：3地区の地域コミュニティの活動は非常に盛んである。その力をお借りすること、発信していく場にしていくことを丹後学等と絡めながら進めていく。			・子どもの主体性と、先生方のある程度厳しい指導をバランスよくしてもらいたい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔京丹後市立かぶと山小学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
1 久美浜学園教育目標 「ふるさとを愛し、意欲的に学び、やさしい心をもち、根気強く努力する子どもの育成」 2 めざす児童像 (1) 意欲的に質の高い学力を身につけようとする子 (2) 自ら正しく判断、行動し、豊かな心をもつ子 (3) 心身を鍛え、粘り強く最後まで協力して取り組む子		1 探究的な学びの土台となる「安心・安定した学級経営」「基礎学力の定着」について、校内研修等を工夫し具体的な取組を進める。 2 「つながり」を視点とした教育活動を充実・定着させ、さらには保護者・地域・学園に広げる等、新たな取組の創造を目指す。 3 本校の課題である「不登校」の解消に向けて、①「つながり」を通した安心感の醸成、②「基礎学力」の定着、③教職員・児童・保護者との具体的な信頼関係づくり、④継続的な状況把握と具体的な見立て等に取り組んでいく。		「安心感の中で失敗しても挑戦できる」学校を目指して 1 「トライ＆エラー」できるための安心感を醸成する。 2 正しい価値が通る落ち着いた学級経営を大切にする。 3 探究的な学びを視点とした研究推進を行い、授業改善及び指導観の転換を目指す。 4 明確な目標をもち、具体性・計画性・合意性を意識し、組織や過程を活かした教育活動の推進を目指す。 5 指導観を学び合い、コミュニケーションを大切にする。	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、 保幼小中一貫教育の諸計画及び各学園の重点等を基盤として	教育課程 学習指導	1 探究的な学びに向けた授業づくり (1) 外部講師を招聘する等、校内研修を活性化し、目指す児童の姿や授業を共有する。 (2) 個や集団等、様々な学習形態の中で自分に合った学び方を選び、考え方を対話等で共有する学習活動に取り組む。 2 主体的な学びに向けた授業づくり (1) 自分事に捉える学習課題や単元ゴールを設定した授業づくりを推進する。 3 基礎基本の定着を図る取組の充実 (1) 初見問題への取組や異年齢での教え合い等、取組方法の工夫・改善を図る。 (2) ICTの効果的な活用や家庭学習の取組方法等の改善を目指す。		○単元ゴールを目指して、各児童が個人・ペア・グループでの学びを選択する等、主体的に学習に向かう授業づくりを進めることができた。 ○他学年とのつながりと学び直しをねらい、「つながりスタディ」を年間通じて取り組んだ。 ○各学級のタブレットの活用が浸透し、学習面・活動面等、様々な場面で活用が進んだ。 △家庭学習を含め、学習習慣の確立や自己調整力等を向上するための取組の検討を行う。	・タブレット中心の授業の組み立てで児童も使いこなしている。 ・児童の定着の差への指導、低学年での学習素地の定着を大切にしていきたい。
	生徒指導	1 安心と安定のある学級経営の充実 (1) 生徒指導の4視点(自己存在感・共感的人間関係・自己決定の場・安心安全な風土)を活かした学級経営を推進する。 (2) 肯定的評価や価値付けの積み上げにより、判断力の向上や認め合える集団づくりを目指す。 (3) 自分達で係活動を創造させることで、よりよい学級や生活を作り出す経験を積み重ね、自律に向けた土台づくりを行う。 2 望ましい人間関係を築く力の育成 (1) 様々な教育活動において、「つながり」を視点とした内容作りを行い、児童主体の取組を通して高学年のリーダー性や好ましい人間関係を育成する。 3 「いじめ」「不登校」等の未然防止に向けた日常的な指導及び相談活動の充実 (1) 日常的に児童の状況を把握し丁寧なアセスメントを行い、組織体制の中で見立てと方針を共有・確認し取り組む。 (2) 不登校の未然防止に向けて、SCやSSWの見立て等、専門的な観点を踏まえた具体的な取組を推進する。 (3) 保護者面談を積み上げ、方針や状況、見通しを共有し、家庭・学校双方で具体的な取組を積み上げる。		○児童の判断力を高める指導を大切にしてきた結果、大きな問題事象もなく、全体的に落ち着いた学校生活を送ることができた。 ○学びのパスポート質問紙「安心して学習できる」項目で、97.7%の児童が肯定的な回答をしており、安心感が醸成されていると考えられる。 ○各学級における係活動を児童に考え活動させることで、創造力や意欲を高める機会となった。 ○「ミニ運動会」「お弁当給食」等、児童相互の「つながり」に視点を当てた取組が、児童からの発想から創造されるなど、高学年のリーダー性や主体性が発揮する姿を多く見る事ができた。 △不登校や別室登校児童、保護者への支援・対応について、園所・中学校との連携を密にし、見立てや具体的な取組を検討していく必要がある。	・安心安定の学校づくりができており、落ち着いた雰囲気の中で児童が楽しんで活動できている。(保護者アンケートからも伺える。) ・人間関係の希薄さも取組によって、緩和されている。 ・不登校児童も特別視されない雰囲気づくりを大切にしていきたい。

健康（体育）・安全	1 規則正しい生活ができ、健康で安全な生活を送ることができる児童を育成する。	(1) かかわり合いを大切に体力づくりを行い、主体的で継続した取り組み態度を育む。 (2) SNS講習会や保健指導を年間に位置付け、また、年長児への指導も行うことで、メディアコントロールの力を身に付けさせ、基本的な生活習慣の確立を目指す。 (3) 登下校の安全に対して、安全ボランティアの方々との連携や定期的な通学班会等により、把握と指導を行う。	○ペア学年での朝マラソンを行い、励まし合いながら取り組み、マラソン大会当日も互いに応援し合う姿が多く見ることができた。 ○養護教諭による年長児へのメディアコントロール指導、3・4年生のSNS講座等、系統的な指導ができた。 △クマや猿等の出没に係わり、登下校時の安全確保を、安全ボランティア・保護者・地域と連携して対応していく必要がある。	・地域では元気に登校できている。 ・安全ボランティア等の方々にテトル登録をして、連携が図れるとよいのではないかな。
特別支援教育	1 配慮を要する児童への合理的な配慮を心がけ、適切な支援を充実させる。	(1) 配慮を必要とする児童の状況やその支援のあり方について、継続的に共通理解をしたり校内研修で深めたりする。 (2) 通常学級に在籍する支援を要する児童について、特別支援教育充実指導員と連携した個に応じた支援を行う。 (3) 研修を通して、教員の就学についての理解を深めるとともに、SC、SSW、市臨床心理士等との外部と連携し、その専門的な見立てをもとに、配慮を要する児童への適切で有効な支援の仕方を探る。 (4) 丁寧で継続的な面談を通して、保護者と支援の方向性や今後の進路についても確認し合い、適切な就学相談を行う。 (5) 保幼小中の接続期において、具体的・有効的な状況把握や支援の継続・充実を図る。	○特別支援教育充実指導員の配置、また、授業づくりを変更することで、児童一人一人に合った学び方ができるとともに、困り感をもつ児童へ細かな支援を行うことで、その子の意欲につなげることができた。 ○児童の支援に対して、保護者と継続的な面談を行い、具体的な状況や取組を共有し、適切な就学に結び付けることができた。 △支援の必要な児童に対して、保護者への支援も含め、外部との連携を行い、方向性や具体的な取組を共有し、共に考える姿勢を継続していく。	・発達障害の理解が進んでいるように感じた。
開かれた学校づくり	1 家庭・地域にひらかれ、家庭や地域と協働する学校づくりの推進	(1) 授業参観や行事への参加、小まめな家庭訪問や電話連絡等、保護者との連携を密にする。 (2) 学校・学級だよりやホームページを活用し、学校や児童の様子等、積極的に情報発信し理解を得る。 (3) 学校評価や保護者アンケートを計画的に実施するとともに、行事や取組の感想を活用し、学校改善に活かす。 (4) 地域の人材や資源（高等学校、企業、学校支援ボランティア等）を活用した教科学習等に取り組み、地域の方とのつながりを広げる。 (5) PTAや地域の方等に応援してもらいたいことを校内でも検討・協議を進め、教育活動と密接な連携のあり方を創造する。	○年間を通して、行事や取組を実施することができ、子ども達の成長に対して肯定的評価として表れていた。 ○不定期だが112回のホームページの更新を行い、27254件のアクセスがあった。(2/13現在) ○生活科や総合的な学習の時間を中心に、校区内外に出向き、地域教材や人材を活用する機会が増加した。 △さらなる外部連携や地域人材を生かした教育活動を創造・検討していきたい。	・豊かな環境がある校区の特色を生かした取組・活動を創造していくことを大切にほしい。(本校独自の取組の検討)
次年度に向けた改善の方向性	1 これまでの久美浜学園のキーワードである「主体性」を育む土台づくりのために、「トライ＆エラーができるための安心感の醸成」の経営方針を継続させる。そのために、「安心・安定した学級経営」「主体的な学び」について、校内研修等、具体的に取り組み、一歩ずつの改善を目指す。 2 本年度に実践された「つながり」を視点として教育活動を充実・定着させるとともに、その「つながり」を保護者・地域・学園に広げる等、新たな取組を創造しながら本校の教育活動の充実を目指す。 3 本校の課題である「不登校」の解消に向けて、①「つながり」を通した安心感の醸成、②「基礎学力」の定着、③教職員・児童・保護者との具体的な信頼関係づくり、④継続的な状況把握と具体的な見立ての検討、等に取り組んでいく。			・引き続き、安心安定した学校づくりを目指してほしい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立峰山中学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
【教育目標】 「ふるさとを愛し、多様な人とつながりながら学び、探究し続ける子どもの育成」 【めざす生徒像】 (1) 主体的に学び続ける子ども (2) 人を思いやり仲間と共に高め合える子ども (3) 粘り強く挑戦し続ける子ども 【重点課題】 (社会的自立につなぐ教育) (1) 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実を図り、「主体的・対話的で深い学びの実現」に向けた授業改善の推進と学力の向上 (2) 「探究的な学び」を通じて課題解決能力をはぐくむ教育の推進 (3) つながる力を生かした豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止		【授業改善と学力の向上】 ○学び合いを軸とする授業を展開することにより、多くの生徒が自分の考えを深めることができていると感じられるようになった。 △多様な学びのスタイルを視野に入れながらも、子ども達をつなぐ視点を大切に、「探究的な学び」を大切にする教育活動をととして、課題解決能力のさらなる育成を目指すことが大切である。 △家庭学習の状況に不十分さを残す中で、ICTを活用して、将来にわたって学び続ける生徒を育成するための取組を組織的に展開していく必要がある。 【豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止】 △不登校出現率の減少を重点として取り組んできたが、昨年度は出現率が上昇に転じ、不登校の解消に至らない生徒もいる。今後さらなる社会的・職業的自立に向けた組織的な取組の展開と家庭との連携が重要である。		【授業改善と学力の向上】 (1) 多様な学びのスタイルを視野に入れながら、子ども達をつなぐ視点を大切に、「主体的・対話的で深い学び」から「探究的な学び」につながる授業改善を図っていく。 (2) 学び合いをととして主体性を引き出し、コミュニケーション能力やつながる力など、非認知能力の育成を意識した教育活動の展開を図る。 (3) 家庭学習の状況に係る課題を改善するため、ICTを活用して、将来にわたって学び続ける生徒を育成するための取組を組織的に展開する。 【豊かな人間性の育成と不登校の解消・未然防止】 (1) 豊かな人間性を育成するため教職員の人権感覚を高め、すべての生徒との心の触れ合いを大切にする指導を徹底する。 (2) 「つながる力」の育成を意識した教育活動を展開し、将来的孤立の未然防止に努めるとともに、すべての生徒に「居場所」をつくる取組を展開する。	
評価項目		重点目標		具体的方策	
学校 教育 計画 及び 各学 園の 重点 等 を基 盤と して	教育課程 学習指導	◇認知能力と非認知能力を一体的に伸長させる学力向上・授業づくり (1) 「協働的な学び」を充実するための授業改善とICT機器の活用 (2) 個別指導の充実と学習機会の場の提供と評価 (3) 授業とつなげる家庭学習の工夫		◇「協働的な学び」をととして主体的に他者とかかわり、多様な考え方を自らの思考に落とし込み考察し、解決方法を導き表現できる力を育む探究的な授業への移行 ◇共同編集や他者参照など、タブレットやICT機器を効果的に活用した授業展開の工夫 ◇「主体的・対話的で深い学び」「探究的な学び」を実現する授業づくりについての授業研究会と毎月の教科部会の定例化 ◇グローバル人材の育成と英語力の向上 ◇教科授業、あるいは「総合的な学習の時間」、道徳教育、特別活動を効果的・有機的に関連させた教科横断的な教育実現のためのカリキュラムマネジメントの推進 ◇家庭学習の充実を含む個別最適学習の推進 ◇特支学級・別室生徒を含む学習面の課題をもつ全ての生徒への責任あるフォローアップと進路実現	
		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
		○複線型授業を積極的に取り入れ、生徒同士のかかわりや気づきを大切にした授業が定着しつつあり、授業中の生徒の活動が活性化し、学力向上にも繋げることができた。 ○タブレット等のICT機器活用が進み、新たな授業スタイルを生み出すことができた。 ○外部講師を招聘した公開授業や研修会を継続して開催したり、自主的な授業改善を組織で展開したりして、多くの教師の授業スキルが向上した。 ○市海外派遣、SeaLabo、リーディングコンテスト等に本校生徒が積極的に参加し、グローバルリーダーとしての力を身に付けることができた。 ○校内フリースクール運用方針に基づいて、別室生徒の学習支援を組織で展開した。 ○タブレットを活用し、授業と家庭学習の関連付けや学習習慣の定着を進めていく必要があるとともに、「指導の個別化」を具現化していくための教師の意識改革とDXの重点投入が今後求められる。		・授業参観において、タブレットの活用や生徒同士が相互に関わる学習が展開され、授業における新たな学びのスタイルに衝撃を受けた。教員の授業における工夫が見られ、評価できる。 ・不登校生徒等が学べる環境をさらに整えていくことを期待したい。	

生徒指導	◇発達支持的生徒指導の展開 (1) 教師と生徒、生徒同士のつながりを重点に置いた生徒指導の展開 (2) 主体的活動の活性化	◇自己指導能力の育成を意識した発達支援的な関わりを重視した学級経営 ◇生徒の思いに即応できる相談窓口の複数設置と面談等の充実 ◇いじめの早期発見・早期対応・未然防止 ◇不登校・不適応傾向生徒に係る課題の解決に向けた教育相談体制の強化 ◇集団のつながりとうねりを生み出す学年の枠を越えた活動 ◇主体的活動の積極的な外部発信 ◇学校のきまりに係る討議の活性化や生活向上の取組の展開	○かかわりを大切にした発達支持的生徒指導を展開し、学級等における心理的安全性が向上した。 ○タブレットを活用した本校独自の相談窓口や市 Standby を活用して、生徒の悩みにリアルタイムで対応できるようになった。 ○スクールカウンセラーや SSW の助言を、積極的に校内会議やコンサルテーションに生かした。 ○コミュニケーションやキャリアの意識を育てる講演会やワークショップの開催などをおして、非認知能力を育てる取組を展開した。 ○生徒会活動や峰山学園の取組を活性化し、地域と協働して取組を進めた。	・学校のきまりについて、生徒の意見をもとに検討されているが、具体的に改善に向けた動きにつなげられることを期待したい。
健康（体育）・安全	◇保健教育の充実と管理の徹底 ◇安全意識の向上の取組 ◇部活動の充実と体力の向上	◇命の大切さや自他の心身の健康安全への理解を図る取組の充実 ◇継続的な交通安全指導と意識の向上を図る取組の展開	○毎学期の避難訓練に加えて、今年度は京丹後警察の協力を得て不審者対応訓練を実施することができた。 ○自転車関連の事故増加を機に、生徒会・PTA・警察等と連携した交通安全運動を地域で展開できた。	・事故多発時に早期に、生徒会を主体とした取組が行われ、評価できる。
特別支援教育	◇合理的配慮の継続的支援と組織的対応 (1) きめの細かい個別支援 (2) 家庭、関係機関との連携強化 ◇実践的指導力の向上 (1) 校内指導体制の機能化 (2) 支援の充実と研修の充実	◇特別支援教育関係文書 3 点セット（アセスメントシート・個別的教育支援計画・個別の指導計画）の活用による生徒支援の充実 ◇通常学級における特別に支援を要する生徒に対する個に応じた指導の充実 ◇定期的な研修の実施による全教職員の資質・能力の向上	○保護者との連携を軸にした詳細な見立て、指導資料、移行支援資料などを組織的に作成・運用し生徒の指導や支援に生かすことができた。 ○スクールサポーター等の丁寧な支援により、通常学級、特別支援学級、別室など、様々な場の生徒に、適切な指導を展開することができた。 ○コーディネーターを中心とした組織的指導体制が確立しており、校内研修等も充実した。	・特別支援教育の充実に向け、生徒、保護者との連携を引き続き大切にしていきたいと思います。
人権教育	◇生徒の集団の中での人間関係づくり (1) 成長し合う人間関係の形成 (2) 自尊感情の育成と他者への理解・尊重・共感性の涵養 ◇教職員の人権意識の高揚 (1) 人権尊重の理念についての認識深化 (2) 研修の推進	◇全教育活動における、互いを理解・尊重しながら信頼で結ばれ成長し合える人間関係の形成 ◇自尊感情の育成と他者理解・尊重、共感性の涵養 ◇同和教育の成果と手法への評価を踏まえた継承と活用、あらゆる人権問題についての研修の推進 ◇一人ひとりを大切にする教育の推進とコンプライアンスの堅持のための、望ましい教職員の行動及び指導に係る研修、職場環境の整備の充実及び業務改善の推進	○『心を広げるコミュニケーション講座』として、他者理解や人権の尊重を基盤に置き共生・協働を希求する教育プログラムを展開した。 ○生徒会活動の活性化や峰山学園一体となった取組などをおして自立を目指す主体的活動に重点を置いた教育を展開した。 ○同和教育に関するワークショップ形式の校内研修会を開催した。今後も定期的の実施していく必要がある。 ○法令遵守や一人ひとりの人権を尊重した生徒との関わりや職場環境づくりのための研修会を開催し、発達支持的生徒指導の具現化に努めた。	・ジェンダーを配慮した制服等に変更されているため、きまりが今の時代にあったものか等について見直すことを期待したい。
次年度に向けた改善の方向性	(1) 今年度の成果を生かしたより効果的・効率的な授業改善の取組を継続して推進していく。とりわけ全教育活動を繋ぐカリキュラムマネジメントの手法により、教育効果を高めつつ取組や行事のスリム化を図っていく。また、課題となっている「指導の個別化」について、様々な教育資源を活用しながら、「誰ひとり取り残さない教育」を展開していく。 (2) ICT を活用し、作成文書のペーパーレス化や軽量化、廃止等、校内の業務改善を強力に進め、業務を軽減しゆとりをもって生徒指導や学習指導を行える環境整備を行っていく。			・働き方改革の視点で具体的な業務改善が進められることを期待する。

(別紙様式 3) **令和 6 年度 学校評価 学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立大宮中学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点(短期経営目標)	
(大宮学園教育目標) 「自他を尊重し、自ら学ぶ子どもの育成」 (大宮中学校重点目標) 「ふるさとを愛し、夢や希望をもって未来を切り拓く、心豊かでたくましい生徒の育成」 ～人権尊重を基盤に、個をほめて、集団で認めて、他者(集団)とつなぐ～ (実践上の視点) ○生徒一人一人が「自己指導力」を身に付けるための支援(あらゆる教育活動の中で) ・「安全・安心な風土」の醸成 ・「自己存在感」を育てる ・「共感的な人間関係」を育てる ・「自己決定の場」の提供 ○「居場所づくり」と「絆づくり」 ・自己存在感が感じられる場所作り(教職員) ・主体的・共同的な活動を通して「絆」を紡いでいく(生徒自身)		○大宮学園「授業づくりの視点8」「言語活用カリキュラム」「人権教育カリキュラム」の活用による授業改善に取り組み、生徒、および保護者のアンケート項目「中学校で学力が上がったと思う。」の肯定的回答が向上した。 ○ICTの利活用や校内・校外の各種授業研究などを通じた授業の工夫・改善により、アンケート項目「工夫した方法で理解しやすい授業」「わかりやすい授業」などの授業に係る項目で生徒の9割以上が肯定的な評価であった。 ○人権教育を基盤にした生徒指導・学習指導等により。「他者の心を大切にし、思いやりがある」と9割以上の生徒及び保護者が評価している。 △キャリア教育の推進や自ら計画を立てて学習するなど自主的・自発的な学習の習慣化について、自己調整力に着目しながら取組を進める。 △生徒指導提要等の趣旨を十分に理解したうえで魅力ある学校づくりに努めるとともに、不登校の未然防止や自らの進路を主体的にとらえた社会的自立に向けた支援を行う。		○一貫教育を通じた「グローバル人材」の育成 ・すべての人権を尊重することのできる生徒の育成 ・多様な他者とのつながり、ともに協働しながら学びを深め成長する生徒の育成 ○生徒指導の充実(不登校の未然防止) ・生徒が自己指導力を身に付けるための支援 ・生徒が安心でき、自己存在感や充実感を感じられる場所を作り出すこと ・生徒が主体的に取り組む共同的な活動を設定すること ○確かな学力の育成 ・小中で連携した「主体的・対話的で深い学び」を実現するための授業研究と授業改善 ・丹後学におけるICTの更なる活用や地域の外部人材の活用等を通じた「探究的な学び」の研究 ○信頼される学校づくり ・家庭及び地域との連携推進と外部関係機関との連携強化 ・「パートナー」としての学園学校運営協議会との協働	
評価項目	重点目標	具体的方策		成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、 諸計画及び各学園の重点、 幼稚園・小中一貫教育の 重点等 を基盤として	教育課程 学習指導	・大宮学園一貫教育の「人権教育カリキュラム」を活用して人権意識の醸成、また「言語活用カリキュラム」を活用して確かな学力の育成に取り組む。 ・大宮学園「授業づくりの視点9」をもとに、生徒が他者との関わりの中で学びの主人公として多くの力が身に付けられるよう学園、校内の授業研究を通して、魅力ある授業を作り上げる取組を行う。 ・市の「丹後学モデルカリキュラム作成研究協力校」指定を活用し、学園教育の基盤である「人権教育」の更なる充実をはじめ、ICTの更なる効果的な活用や地域人材の活用を通じた探究的な学びについての研究を進める。 ・各種調査やアンケートの結果分析から指導・支援策を検討		○急速に変化し続ける今後の社会を生き抜くために必要な学力について、「なぜ学ぶのか」、また「学び方を学ぶ」など、日々の授業と並行して学びの意義や必要性について指導を行い、実際の授業では単元指導計画における工夫改善を施している。これらのことは保護者へも様々な機会を通じて発信している。 ○「授業が分かりやすい」「いろいろと工夫した方法で理解しやすい」「丁寧に教えてくれる」などのアンケート結果において、生徒で3P以上上がり95%、保護者も2P以上上がり、初めて90%を上回る肯定的評価となった。 △今後必要となる学力(認知・非認知)、及び学力向上のための具体的取組について、機会を設定する中で継続して丁寧に説明するとともに更なる工夫改善に取り組む。	○学び方や授業など「観」が変化することを生徒や保護者へ伝えることもアンケート結果の肯定的評価の向上につながっている。 △失敗してもあきらめず何度も挑戦する生徒の育成が大切。

生徒指導	①生徒指導提要に基づく不登校の未然防止と早期対応 ②組織としてのいじめ把握と未然防止を徹底 ③学習指導との連動	・教職員一人ひとりが人権尊重の基盤に立ち、すべての生徒を大切にする指導・支援を、家庭・地域とともに協働して行う教育活動を学校組織として行う。 ・生徒指導提要の再確認により、生徒との良好な関係構築を目指し、その中から一人一人の実態を的確に把握し、指導・支援につなげるスタイルの実践強化を学習指導でも図る。 ・実態把握と指導（記録）確認のための各種会議の定例化継続、あわせて、校内人材の有効活用、外部の関係機関等との連携による総合生徒支援による生徒指導に取り組む。	○生徒指導部会と教育相談部会を毎週実施する中で、今年度は、特に個々のケースに係る方針立てと具体的な支援等をＳＣなど専門家の意見も参考にしながら確認し、タイムリーな指導・支援につなげることができている。 ○「大宮中の教育は信頼できる」のアンケートで、生徒 97.6%、保護者 90%の肯定的評価であった。 ○△校内別室を活用する中で好転している不登校傾向等生徒がいる。今後更なる活用方策を探る。 △ＳＮＳに係る事象については、保護者と学校がそれぞれ取り組むべき指導と支援を整理、理解した上で連携のあり方について協議していく。	○別室の活用は良い。 ○△今後も生徒の居場所を作り、登校できなくても学校や社会とのつながりが途切れないように支援していくことが必要。
健康（体育）・安全	①安全教育、健康教育、及び防災教育の充実	・急速に進化、普及する携帯端末やＳＮＳに係る取扱いについて、非行防止教室やネットモラル教育、さらには薬物乱用防止教室を活用しつつ、人権学習や性の学習等とも連動させ、年間を通して総合的な指導・支援を組み立てる。 ・地震等の自然災害やＪアラート、交通事故や食物アレルギーなどへの丁寧で確実な対応を危機管理の面からも行う。	○情報モラルに係る指導を非行防止教室や人権教育と絡め計画的に実施し、便利さと危険性について年間を通じて継続的に指導に取り組んだ。 △携帯端末の校内への持ち込み事案が増加している。保護者と生徒、学校とで今後のＳＮＳに係る利活用について検討していく機会をＰＴＡ等とも連携する中で設定していく。	○△ＩＣＴの普及により直接話すコミュニケーションの大切さや必要性が見直されている。継続指導を。
危機管理	①人権尊重を基盤とした指導・支援 ②コンプライアンス遵守の徹底	・定期的な校内研修により、生徒や保護者をはじめ、すべての人に対する人権尊重、及び人としてのコンプライアンス遵守を徹底する。 ・人権教育加配の教職員支援機構による人権教育研修や丹後人権教育研究会での実践発表を、校内等における人権教育の更なる充実の機会ととらえ活用する。 ・すべての教育活動に対して、リスクマネジメントとセットにクライシスマネジメントを行う。	○人権教育を全教育活動の基盤とし、人権学習としての直接学習とともに日常の中にあるすべての人権について意識して感じ考えることを、人権だより等の発行を通じて行った。 ○個別的な視点に係る「障がい」について、外部講師による体験型授業を活用し学びが深まった。 ○「他者の心を大切にし、思いやりがある」のアンケート結果で95%の生徒が肯定的評価であった。 △地域と共にできる人権に係る取組を検討する。	○△今後も他者を意識する活動の中で、人権をはじめ人とのつながりを考える機会を設定することが必要である。
開かれた学校づくり	①学校（学園）運営協議会、各関係機関との連携・協働 ②地域の教育資源の積極的な教育活動への有効活用	・小中一貫教育コーディネーター及び地域コーディネーターと連携し、パートナーとしての学園学校運営協議会との協働を進め、地域とともにある学校・学園をさらに目指す。 ・関係諸機関との丁寧な情報共有により、生徒及びその家庭への支援等を総合的に組み立てる。	○「教育方針は期待に応えるもの」90.4%、「家庭や地域に開かれている」80.7%、「行事など気楽に訪問できる」86.7%と肯定的評価を得ている。 ○総合的な学習の時間において、地域の事業所との連携した学びに取り組むことができ、次年度以降の学びの充実につなげることができた。 △地域の方々と共に探究する学習内容を、ＰＴＡや学校運営協議会等との連携から検討したい。	○探究的な学びの充実に係る地域の人材活用は良い。継続して更なる充実を目指してほしい。
次年度に向けた改善の方向性	1 人権教育をすべての教育活動の中に位置付け、教育実践をさらに充実・推進させていくこと。 2 総合的な学習の時間における「探究的な学び」の手法について、各教科でも実践していくための教科等横断的な学びの研究を進める。 3 ＰＴＡや大宮学園学校運営協議会、また学校評議員会をはじめとする地域の各関係機関と共にある学校・学園を目指すため、積極的に連携・協働を行う。			

生徒指導	①生徒指導提要に基づく不登校の未然防止と早期対応 ②組織としてのいじめ把握と未然防止を徹底 ③学習指導との連動	・教職員一人ひとりが人権尊重の基盤に立ち、すべての生徒を大切にする指導・支援を、家庭・地域とともに協働して行う教育活動を学校組織として行う。 ・生徒指導提要の再確認により、生徒との良好な関係構築を目指し、その中から一人一人の実態を的確に把握し、指導・支援につなげるスタイルの実践強化を学習指導でも図る。 ・実態把握と指導（記録）確認のための各種会議の定例化継続、あわせて、校内人材の有効活用、外部の関係機関等との連携による総合生徒支援による生徒指導に取り組む。	○生徒指導部会と教育相談部会を毎週実施する中で、今年度は、特に個々のケースに係る方針立てと具体的な支援等をＳＣなど専門家の意見も参考にしながら確認し、タイムリーな指導・支援につなげることができている。 ○「大宮中の教育は信頼できる」のアンケートで、生徒 97.6%、保護者 90%の肯定的評価であった。 ○△校内別室を活用する中で好転している不登校傾向等生徒がいる。今後更なる活用方策を探る。 △ＳＮＳに係る事象については、保護者と学校がそれぞれ取り組むべき指導と支援を整理、理解した上で連携のあり方について協議していく。	○別室の活用は良い。 ○△今後も生徒の居場所を作り、登校できなくても学校や社会とのつながりが途切れないように支援していくことが必要。
健康（体育）・安全	①安全教育、健康教育、及び防災教育の充実	・急速に進化、普及する携帯端末やＳＮＳに係る取扱いについて、非行防止教室やネットモラル教育、さらには薬物乱用防止教室を活用しつつ、人権学習や性の学習等とも連動させ、年間を通して総合的な指導・支援を組み立てる。 ・地震等の自然災害やＪアラート、交通事故や食物アレルギーなどへの丁寧で確実な対応を危機管理の面からも行う。	○情報モラルに係る指導を非行防止教室や人権教育と絡め計画的に実施し、便利さと危険性について年間を通じて継続的に指導に取り組んだ。 △携帯端末の校内への持ち込み事案が増加している。保護者と生徒、学校とで今後のＳＮＳに係る利活用について検討していく機会をＰＴＡ等とも連携する中で設定していく。	○△ＩＣＴの普及により直接話すコミュニケーションの大切さや必要性が見直されている。継続指導を。
危機管理	①人権尊重を基盤とした指導・支援 ②コンプライアンス遵守の徹底	・定期的な校内研修により、生徒や保護者をはじめ、すべての人に対する人権尊重、及び人としてのコンプライアンス遵守を徹底する。 ・人権教育加配の教職員支援機構による人権教育研修や丹後人権教育研究会での実践発表を、校内等における人権教育の更なる充実の機会ととらえ活用する。 ・すべての教育活動に対して、リスクマネジメントとセットにクライシスマネジメントを行う。	○人権教育を全教育活動の基盤とし、人権学習としての直接学習とともに日常の中にあるすべての人権について意識して感じ考えることを、人権だより等の発行を通じて行った。 ○個別的な視点に係る「障がい」について、外部講師による体験型授業を活用し学びが深まった。 ○「他者の心を大切にし、思いやりがある」のアンケート結果で95%の生徒が肯定的評価であった。 △地域と共にできる人権に係る取組を検討する。	○△今後も他者を意識する活動の中で、人権をはじめ人とのつながりを考える機会を設定することが必要である。
開かれた学校づくり	①学校（学園）運営協議会、各関係機関との連携・協働 ②地域の教育資源の積極的な教育活動への有効活用	・小中一貫教育コーディネーター及び地域コーディネーターと連携し、パートナーとしての学園学校運営協議会との協働を進め、地域とともにある学校・学園をさらに目指す。 ・関係諸機関との丁寧な情報共有により、生徒及びその家庭への支援等を総合的に組み立てる。	○「教育方針は期待に応えるもの」90.4%、「家庭や地域に開かれている」80.7%、「行事など気楽に訪問できる」86.7%と肯定的評価を得ている。 ○総合的な学習の時間において、地域の事業所との連携した学びに取り組むことができ、次年度以降の学びの充実につなげることができた。 △地域の方々と共に探究する学習内容を、ＰＴＡや学校運営協議会等との連携から検討したい。	○探究的な学びの充実に係る地域の人材活用は良い。継続して更なる充実を目指してほしい。
次年度に向けた改善の方向性	1 人権教育をすべての教育活動の中に位置付け、教育実践をさらに充実・推進させていくこと。 2 総合的な学習の時間における「探究的な学び」の手法について、各教科でも実践していくための教科等横断的な学びの研究を進める。 3 ＰＴＡや大宮学園学校運営協議会、また学校評議員会をはじめとする地域の各関係機関と共にある学校・学園を目指すため、積極的に連携・協働を行う。			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立網野中学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
将来に夢と希望をもち、郷土を愛し、知・徳・体の能力を伸ばす生徒の育成を図る教育の推進 1 規範意識を醸成し、落ち着いた学校、落ち着いた授業により学力を付ける。 2 未来を展望し、自ら未来を切り拓く力を付ける。 3 思いやりをもち仲間とともに生きる、豊かな人間関係を築く力を育てる。 4 自然・人・社会とつながり、郷土を愛する心を育てる。		○第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業に学園として取り組み「育てたい非認知能力(指標)」を意識した教育活動推進、ギミックブラッシュアップシートを活用した授業づくり等に取り組んだ。 ○教科の指導と生徒指導の一体化を意識した指導、組織的な対応、支援を要する生徒への丁寧で適切な対応や関係機関との連携を図った。 △さらに日々の授業、家庭学習の中でタブレットの利活用を効果的に進める。 △早期の実態把握と対応、改善、解消に危機感を持ち、指導や支援にあたりともに、さらに関係機関との連携を進め、生徒の実態や生徒・保護者のニーズにあった教育支援を充実させる。		「ほめて、認めて、他者（社会）とつなぐ指導」の展開 「つながろう仲間と つなげよう心を！」を生徒の合言葉に、常につながりを意識させ学校生活を充実させる。 1 「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究を通した授業づくり及び授業改善 2 豊かな人間性の育成、規範意識の醸成 3 不登校の未然防止と丁寧な支援 4 特別支援教育の充実 5 信頼される学校づくり～家庭との連携強化 6 網野学園学校運営協議会との協働					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、諸計画及び各学園、保幼小中一貫教育の重点等として	教育課程 学習指導	1 「未来を拓く学校づくり」推進事業を通した研究推進と授業実践力の向上 2 家庭学習時間の確保と家庭学習の習慣化		・第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業最終年の取組を学園一体で進めるとともに、本校の学校力の向上につなげる。具体的に非認知能力の育成を研究の柱にした授業づくり、授業の改善、そして教育活動の推進を図る。 ・「主体的に学ぶ力」や「コミュニケーション能力」等の育成を通して、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めるとともに、タブレットの利活用により「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させ、探究的な学びの充実につなげる。 ・学園組織を活用し、系統的に家庭学習の指導を行い、習慣化及びタブレットの効果的な活用を図る。		○非認知能力育成を柱にした第2期「未来を拓く学校づくり」推進事業の研究による学校力向上を目指した結果、総合的な学習の時間も含め探究的な学びが充実し、授業改善への肯定的な評価が前年度より増えた。 【保護者】確かな学力育成のため工夫を凝らし効果を上げた(+9.9%)、主体的に取り組めるよう学習意欲の向上に力を入れた(+8.1%)、コミュニケーション能力を育成しつながる力を高めた(+6.7%) 【生徒】英語の力が付いた(+6.1%)、国語の力が付いた(+5.6%)、学習に意欲的に取り組めた(+2.9%) △家庭学習の習慣化は、保護者-8.3%、生徒-13/1%と前年度より課題意識が高まっている。基盤となる主体的で自立した生徒の育成に向けた取組が必要。		・授業改善の動きが進んだこと、またその実感が伝わっていることは、大きな意義がある。 ・家庭学習の習慣化については、学校としての取組とともに、家庭の理解・協力を得ながら連携することが必要である。引き続き、自らの目標に向け主体的に取り組む自立した生徒の育成に向けた取組を進めてほしい。	
	生徒指導	1 いじめの状況把握と未然防止の徹底、人権意識の醸成 2 組織的な生徒指導体制の確立と規範意識の向上 3 不登校の未然防止と早期対応及び解決に向けた組織的な体制づくり		・いじめの実態把握と早期対応、いじめの根絶を徹底する。 ・生徒の状況把握を共有し、生徒指導部会・教育相談部会を中心に共通確認し、チームとして生徒に寄り添う指導・支援を行う。 ・教科の指導と生徒指導の一体化を意識した教育実践により、生徒の自己肯定感の醸成や居場所づくり、組織的な対応による丁寧なアセスメントと個に応じた支援により、不登校の未然防止に努める。		○非認知能力育成を目指した教育活動、教科の指導と生徒指導の一体化を意識した教育実践や、生徒指導部会や教育相談部会、特別支援教育部会等を中心とした組織的な指導・支援を行うことができた。 △「生徒指導に熱心に取り組む、家庭と連携しながら、子どもたちが安心安全に学校生活を送れるように取り組んでいる」について約8割の保護者の肯定的評価を得るが、前年度より-6.6%と課題を残した。		・不登校への支援については、学校と保護者だけでなく、支えとなる関係機関の力も借りながら、学習への支援等、中学校卒業後の社会的自立に向けた取組が必要である。	

健康（体育）・安全	1 安全に対する意識の高揚と危機回避能力の育成 2 体力の向上・健康教育の充実、部活動の推進	・避難訓練、非行防止教室、薬物乱用防止教室等を活用し、生徒、教職員の安全に対する意識の高揚を図る。 ・非認知能力の育成について部活動でも意識して指導や支援を行い、異年齢集団での共通の興味関心や目的意識を持ち活動することの楽しさや喜びを体得させる。	○避難訓練、薬物乱用防止・非行防止教室、性の学習、ゲームネット講座等により意識高揚を図った。また、非認知能力育成の視点で部活動も充実させた。 △SNSの取り扱いについては、引き続き、知的理解にとどまることなく人権感覚を高める指導が必要。	・スマートフォンの所持率が高まる中、適切な取り扱いについて指導することが必要。一方で、オンライン授業の充実等、情報機器の効果的な活用も進めてほしい。
特別支援教育	1 校内支援体制の機能化 2 個々の生徒や保護者のニーズの把握と支援の充実 3 個々の生徒の発達特性を踏まえた指導方法の工夫改善	・特別支援教育コーディネーターを中心に、通級指導担当、教科担当、担任、関係機関との連携を強化し、校内教育支援委員会および特別支援教育部会の一層の機能化を図るなど、校内支援体制の機能化を図る。 ・生徒及びその保護者との面談を丁寧に行い、保護者の理解を図り、関係機関と連携した支援の継続に努める。 ・通常学級に在籍する支援を要する生徒も含め生徒の実態を把握し、アセスメント票、個別の指導計画、個別の教育支援計画に基づく指導・支援を充実し有効な手立てを蓄積する。	○生徒・保護者との丁寧な面談、医療機関・支援学校・行政機関との連携や、校内での生徒指導部・教育相談部との連携等による体制整備を行い、通常学級に在籍する生徒も含めて、よりよい指導・支援を継続することができた。 △さらに関係機関と連携し、生徒の実態や生徒・保護者のニーズにあった教育支援を充実させる。	・支援を要する生徒が多くなっていると聞く中で、さらに関係機関と連携し、生徒の実態や生徒・保護者のニーズにあった教育支援を充実させていく必要がある。
開かれた学校づくり	1 信頼される学校づくりの推進 2 地域の教育資源の活用 3 各関係機関との連携と協働 4 学園学校運営協議会との協働	・保護者や地域に対して、さらに誠実・迅速・丁寧な対応に努める。 ・たより、HP等に加え、ICT（iPadや連絡アプリ tetoru 等）の利活用による情報発信に努め、積極的に生徒の頑張りや学校の様子を伝え、地域との連携を深める。 ・各関係機関との連携を強め、生徒及びその家庭への支援を組み立てていく。 ・網野学園学校運営協議会、地域学校協働活動、地域連携による教育活動、PTAとの連携等の機会を通して、本校の教育に対する理解を図るとともに取組の改善を図る。	○「学校を公開し、学校の取組を便り等で十分にお知らせする開かれた学校」と保護者アンケート全項目中で最高となる 82.0%の評価を得るなど、ICT（iPadや連絡アプリ tetoru 等）の利活用が定着し、生徒の頑張りや学校の様子を積極的に発信できた。 ○総合的な学習の時間の「体験活動」等、地域の協力もいただき充実を図ることができた。 △さらに学校評価アンケート、網野学園評価を分析し、今後の学校経営に生かす。 △生徒の頑張り等のさらなる発信方法を模索する。	・各関係機関との連携を図り、地域での作品展や催し物の際での作品展示や活躍機会の設定等、さらに発信の機会を広げる余地があるのではないかと。 ・部活動地域移行の動きについても、地域との連携を強める機会としても位置づけることができる。
次年度に向けた改善の方向性	・「未来を拓く学校づくり」推進事業での研究成果を波及させるように学校経営を行い、さらに本校の学校力向上につなげる。 ・主体的に学ぶための基盤になる自立した生徒の育成を目指した取組を推進する。 ・学園学校運営協議会をはじめ、各関係機関と連携・協働し、地域とともにある学校、信頼される学校づくりをさらに進める。			・教員・保護者だけでは対応困難な課題が多く、地域との連携強化も必要。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔京丹後市立丹後中学校〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）					
○確かな学力の育成と生徒自ら学習に取り組む授業づくり ○豊かな心と健康な体をはぐくむ教育の充実 ○進路指導の充実 ○信頼される学校づくり ○保幼小中一貫教育の推進による教育活動の充実		「本気で本物に挑戦する」という合言葉を学校風土として確立させ、年間とおして目的意識を持たせる学校生活を送らせることができた。結果、行事等で力を発揮した。また、仲間を思いやる態度も育ってきた。 さらに目指すべき事項として、新たな時代に対応できる自己肯定感や自己有用感をより高め、目的達成に希望をもって向かい、学校生活で共に協力し、積極的に取り組む力をつけさせたい。		生徒ひとりひとりが高みを目指し、生き生きと挑戦する学校を創る～生徒と教職員が一丸となり、「本気で高みに挑戦する」を合言葉に進める～ ○生徒が自らの可能性に様々な機会を捉えて挑戦することを促す ○それぞれの教育活動（学習・行事・取組等々）のねらいを明確にし、生徒が主体的に行動することで、高みを目指す。					
評価項目		重点目標		具体的方策		成果と課題（自己評価）		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、諸計画及び各学園の重点等、保幼小中一貫教育の基盤として	教育課程 学習指導	・互いの個性を認め合い、互いが高まり合うコミュニケーション能力の育成を図る。 ・GIGAスクール構想に則った一貫性・連続性のある教育課程を編成し、カリキュラム開発を行う。 ・生徒自ら学ぶ態度の育成		・全ての教科でタブレットなどICT機器の活用のスキルを高め、生徒指導上の実践上の4つの視点を生かした授業改善を行い、主体的・対話的で深い学びの実現を目指す。 ・発達段階に応じた指導目標に基づき、指導と評価の一体化した取組を、ICT活用の指導を中心に進め、系統性のある一貫した授業づくりを研究する。 ・タブレット等を活用した生徒主体とする授業改善を進め、家庭学習とも関連付け、自ら学ぶ意欲の醸成を図る。		○教育活動全般で調べ学習や発表資料の作成など、ICT機器を有効に活用した実践ができた。 ○生徒同士の対話から課題解決の方策を見つけたり、ICT機器を活用して課題解決につなげたりと、生徒自らが学ぶ意欲の醸成が図れた。 ○タブレット活用により、生徒個々の進度に応じた学習活動が保障できた。 △多くの情報があふれる中で、情報機器を使った調べ学習で得た内容の取捨選択が課題である。 △ICT活用と家庭学習の定着について結びつけが不足した。		・タブレット学習でグループごとの討議が充実していることが分かった。以前は特定の生徒しか発言しないことがあったが、タブレットを使って全ての生徒の意見が反映できるのは良いこと。 ・一方で、タブレット使用が苦手な生徒はいないのか。 ・書くことも大切だと思うがその点はどうか。	
	生徒指導	・配慮を要する生徒の背景を多面的にとらえ、いじめの防止対策の充実や不登校生徒に対する学びの保障に努める。 ・育てたい力を共有し、教職員の学級経営力の向上を図る。		・日常的な生徒への寄り添い指導や教育相談月間などを全教職員で丁寧に行い、生徒との信頼関係づくりを進めるとともに、子どもが主体となる学習環境を整備していく。いじめ防止対策委員会を定期的に開催し、いじめ調査の結果等を基に丁寧な組織的対応・指導に努める。 ・「丹後学」等を活用した生徒の協働的な活動の場の充実を図り、未来の担い手として「将来の社会的自立」に向けたキャリア教育を進める。		○登下校時の教師によるあいさつや、休み時間の場面で日常の会話を通して、生徒との関係を築くことができた。その効果もあり、生徒が何事にも主体性を持って活動する場面が増えた。 ○定期的にいじめ防止対策委員会を持ち、生徒に寄り添った指導と、未然防止に努めた。 △「丹後学」を通して、探究的な学習を行ってきたが、さらに将来に向けての展望を切り拓く力を身に付けさせる指導が必要である。		・子どもたちの元気な姿が地域でも見られるので安心して いる。 ・丹後学を通してさらに地域学習を充実させて欲しい。	

健康（体育）・安全	・体を鍛えることで、忍耐力などの心の強さも育て、その力を学習にもつなげる。 ・安全な生活の確立に向けて、丹後学園全体で指導を行う。 ・自分や周りの人の命を守る安全教育を行う。	・体育系・文化系部活動にかかわらず、高みに挑戦する心を持たせ、目的を達成しようとする態度と豊かな心の育成を図る。 ・丹後学園一貫 PTA・丹後学園運営協議会等との連携を強め、あいさつ運動（NHD）や登下校指導を継続する。 ・生徒の安全、安心な学校生活のために、安全点検の実施と命に係る授業を実施する。	○部活動を通して、勝敗に立ち向かう強さを培うことができた。文化面では書道パフォーマンスや能、落語体験など幅広い体験の場を作り、生徒の心を揺さぶる指導ができた。 ○丹後学園の諸活動を生徒の取組に乗せ、自ら挨拶する態度や地域とのつながりなど、生徒、地域がかかわり合えるきっかけとなった。 △安全点検後の環境改善につなげることが組織として不足した。（点検後の確認）	・子どもたちの活発な取り組みと成果が伝わってきた。 ・地域で挨拶を返してくれる子どもたちがいて、気持ちが良い。
開かれた学校づくり	・保護者、地域への学校公開等を計画的に行い、地域と共にある学校教育を目指す。 ・学校・家庭・地域との相互の連携を図り、生徒の様子や学園・学校の教育活動を発信していく。 ・地域人材の積極的な活用を行う。	・様々な教育活動の参観を保護者や丹後学園運営協議会の委員など、広く地域の方々へ呼びかけ、いただくご意見や感想を学校経営に活かす。 ・「丹後学」などで丹後を元気にする提言をテーマに探究を進め、地域の取組への積極的な参加を行い、学校だより等の地域回覧・全戸配布や、学校HPへの掲載を通じて、学校教育の充実と地域の活性化の両方を目指した啓発を行う。 ・地域学校協働本部等を活用し、支援ボランティアの支援を積極的に活用する。	○地域の各委員様を招聘した懇談会を年2回開き、いただいたご意見を教職員で共有し、学校運営に活かした。 ○「丹後学」で行った学びを校内作品展示で披露できた。また、発表会にも地域の方をお招きして参観していただいた。 ○地域ボランティアとして、5つの部活動でお世話になり、競技力向上が図れた。また、図書整理、読み聞かせでは年2回お世話になった。	・たくさん学校訪問を企画していただき、学校の様子を見させていただいた。 ・地域の方々が多く部活動でボランティア指導に入っていることに驚いた。地域とつながっていることに安心しました。
特別支援教育	・人権教育をベースとして、生徒のそれぞれの特性についての理解を教職員間で共有し、一人一人の特性にあった支援を、全教育活動を通じて行う。 ・丹後学園や関係機関との連携を丁寧に行い、指導の充実を図る。	・特支学級の生徒と通常学級に配慮を必要とする生徒に対して具体的にアセスメントし、個々の課題に応じた指導・支援を保幼小中の一貫性・連続性を大切に行う。全教職員で課題共有を大切にし、定期的に校内委員会を開催し、組織的な支援を行う。 ・丹後学園内の連携や専門的見立てなどをもとに、校内研修や学園研修会などの充実を図る。また、切れ目なく学ぶことができる教育を進め、子どもの自立へ向けた適切な支援により認知能力と非認知能力の一体的な育成を目指す。	○支援に対するプロジェクトの指定を受け、専門家の見立てを基にした自立活動の計画、全体への発信を行い、組織的な支援ができた。 ○通常学級に在籍する配慮を必要とする生徒への支援について定期的に部会を持ち指導の統一を図った。 △校内委員会を定例化することが時間割の関係上難しかった。 △丹後学園として生徒の状況を交流、組織的な支援を検討する場面設定が不足した。	・丁寧な支援が充実している事到大変感動しました。 ・プロジェクトを活用して、生徒の支援を研究される熱心さにも地域の一人として感謝します。 ・不登校生徒に対する具体的な支援策について、今後も進めたい。
次年度に向けた改善の方向性	・学園共通学習指導の重点「子どもの主体的な学びの変容」を重点とした研究を進めていく。（児童生徒の状況交流と指導法） ・活発な特別活動を重視し、行事・部活動で子どもの活動を支援できる指導体制を整え、生徒が「自ら挑戦」する意欲と行動力を育成する。 ・個々の生徒に寄り添う指導を組織的にを行い、不登校や不安を抱えている児童生徒が学校に来やすい環境整備と指導体制を整える。			

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立弥栄中学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点（短期経営目標）	
1 「誠実」を大切にし、全教職員で、生徒・保護者、地域との信頼関係を築く。 2 主体的・対話的に学び、互いに認め高めあうことを通して、人権尊重に基づく人間性豊かな生徒を育む教育課程の編成と実施に努める。 3 基礎的・基本的内容の指導の徹底と定着を図る授業づくり（わかる・できる授業、小中の円滑な接続）を進める。 4 知識技能を活用し、自ら考え、判断し、探究する力・表現する力を伸ばす生徒を育てる。 5 主体的に未来を見つめ、そのための今を大切にし、自分の進路に向かうことができる生徒を育てる。		1 小規模の生徒数、教職員数の強みを生かした教育活動を推進する。 2 1園1小1中の学園体制となることを踏まえ、生徒のよりよい人間関係づくりに焦点を当てた生徒指導、特別活動、人権教育、道徳教育の取組を充実させるとともに、学園としての実践研究を推進する。 3 個々の生徒の状況を面談等様々な機会を介して把握し、個別の適切な支援が進められるよう、教職員間の情報共有を確実にし、組織的な動きに基づいた生徒の個性と能力の尊重に努める。また、このように取り組める教職員集団を目指した研修を重ね、人材育成に努める。		1 弥栄学園保幼小中一貫教育の「目指す子ども像」の具現化を図るため、園小中学校一貫した教育を推進するとともに、全教職員が学校運営に参画する。 2 「生徒が自ら学び、共に考え、学びを深める学校」「違いをよさとして認め、思いやり、支え合い、高めあう学校」「生徒が目標を持ち挑戦しようとする学校」を目指し、生徒にとって居場所のある魅力ある学校づくりをすすめる。	
評価項目		重点目標		学校関係者評価	
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の重点等、及び各学園の重点等として	教育課程 学習指導	・主体的、対話的で深い学びの実現を目指す授業づくり		・端末を活用したりグループで活動したりしている授業を見ると、授業がかわってきていることがわかる。 ・基礎基本の力の定着を図るとともに、生徒の主体的な学習活動、家庭学習に取り組めるとよい。	
	生徒指導	・生徒指導の実践上の視点を生かした実践の推進と自尊感情の醸成 ・いじめ、不登校の未然防止のための校内組織の構築と丁寧な対応		・教職員間で生徒の情報共有をして指導していることが生徒だけでなく保護者にとっての安心感につながっている。 ・こども園から人間関係が変わらないからこそ、こども園・小学校とのつながりを大切にしたい。	

	健康（体育）・安全	・ 基本的生活習慣の確立 ・ 健康・安全教育の推進	・ 保健・体育の指導による体力づくり及び家庭と連携した基本的生活習慣を確立する。 ・ 保健分野（薬物、性、感染症予防等）及び安全分野（生活安全・交通安全・災害安全）の指導の充実による自他の健康安全に係る自己調整力を育成する。 ・ 登下校の安全確保はもとより、防犯に関する指導及び災害等に対する防災教育の充実を図る。	○年間を通じて、健康安全や保健に関する指導を充実させることができた。 ○外部講師による講話や体験等を通してより正しい知識の習得と危機対応能力の育成に努めた。 △交通安全や自然災害に係る指導について、地域・家庭、関連機関と連携した訓練や支援体制の構築を含めて考える必要がある。	・ 基本的生活習慣の確立において、人間関係づくりの基本である挨拶ができる生徒を育ててほしい。 ・ 防災・安全についても多くの体験活動に取り組んでいることはよい。地域との連携ができるとよい。 ・ 持続可能な部活動と地域移行について今後保護者も交えて考える必要がある。
	特別支援教育	・ 特別支援教育に関する組織体制の充実	・ 特別支援コーディネーターを中心として、支援を要する生徒の教育的ニーズに応じた支援内容を検討し、保護者・生徒と目標を共有しながら支援の工夫改善を図れるよう校内組織体制の機能化を図る。 ・ 一人ひとりの生徒の実態を丁寧なアセスメント等により把握し、すべての生徒にとっての学びやすさ、生活のしやすさにつながる教育環境を整備する。 ・ 研修での学び、専門家の助言等を共有する等、学校組織として教員の特別支援教育に係る資質・能力の向上を図る。	○取り出し指導や個別の課題配信等に取り組む等家庭と連携をして個別の教育的ニーズに応じた支援に取り組んだ。 △特別支援コーディネーターを中心とした校内組織の機能化を図る中で、支援の評価を行い個に応じた支援の質の向上を図る。 △生徒の多様な強みや個性を尊重するための学校としてのアセスメント機能を高め、生徒の学びやすさにつながる環境整備に努める。	・ 生徒個々をとらえるのは難しいと思うが、一人ひとりの実態に応じた支援や教育活動を大切にしてほしい。
	開かれた学校づくり	・ 丁寧で分かりやすい情報発信と積極的な学校公開 ・ P T A ・ 学園運営協議会・地域の関係機関等との連携の推進	・ 学校だよりや学級通信、ホームページ等で、学校の様子を発信するなど保護者・地域への積極的な学校公開を行う。 ・ P T A や地域の人材や関係機関等とのつながりを活かした連携・協働体制の構築を推進する。	○月 1 回の学校だより、ホームページの更新等による情報発信を行った。 ○年間を通して弥栄病院に中学生の美術の作品を展示させていただくことは、地域の方への中学校のよき広報となった。	・ たよりが地域に回覧されることで学校の様子がわかる。 ・ 美術作品の展示は大変よかった。更に、地域住民が集まる場所での展示もあるとよい。
次年度に向けた改善の方向性	1 「探究的な学び」をととしたグローバル人材の育成の実現に向けた授業改善と研究活動の推進 2 授業と連動する家庭学習の研究と情報端末の効果的な活用の推進 3 全ての教育活動において発達支持的生徒指導の推進をととした生徒にとって安心・安全な学校づくりの推進 4 弥栄学園の組織を基盤とし、学校（学園）、保護者、地域、関係機関との協働・支援体制の展開。 5 家庭や地域への丁寧で分かりやすい実践の発信				・ 弥栄を大切に思い、弥栄に帰ってきたと思える教育を大切にしてほしい。 ・ 学校と保護者だけでなく、より一層の保護者間のつながりも大切にできるとよい。

(別紙様式3) **令和6年度学校評価学校関係者評価報告**

学校名〔 京丹後市立久美浜中学校 〕

学校経営方針(中期経営目標)		前年度の成果と課題		本年度学校経営の重点 (短期経営目標)
<久美浜学園> 指導の重点: 学力向上 (1) 基礎・基本の徹底 (2) 主体的に学ぶ力の伸長(授業づくり) (3) 家庭学習時間の確保 ◇規範意識の醸成を基盤とし、当たり前のことが当たり前でできる学校、「命」「今」「仲間」を大切にできる学校を目指す。 ◇久美浜学園保幼小中一貫教育の一層の推進により、指導観について共通理解を図り、系統的、組織的な教育実践を推進する。 1 非認知能力の伸長と、「主体的・対話的で深い学び」を追求した授業の充実による学力の向上 2 好ましい人間関係の構築と自己肯定感・自己有用感の向上 3 不登校の未然防止と不登校(傾向)生徒の改善 4 「久美浜学園学校運営協議会」を核とする地域力と学校力を統合した、地域ぐるみの子育て支援体制の確立		○学校のデジタル改革を目指した指定事業を活用し、多くの成果発表会、研修会、公開授業等を実施した。ICTを効果的に活用した授業づくりの取組の活性化により、教員一人ひとりの意識と授業力が向上したとともに、生徒の協働的な学びや学力向上の面で大きな成果が見られた。 ○SDGsの取組をはじめとする生徒会活動がさらに活性化した。取組は久美浜学園全体に広がり、環境関連フォーラムでの発表等、町外にも積極的に発信することができ、生徒の自信や自己肯定感の高まりに繋がった。 ○よさのうみ支援センターや各病院・クリニックなど、多くの関係機関との継続的連携により、専門家の助言を生かした根拠ある見立てと効果的な指導が可能になった。 ○同窓会との共催により「くみちゅうキャリアフェスティバル2023」を開催するとともに、遠隔交流事業など丹後緑風高校久美浜学舎との共同事業を数多く展開し、地元や地元の学校に対する意識が高まった。 △今後は、不登校を含むすべての生徒一人ひとりを伸ばすための個別最適な学習の研究や推進を重点的に展開していく必要がある。 △アフターコロナにおけるコミュニケーション力の回復が課題。 様々な主体的活動の活性化が必要である。		1 教育活動の重点的方針 (1) 価値観の変化への対応と多様性を踏まえた教育活動の精選、新たな生徒指導及び教育相談の充実 (2) 認知能力と非認知能力を一体的にはぐくむ授業改善の推進 (3) 地域に貢献できる人材の育成を目指した「久美浜ならではの教育」と「開かれた教育課程」を進めるためのカリキュラムマネジメントの推進 2 職務上の重点的指針 (1) 学習指導要領の趣旨に沿った授業づくりのための教員の資質向上 ・評価方法や授業展開等における研修の充実 ・「開かれた教育課程」を目指した地域資源や丹後学を活用した授業づくりの推進 (2) 生徒指導提要の趣旨に沿った生徒理解の推進と組織体制の整備 ・発達支持的生徒指導の具体に関する研修の充実 ・新たな不登校生徒へのアプローチとICTの活用 (3) 教職員の働き方改革推進及び服務規律の徹底 ・勤務や勤務時間に対する意識改革 ・通信機器や個人情報に係る危機意識の向上
評価項目	重点目標	具体的方策	成果と課題(自己評価)	学校関係者評価
学校教育指導の重点、保幼小中一貫教育の重点等として	教育課程 学習指導	◇全国及び京都府学力・学習状況調査等の結果から、生徒の状況を「探究的な学び」の視点で把握 ◇ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な授業づくりの推進 ◇タブレットの持ち帰りによる家庭学習の充実 ◇定期テスト改革推進と定期テストのみに依拠しない単元や定着を重視した評価の場の設定 ・各教科のシラバスと評価方法の提示 ◇グローバル人材の育成と英語力の向上	○「学びのパスポート」を活用して、質問事項から「探究的な学び」の視点で18項目を抜き出して、府平均に対する分析を行い、本校生徒の状況を把握した。 ○一部の教科ではあるが、単元テストを数回にわたり設定し、生徒の意欲向上に努めることができた。 △タブレットの持ち帰りは全校生徒に定着しているものの、ネットワークを活用した家庭学習の充実には不十分さが残り、今後研究を進める必要がある。	・タブレットの操作も全ての子ども達で慣れているのがよくわかる。これからの時代に必要な技術だと思うが、紙と鉛筆の学習や辞書を引くなどは無くてよいのかと思う面もある。 ・いろんな子がいるので、ハイブリッド方式は継続してもらいたい。
	生徒指導	◇「いじめ・不登校未然防止」に向けた迅速な情報共有と丁寧な組織的対応 ◇不登校・不適応傾向生徒に係る課題解決に向けた取組 ◇主体的活動の活性化 ・SDGsの取組の充実	○12月末現在の不登校(傾向)生徒数は昨年度比で5名の減となり、未然防止に向けた組織的な対応をとることができたといえる。 ○SDGsの取組では生徒会を中心に継続して実施し、保幼小中を通して活性化を図ることができた。 ○生徒会を中心に、校則について考えることができた。	・不登校の改善は、回復ではなく、新規を出さない未然防止であることが分かった。来年も継続して未然防止を行い、更なる減少に期待したい。

健康（体育）・安全	◇実効性ある危機管理マニュアルの確立、避難訓練等の充実等	◇緊急時対応訓練の実施（土砂災害、火災、不審者、地震） ◇感染防止を含む健康安全に関する自主的な向上意識を高める指導とマニュアルの徹底 ◇健康・安全に関する教育の充実	○コロナ禍を経て、マスク着用や手指消毒等が一定定着しており、ウイルス感染防止は概ねできている。 △京丹後警察との連携を一層深め、不審者の対応については継続して学習する必要がある。	・コロナも5類に変わり、マスクを外しても良い場面が増えたと思うが、それでも外せない生徒がいるのは気になる。
特別支援教育	◇校内指導体制の機能化 ◇通常学級における特別に支援を要する生徒に対する個に応じた指導の充実 ◇合理的配慮の継続的検討と組織的対応	◇特別支援教育の視点で展開する全教育活動の展開 ◇特支アセスメント・個別の指導計画・個別の支援計画・小中連携資料・教育相談個票の日常的活用と検証、全教員での共有化 ◇支援を要する生徒の把握、有効な手立ての蓄積 ◇担任並びに担当者と本人・保護者との丁寧な懇談 ◇通級指導の実施、保護者・教科担当・担任・関係諸機関との連携の強化	○特別支援教育コーディネーターを中心にして、校内の指導体制を機能させることができた。 ○支援を要する生徒の学びの場を検討することで不登校の未然防止を図ることができたケースがあった。 ○保護者連携についても、タイミングを逃さず継続的に行うことができ、個別の支援を両輪で行えている。 ○よさのうみ支援学校や各病院との連携についても、昨年度に引き続き実施しており、効果を上げている。	・学びの場を変えることで、学校に来れるようになった生徒の話は良かったと思う。 ・今は本当にいろんな子どもさんがおられるので学校も大変だと思うが、それぞれの生徒や家庭に寄り添ってもらえたらありがたいと思う。
開かれた学校づくり	◇キャリア教育の横断的展開と地域連携の強化 ◇学校運営協議会を窓口とした校内教育活動の展開	◇丹後学の充実…丹後学・ふるさと学習・体験学習の一体的展開 ◇学校運営協議会・地域学校協働活動と学校教育活動の実効性ある一体化 ◇学校運営協議会を窓口にした地域人材の活用…講話学習・授業への積極的活用 ◇学校支援ボランティアの積極的活用・拡充 ◇同窓会等と連携したふるさとと母校を愛する心情を育てる取組の推進 ◇地元高等学校との連携共同事業の活性化	○同窓会と連携したキャリアフェスティバルでは、町内出身で地元企業の代表取締役社長を講師にお招きして講話を拝聴し、生徒会本部とのトークセッションを行うことができた。 ○1年生での体験学習を見直し、地域の年配者に思いを聞かせて貰いふるさとを愛する取組の一助となった。 △地元高等学校との連携共同事業については、一定行えたものの、昨年度と比較すると活動回数は減少した。	・同窓会のふるさと講演会が本年度も生徒とともに開催できて良かった。生徒が地元で活躍している大人と対等に話ができる場面を持つことは本当に有意義だと思う。これからも、できるだけ協力していきたい。
次年度に向けた改善の方向性	◇学習や人間関係、家庭環境や生活習慣などについて、一人ひとりに対しての丁寧な指導・支援を展開し自立を促す。組織的かつ早期に対応を行い、特別支援教育の視点も踏まえながら、より一層学校不登校出現率を改善する。 ◇生徒指導提要における授業づくりの4つの視点『①自己存在感の感受 ②共感的な人間関係の育成 ③自己決定の場の提供 ④安全・安心な風土の醸成』に沿った授業改善を進め、「わかった」「たのしい」と思える学級や授業づくりを進めていく。 ◇ICTを活用し、個別指導・家庭学習などの充実、学習の場の提供などを促進し、個別最適な学びの実現に向け、環境整備や研修等を充実させる。			・久美浜中の子たちが、地域を知って、一旦都会に出て行っても、また地元で頑張ろうと思えるよう応援してほしいと思う。